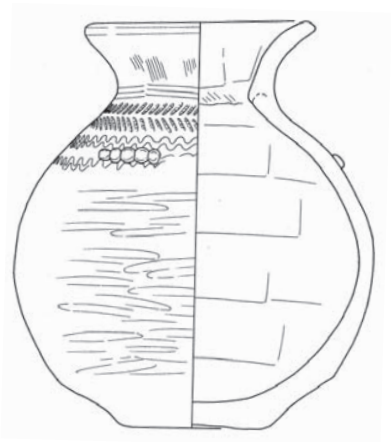
東原遺跡34次



2011

(財)浜松市文化振興財団

東原遺跡34次

2011

(財)浜松市文化振興財団

例　言

1．本書は、静岡県浜松市浜北区新原81－4番地外における東原遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は、国道152号線道路改良工事に伴う遠州鉄道㈱鉄道線の高架化工事に先立ち実施した。

3．発掘調査　現地調査　2009年7月2日～2010年3月10日
（契約日2009年7月1日）
整理報告　2010年6月12日～2011年3月10日
（契約日2010年6月11日）

4．調査体制　調査委託者　浜松市長　鈴木康友（浜北土木整備事務所）
調査受託者　財団法人 浜松市文化振興財団（理事長　伊藤修二）
調査指導機関　浜松市教育委員会
（浜松市生活文化部文化財課が補助執行）
調査担当者　浜松市生活文化部文化財課
安藤憲・小林剛・大野勝美・野口順平・熊谷洋子・藤森紀子

5．調査面積　2,420㎡

6．本書の執筆・編集は大野勝美が担当した。

7．遺構写真は安藤憲が撮影し、遺物写真は大野勝美が撮影した。

8．調査に係る費用は、全額浜松市が負担した。

9．調査に係る諸記録および出土遺物は、浜松市生活文化部文化財課が保管している。

凡　例

1．挿図の方位は、真北であり、標高は、海抜を示す。

2．本書の座標値は、世界測地系に準拠する。

3．遺構の略記号は下記の通り。
SB：竪穴住居跡　SD：溝　SK：土坑　SP：小穴　SX：不明土坑　SZ：方形周溝墓

4．本文中の引用・参考文献の表記は下記のように略す。
（財）浜松市文化協会→浜文協　（財）浜松市文化振興財団→浜文振
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所→静文研

目　次

第１章　調査の経緯と経過……１
　１．調査に至る経緯
　２．東原遺跡の調査歴
　３．調査の方法
　４．調査の経過

第２章　地理的・歴史的環境……８
　１．地理的環境
　２．歴史的環境

第３章　調査の成果……11
　１節　土壌と土層
　２節　検出遺構……14
　　１．概要
　　２．弥生時代の遺構
　　３．江戸時代の遺構
　　４．時期不明の遺構
　３節　出土遺物……43
　　１．縄文時代の遺物
　　２．弥生時代の遺物
　　３．江戸時代の遺物
　遺物観察表……62

第４章　総括・東原遺跡……66
　１節　弥生時代……66
　　１．立地
　　２．集落
　　３．住居
　　４．墓域
　　５．水田
　　６．土器
　　７．石器
　２節　その他の時代……89
　　１．縄文時代
　　２．古墳～奈良時代
　　３．江戸時代

参考文献……94

挿図目次

第１図　東原遺跡位置図……１
第２図　東原遺跡の調査歴図……３
第３図　グリッド配置図……４
第４図　周辺の遺跡分布図……９
第５図　基本土層図……11
第６図　縦断土層柱状図……12
第７図　風倒木痕模式図・他……13
第８図　遺構全体図……15
第９図　Ａ区遺構図……16
第10図　Ｂ・Ｃ区遺構図……17
第11図　SB01実測図……19
第12図　SB02実測図……20
第13図　SB03実測図……21
第14図　SB04･08･09実測図……22
第15図　SB05･06実測図……23
第16図　SB07実測図……24
第17図　SB10実測図１……25
第18図　SB10実測図２……26
第19図　SB11実測図１……27
第20図　SB11実測図２……28
第21図　SB12実測図……29
第22図　SB13実測図……29
第23図　SB14･15実測図……31
第24図　SB16･17実測図……32
第25図　SB18実測図……33
第26図　SB19実測図……34
第27図　SB20･21実測図……35
第28図　SB22･23実測図……37
第29図　SX03･05.SK06.SP01実測図……38
第30図　SD03･11実測図……40
第31図　SD06･07実測図……42
第32図　縄文時代石器実測図……43
第33図　SB01出土遺物……44
第34図　SB02出土遺物１……45
第35図　SB02出土遺物２……46
第36図　SB03･04出土遺物……47
第37図　SB05出土遺物……48
第38図　SB07･10出土遺物……49
第39図　SB11出土遺物（一括）……50
第40図　SB11･12･14出土遺物……52
第41図　SB15･17･18･20出土遺物……53
第42図　SB22出土遺物……54
第43図　SK06出土遺物１……55
第44図　SK06出土遺物２……56
第45図　SK06出土遺物３……57
第46図　SD･SK･SP出土遺物……58
第47図　包含層出土遺物１……59
第48図　包含層出土遺物２……60
第49図　江戸時代の遺物……61
第50図　東原遺跡遺構合成図（全時代）……65
第51図　西遠江と東遠江の違い……66
第52図　銅鐸関係品分布図（遠江）……67
第53図　弥生集落ネットワーク……68
第54図　東原遺跡遺構合成図（弥生時代）……70
第55図　円形遺構周辺図……71
第56図　竪穴住居の規模……72
第57図　第33次調査SB14……73
第58図　置石炉と環状堀方の分布図……74
第59図　環状堀方をもつ住居の集成……75
第60図　竪穴住居群と方形周溝墓群……77
第61図　東原遺跡の墓域出土土器……79
第62図　粘土帯と装飾高坏の分布図……81
第63図　装飾高坏集成図……83
第64図　東原・芝本遺跡出土土器１……85
第65図　東原・芝本遺跡出土土器２……87
第66図　律令期の西遠江……90
第67図　東原遺跡遺構合成図（奈良時代）……91
第68図　東原遺跡遺構合成図（江戸時代）……93

挿表目次

表１　東原遺跡調査歴…… 2
表２　東原遺跡の周辺遺跡…… 9
表３　各次調査の土層対応表…… 11
表４　出土遺物観察表…… 62
表５　竪穴住居の規模（東原遺跡）…… 72
表６　炉に石が伴う住居（東原遺跡）…… 74
表７　西遠江周辺の土器様式…… 78
表８　粘土帯の有無比率…… 80
表９　東原・芝本遺跡出土石器・石製品一覧表…… 88

写真図版

図版１　A　A区全景（南から）
　　B　A区中央部（北から）
図版２　A　B－１・２区全景（北から）
　　B　B－１・２区全景（南から）
　　C　B－３区全景（南から）
　　D　C区全景（北から）
図版３　A　SB01（南から）
　　B　SB02（南から）
図版４　A　SB04･05･08･09（東から）
　　B　SB03（西から）
　　C　SB05（南から）
　　D　SB06（西から）
　　E　SB07（東から）
図版５　A　SB10床面（東から）
　　B　SB10完掘（東から）
図版６　A　SB11検出時（東から）
　　B　SB11完掘（東から）
図版７　A　SB14･16･17（南から）
　　B　SB14（南から）
　　C　SB15（東から）
　　D　SB18（南から）
　　E　SB19（東から）
図版８　A　SB20･21（北から）
　　B　SB22検出時（南から）
　　C　SB22完掘（北から）
　　D　SB23完掘（南から）
　　E　SK06（東から）
図版９　A　SB11一括土器（東から）
　　B　SP01壺出土状況（南から）
　　C　SK05（南から）
　　D　SD17･18（南から）
　　E　SD06（北から）
　　F　SD11（東から）
図版10　出土遺物
図版11　出土遺物
図版12　出土遺物
図版13　出土遺物

第１章　調査の経緯と経過

１．調査に至る経緯

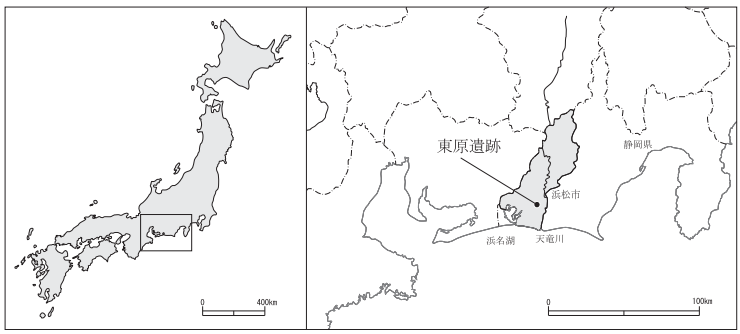
東原遺跡は浜松市浜北区（旧浜北市）新原の河岸段丘上に位置する。遺跡は古くからその存在が知られており、1960年代から地元の県立浜名高等学校史学クラブ（のちに史学部）によって小規模ながら発掘調査が継続して行われてきた。近年では周辺の道路改良工事等に伴い、旧浜北市教育委員会、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所、財団法人浜松市文化振興財団による大規模な発掘調査が行われた。これらの団体による発掘調査はこれまでに30回以上に及び、東原遺跡における各時代の集落の様相などが徐々に明らかになってきている。

浜松市浜北区は、南北方向へ国道152号線と遠州鉄道が貫き、東西方向へ国道362号線と天竜浜名湖鉄道が貫く、交通の要衝地帯となっている。近年はこれに加え、東西方向へ貫く第二東名高速道路の建設工事が行われており、また浜北区に第二東名インターチェンジが設置されることになっている。それに伴い周辺道路の交通量増加への対策および第二東名インターチェンジへのアクセス道路の整備が必要となり、国道152号線バイパスの延長線上の浜北区新原から天竜区山東までの7.9㎞の区間が浜北～天竜バイパスとして整備されることになった。

当初、国道152号線バイパス建設は静岡県浜松土木事務所の事業として進められてきたことから、東原遺跡の発掘調査は浜松土木事務所から委託を受けた財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が静岡県教育委員会文化課の指導のもとに実施してきた。しかし平成19年４月１日に浜松市が政令指定都市の指定を受けたため、国道152号線バイパス建設事業は静岡県浜松土木事務所から浜松市浜北土木整備事務所に移管された。事業の移管により東原遺跡の発掘調査も静岡県から浜松市へ調査主体が移り、前回の第33次調査は浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部生涯学習課文化財担当が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施した。そして今回の第34次調査も浜松市教育委員会の指導（浜松市生活文化部文化財課が補助執行）のもと、財団法人浜松市文化振興財団が実施することになった。

２．東原遺跡の調査歴

東原遺跡は浜名高等学校による第１次調査を契機とし、その後の学術調査や開発に伴う調査および道路整備に伴う調査など多くの発掘調査が行われている。その回数は今回の調査を含めて34回に及ぶ。詳細については、

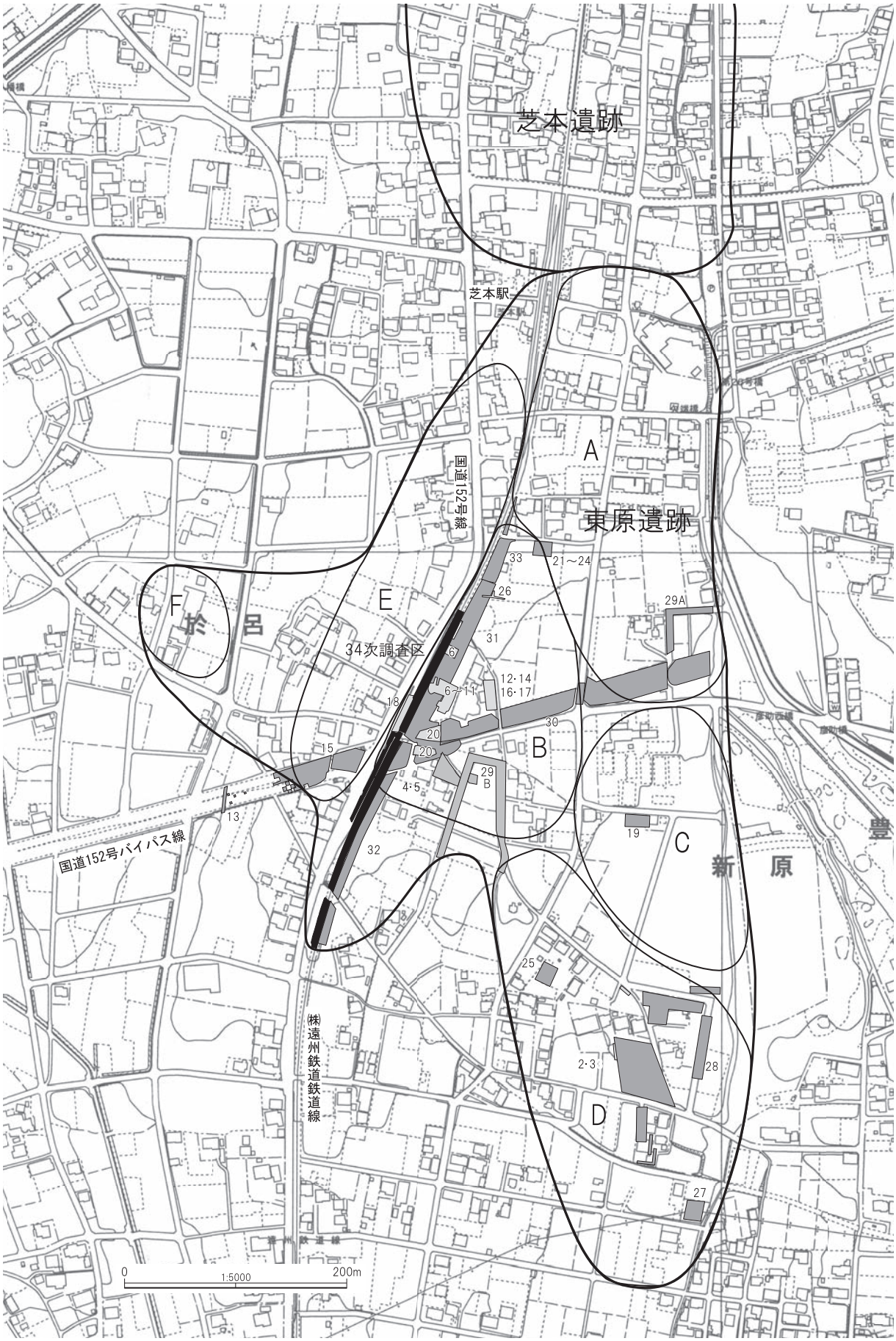


第１図　東原遺跡位置図

表１の調査歴一覧表と第２図の調査歴図に示した。これらの調査の中には、調査地点が不明なもの（第１次調査）、調査報告書等が未刊のもの（第19次調査、第21～26次調査）がある。今回、表１および第２図を作成するにあたって、公表された図面と資料を参考にして、正確な位置および面積等へ訂正した。

調査次	調査地点	調査年	主な検出遺構	調査主体	調査原因	備　考
第１次	Ｆ地点	1964	遺構・遺物なし	浜名高等学校		調査地点不明
第２次	Ｄ地点	1965	古墳時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校１次	浜名高校1968
第３次	Ｄ地点	1968		浜名高等学校	浜名高校２次	浜北市教委1981
第４次	Ｂ地点	1969	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校３次	浜名高校1970
第５次	Ｂ地点	1970		浜名高等学校	浜名高校４次	
第６次	Ｂ地点	1971	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校５次	浜名高校1974・1979
第７次	Ｂ地点	1972		浜名高等学校	浜名高校６次	
第８次	Ｂ地点	1973		浜名高等学校	浜名高校７次	
第９次	Ｂ地点	1975		浜名高等学校	浜名高校８次	
第10次	Ｂ地点	1976		浜名高等学校	浜名高校９次	
第11次	Ｂ地点	1977		浜名高等学校	浜名高校10次	
第12次	Ｂ地点	1978		浜名高等学校	浜名高校11次	
第13次		1978	江戸時代～明治時代の溝	浜北市教育委員会	152バイパス１次	浜北市教委1983
第14次	Ｂ地点	1979	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校12次	浜名高校1983
第15次	Ｅ地点	1979	江戸時代～明治時代の溝	浜北市教育委員会	152バイパス２次	浜北市教委1980
第16次	Ｂ地点	1980	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校13次	浜名高校1983
第17次	Ｂ地点	1981		浜名高等学校	浜名高校14次	浜名高校1983
第18次	Ｂ地点	1981	弥生時代後期	浜北市教育委員会	152バイパス３次	浜北市教委1982
第19次	Ｃ地点	1982	遺構・遺物なし	浜名高等学校	浜名高校15次	
第20次	Ｂ地点	1982	弥生時代後期	浜北市教育委員会	152バイパス４次	浜北市教委1983
第21次	Ａ地点	1983	弥生時代後期の竪穴住居	浜名高等学校	浜名高校16次	
第22次	Ａ地点	1984		浜名高等学校	浜名高校17次	
第23次	Ａ地点	1985		浜名高等学校	浜名高校18次	
第24次	Ａ地点	1986		浜名高等学校	浜名高校19次	
第25次	Ｄ地点	1987	遺構・遺物なし	浜名高等学校	浜名高校20次	
第26次	Ｂ地点	1988	竪穴住居？	浜名高等学校	浜名高校21次	
第27次	Ｄ地点	1990	古墳時代終末期	浜北市教育委員会	送電線鉄塔建設	浜北市教委1991
第28次	Ｄ地点	1994	古墳時代終末期	浜北市教育委員会	県営畑総１次	浜北市教委1994
第29次	Ａ・Ｂ地点	2000	弥生時代　竪穴住居16軒 土器集積	浜北市教育委員会	県営畑総２次	浜北市教委2002
第30次	Ａ・Ｂ地点	2004	弥生時代　竪穴住居20軒 土器集積１基 方形周溝墓８基 土器棺墓３基 奈良時代　竪穴住居10軒 江戸時代　区画溝 屋敷地	静岡県埋蔵文化財調査研究所	152バイパス５次	静岡埋文研2007
第31次	Ｂ地点	2005	弥生時代　竪穴住居53軒	静岡県埋蔵文化財調査研究所	遠鉄高架１次	
第32次	Ｂ地点	2006	弥生時代　竪穴住居３軒 江戸時代　墓２基 建物跡１棟 区画溝	静岡県埋蔵文化財調査研究所	遠鉄高架２次	
第33次	Ａ・Ｂ地点	2007	弥生時代　竪穴住居34軒 土器集積 江戸時代　区画溝	浜松市文化振興財団	遠鉄高架３次	浜松市2008
第34次	Ｂ地点	2009	弥生時代　竪穴住居23軒 土器集積 江戸時代　区画溝	浜松市文化振興財団	遠鉄高架４次	本書報告2011

表１　東原遺跡調査歴



第 2 図　東原遺跡の調査歴図

３．調査の方法

調査区の名称　今回の調査地は遠州鉄道鉄道線の線路敷であるため、南北に非常に長い調査区であった。道路工事等の工程上の必要性から、調査区をＡ区、Ｂ区、Ｃ区の３区に分割して順次、発掘調査を実施した。Ｂ区においては、一次掘削土を場外に搬出するための出入口の確保および場内に二次掘削土置場を確保するため、更に３分割して調査を実施した。B1～B6グリッドをB-1区、B7～B16グリッドをB-2区、B17～B21グリッドをB-3区と呼称する。Ｃ区も同様の理由で２分割し、C1～C5グリッドをC-1区、C6～C10をC-2区とする。以上の結果、今回の第34次発掘調査では、全体を６分割して調査したことになる。

基準点の設置　測量の基準となる基準点杭（4K1，4K2）を設置した。各点の数値は次の通り。

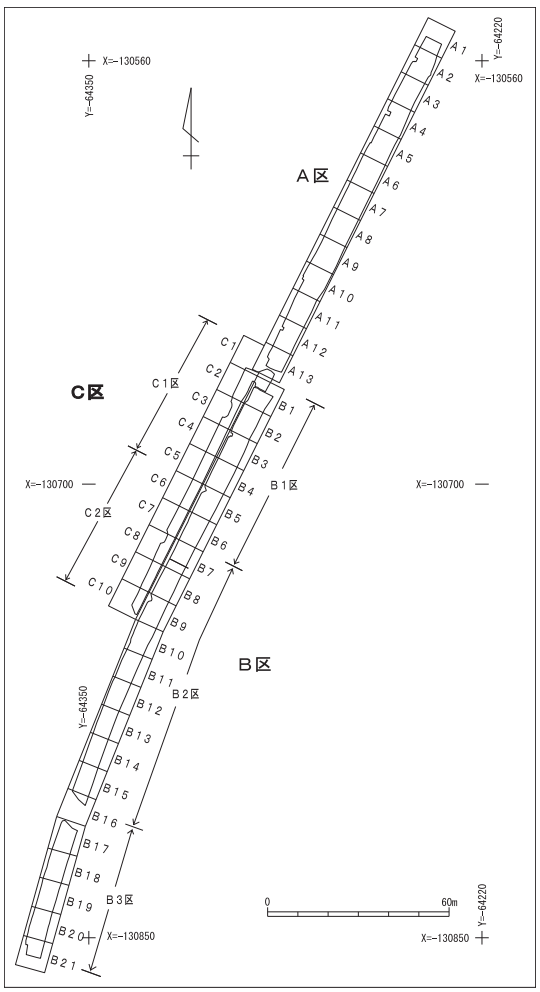
4K1は、日本測地系（X=-131,015.133　Y=-64,010.850)、世界測地系（X=-130,661.003　Y=-64,293.108)、標高29.748mである。4K2は、日本測地系（X=-130,914.924　Y=-63,948.972)、世界測地系（X=-130,560.796　Y=-64,231.229)、標高29.671mである。この２点を基にして、南側のＢ区とＣ区の測量の基準となる２点（4K3，4K4）を設置した。

グリッド設定　包含層出土土器の取上げと略図の基準とするために、各調査区に10m四方の方形グリッドを設定した。Ａ区は北から順にA1～A13グリッド、Ｂ区は北から順にB1～B21グリッド、Ｃ区は北から順にC1～C10グリッドと呼称する。ただしＢ区は調査区が湾曲している関係上、グリッド配置も少しずつ湾曲させた。

これらのグリッドはあくまでも簡易的なものであり、遺構実測図、土器出土状態図、土層図等は上記４点（4K1～4K4）の基準点を基にトータル・ステーションで測量・作図した。

表土除去　表土は重機（バック・フォー）を用いて掘削・除去し、廃土（一次掘削土）は２台の４トンダンプカーで場外の仮置き場へ運搬して保管した。バック・フォーのバケットには平爪を装着し、遺構・遺物の有無を確認しつつ、少しずつ慎重に掘り進めた。そしてバック・フォーによる掘削を遺物包含層の上面で止めた。

遺構検出・掘削　金鍬を用いて人力により遺物包含層を掘削・除去し、鋤簾（じょれん）を用いて遺構検出を計った。検出した遺構は半裁もしくは土層帯を残して慎重に掘り下げ、細部は移植ゴ



第３図　グリッド配置図

テや竹ベラ等で仕上げた。竪穴住居等の主要な遺構は、慎重に土層観察をして埋没状況の把握に努め、土層断面図を作成した。

図面作成　遺構平面図は、上記４点の基準点を基にトータル・ステーションを設置して、遺跡管理システム（CAD）にて測量および作図し、最終的には縮尺20分の１で印刷・保存した。土層断面図は縮尺20分の１、遺物出土状態図は縮尺10分の１で作成した。土層断面図と立面の図化にあたっては、４点の基準点の標高値を基準とした。

写真撮影　カメラは主に６×７判を用い、他に35㎜判とコンパクト・デジタルカメラを使用して撮影した。フィルムはモノクロとカラーリバーサルを使用した。作業工程のメモ写真等はコンパクト・デジタルカメラを使用した。また高所からの撮影にはローリングタワー（３段）を用いた。

※第34次発掘調査参加者

現地調査　石山勝弘　岩田武道　植松雅子　大川喜平　大城光明　大城光義　鈴木みな
武田裕美　辻和子　湊保代　渡辺時次　渡辺治男

整理作業　伊熊むつ子　加藤由美子　島田智佳子　林至美　水島絵里　森下朋子

４．調査の経過

・現地作業

（2009年）

７月25日（土）　プレハブ現場事務所の設置
27日（月）・28日（火）　Ａ区ガードフェンスの設置
30日（木）　現場作業の開始　Ａ区の表土掘削
31日（金）　重機によりＡ区の表土掘削
８月３日（月）　Ａ区の表土掘削　調査作業員の初日
４日（火）　包含層掘削除去（13～14グリッド）
５日（水）　遺構検出　竪穴住居７～８軒検出
６日（木）　遺構検出・精査（SB15・他）
７日（金）　遺構検出・精査（SB14・他）
10日（月）　雨天のため現場作業休止
11日（火）　遺構検出（SB01・SB02）
12日（水）　遺構検出　見学者９名（地域住民）
13日（木）　見学者15名（地域住民・他）
17日（月）　見学者４名（地域住民）
18日（火）　遺構検出　見学者（浜名高生５名）
19日（水）　遺構検出（SB03・SB10）
20日（木）　浜名高校史学部14名発掘体験

１．発掘作業風景

２．竪穴住居の精査

8月21日（金）　遺構精査（SB15・SK06）
24日（月）　遺構検出（A5～A8グリッド）
25日（火）　遺構精査
26日（水）　遺構精査（SB10・SB11）
27日（木）　遺構精査（SB05）
28日（金）　雨天のため現場作業休止
31日（月）　雨天のため現場作業休止
9月1日（火）　遺構精査（SB18）
2日（水）　遺構精査（SB14・SB16・SB17）
3日（木）　中瀬小学校4年生見学（116名）
4日（金）　遺構精査（SB16・SB18）
7日（月）　遺構精査（SB04・SB05）
8日（火）　遺構精査（SB07・SB08・SB09）
9日（水）　中瀬小学校6年生見学（106名）
10日（木）　遺構精査　SB18実測
11日（金）　遺構測量　SB16・SB17実測
14日（月）　A区を掃除　全景写真撮影の準備
15日（火）　雨天のため現場作業休止
16日（水）　A区を掃除　全景写真撮影
17日（木）　A区の補足調査　A区遺構測量
18日（金）　A区調査完了　現地説明会の準備
19日（土）　現地説明会　見学者156名
24日～26日　B区フェンス設置　電気設備移設
28日（月）　重機によりB区の表土掘削開始
10月1日（木）　B-1区・作業員による掘削開始
5日（月）　包含層除去・遺構検出（SX03）
6日（火）　雨天のため現場作業休止
7日（水）　雨天のため現場作業休止
8日（木）　雨天のため現場作業休止
9日（金）　遺構検出（SB20・SB21）
13日（火）　遺構検出（SB22）
14日（水）　遺構検出（SB23）
15日（木）　B-1区の全景写真撮影　実測
16日（金）　B-1区の補足調査
19日（月）　B-2区北半の表土掘削
20日（火）　B-2区北半の表土掘削

3．浜名高校生・発掘体験

4．中瀬小学校生・現場見学

5．中瀬小学校生・土器見学

6．東原遺跡・現地説明会

10月21日（水）　B-2区南半の表土掘削
22日（木）　曳馬中学校２年生職場体験（５名）
23日（金）　職場体験２日目
26日（月）　雨天のため現場作業休止
27日（火）　遺構掘削・精査（SD06）
28日（水）　遺構掘削・精査
29日（木）　B-2区の全景写真撮影
11月４日（水）　B-3区の表土掘削開始
５日（木）　B-3区の表土掘削
６日（金）　静岡第１テレビ収録　遺構実測
９日（月）　遺構掘削（SD15・16）
10日（火）　気賀高校１年生職場体験（５名）
11日（水）　職場体験２日目
12日（木）　職場体験３日目　B-3区写真撮影
（側道付替え工事のため現場作業休止）
27日（金）　重機によりC-1区の表土掘削
30日（月）　C-1区の表土掘削
12月１日（火）　遺構検出（道路工事による撹乱多し）
２日（水）　遺構掘削（撹乱坑が多い）
３日（木）　C-2区表土掘削
４日（金）　遺構検出（深部まで撹乱）
７日（月）　遺構掘削（撹乱坑が多い）
８日（火）　遺構精査　C区全体の掃除
９日（水）　C区写真撮影　現場作業員最終日
15日（火）　発掘道具および置場の片付け
16日（水）　発掘道具・資材等の片付け
12月28日までに発掘資材および備品等を移動、
プレハブの解体を行い、現地から完全
に撤収
（2010年）１月４日～３月10日　基礎整理

・整理作業
（2010年）６月12日～（2011年）３月10日
土器注記　土器接合　土器復元　土器・石器実測
遺物撮影　図面編集　写真編集　原稿執筆　校正

7．SB10の掘削作業

8．曳馬中学校生・職場体験

9．土器実測作業

10．土器接合復元作業

第２章　地理的・歴史的環境

１．地理的環境

東原遺跡は静岡県の西部、浜松市浜北区新原に所在する。浜北区は、旧浜北市が平成17年７月に旧浜松市と合併したのち平成19年４月の政令指定都市への移行により旧浜北市域を踏襲して成立した区であり、４つの異なる地形から成り立っている。北部の山地とそれから伸びる丘陵、西部の三方原台地、中央部の河岸段丘、東部の沖積平野と天竜川であり、河岸段丘は更に上段の富岡面、中段の姥ヶ谷面、下段の浜北面に分かれる。そしてそれらの形成には天竜川が大きく関わっている。

天竜川は長野県の諏訪湖を源流とし、最終的に太平洋に注ぎ込む全長約216㎞の大河である。流域の大部分は急峻な山岳地帯であるが、浜松市天竜区二俣町に至って平野部に出て、東側の磐田原台地と西側の三方原台地の間に広い天竜川平野を形成している。現在は平野部を直線的に南流しているが、この流路は近世以降に度重なる河川改修により整備されたものであり、古い時代には「あばれ天竜」の名の示す通り、広い平野を自由気ままに本流と支流が入り乱れて流れていたと推定されている。そしてたびたび増水や氾濫をひきおこし、流域住民に大きな被害を与えた。

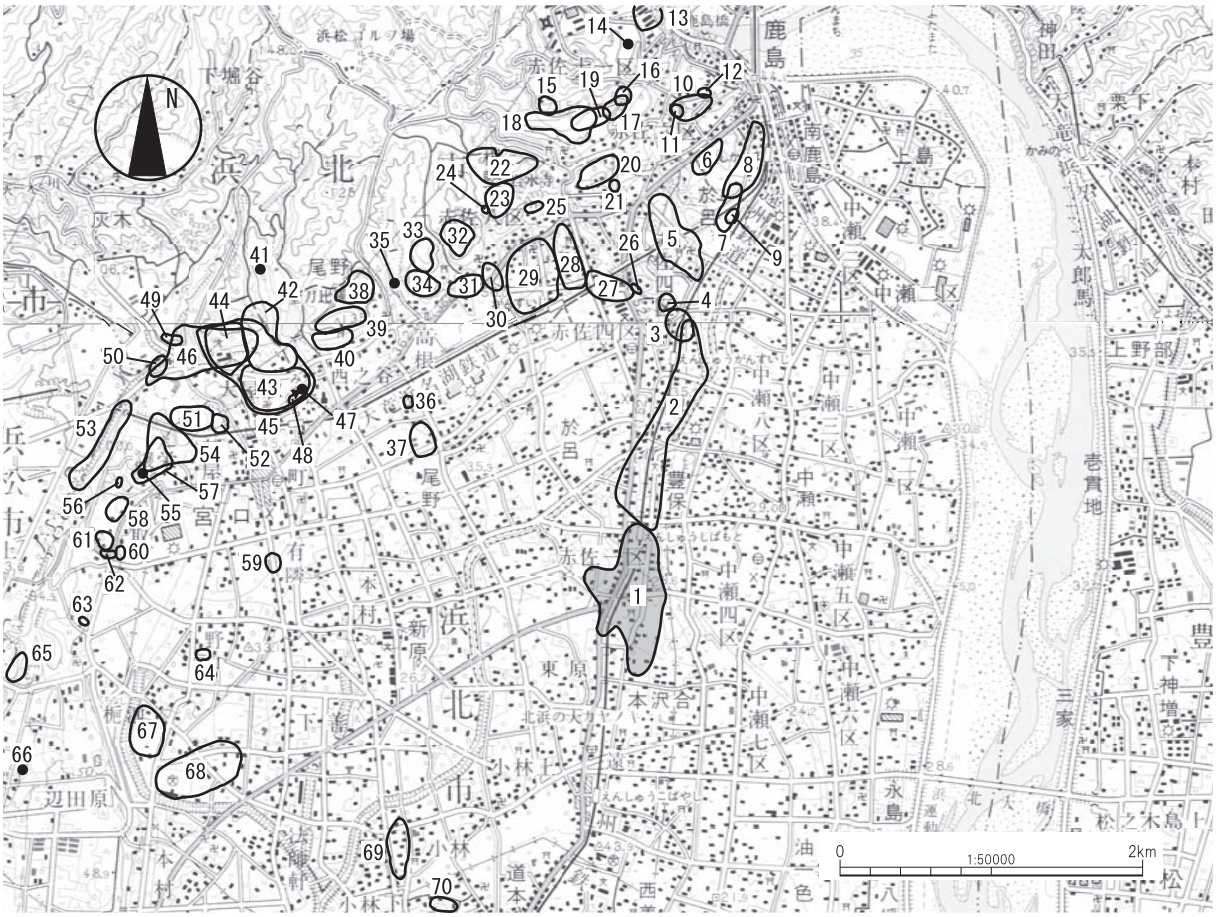
東原遺跡は河岸段丘浜北面の東端に位置し、東の天竜川平野を眼前に望む。南北に細長く自然堤防が広がり、芝本遺跡と共にその上に立地している。自然堤防上にも若干の地形変化と高低差が確認でき、今回の調査地は西側の国道152号線沿いに伸びる浅い谷へなだらかに傾斜している。

２．歴史的環境

旧石器時代　天竜川以東、特に磐田原台地周辺では旧石器時代の遺跡が多く確認されているが、天竜川以西では旧石器時代の遺跡が非常に少ない。浜北区には、北部山地の石灰岩地帯から旧石器人の骨（浜北人）が発見されたことで有名な根堅遺跡(表2-25)がある。近年の科学的年代測定法による旧石器人の再検討が進む中で、浜北人は旧石器人と確認された数少ない事例であり、注目される。この他に黒曜石製のナイフ形石器や細石刃・石核が出土した梶池遺跡(67)が知られている。

縄文時代　縄文時代の遺跡は北部山麓や三方原台地を中心に分布し、沖積平野では確認されていない。近年の第二東名高速道路建設に伴う発掘調査で、中通遺跡(31)の草創期～早期の集石炉群や大屋敷遺跡(45)の早期の土器等が発見されている。中期以降の遺跡としては、染地石遺跡、富岡大谷遺跡、梶池遺跡(67)があり、梶池遺跡では住居跡が発見されている。また北谷遺跡(20)では多数の石鏃や打製石斧・磨製石斧が表面採集されており、石器製作工房の可能性が指摘されている。

弥生時代　前期の遺跡として、水神平式土器が出土した芝本遺跡Ｂ地点が知られている。中期は、芝本遺跡Ｂ地点、東原遺跡Ｆ地点、大屋敷遺跡があり、芝本遺跡Ｂ地点で中期中葉の竪穴住居が発見されている。後期は、今回報告する東原遺跡や北側に位置する芝本遺跡が代表的な弥生集落遺跡として知られている。近年の発掘調査の進展に伴い、東原遺跡と芝本遺跡が同一集落である可能性



第 4 図　周辺の遺跡分布図

番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名	番号	遺 跡 名
1	東原遺跡	25	根堅遺跡	49	北新屋 A 古墳群
2	芝本遺跡	26	篠場瓦窯跡群	50	北新屋 B 古墳群
3	芝本古墳群	27	上海土遺跡	51	新屋遺跡
4	旧赤佐中学校内遺跡	28	大門西遺跡	52	新屋古墳群
5	御馬 ヶ池古墳群	29	中屋遺跡	53	譲栄古窯跡群
6	向山 A 古墳群	30	寺海上遺跡	54	吉名古窯跡群
7	向山 B 古墳群	31	中通遺跡	55	新池東古墳
8	向山Ⅰ遺跡	32	雲岩寺 A 古墳群	56	新池古窯跡群
9	向山Ⅱ遺跡	33	雲岩寺 B 古墳群	57	譲栄Ⅰ遺跡
10	向野古墳群	34	雲岩寺 C 古墳群	58	譲栄Ⅱ遺跡
11	向野Ⅰ遺跡	35	東ノ谷瓦窯跡	59	野口前遺跡
12	向野Ⅱ遺跡	36	篁屋敷	60	土取Ⅰ遺跡
13	百々原遺跡	37	長者屋敷	61	土取Ⅱ遺跡
14	北根堅古墳	38	高根山 A 古墳群・高根山遺跡	62	土取古窯跡群
15	勝栗山Ⅰ遺跡	39	高根山 B 古墳群	63	天神山古窯跡群
16	勝栗山Ⅱ遺跡	40	高根山 C 古墳群	64	野口遺跡
17	勝栗山 A 古墳群	41	西ノ谷古窯跡	65	梶池古墳群
18	勝栗山 B 古墳群	42	大屋敷 A 古墳群	66	辺田原古墳
19	勝栗山墳墓群	43	大屋敷 B 古墳群	67	梶池遺跡
20	北谷遺跡	44	大屋敷 C 古墳群	68	清水遺跡
21	中坊遺跡	45	大屋敷遺跡	69	新原古墳群
22	泉A 古墳群	46	大屋敷古窯跡群	70	山の神遺跡
23	泉B 古墳群	47	興覚寺後古墳		
24	泉墳墓	48	大屋敷墳墓群		

表 2　東原遺跡の周辺遺跡

が指摘されている。詳細については後述（第４章）するが、もし同一集落であれば推定範囲は約140,000㎡にも及び、明らかにその規模からみて、天竜川平野北部における拠点集落と考えられる。他に山林遺跡、掘谷洞窟遺跡、高根山遺跡（38）、大屋敷遺跡（45）がある。

古墳時代　古墳時代に入ると、浜北区の丘陵や台地に多くの古墳が築造される。最初に築造された古墳として、全長56.3mを測る赤門上古墳（前方後円墳）が存在する。発掘調査の結果、三角縁神獣鏡等の遺物が出土し、前期後半の築造と考えられている。中期の古墳は内野上古墳群、権現平山古墳群、神明社上古墳群等が赤門上古墳と同じ三方原台地端に多く築造されている。また、中期後半から後期初頭の特殊な古墳として二本ヶ谷積石塚古墳群が存在する。河岸段丘の侵食谷に立地し、東谷群と西谷群の２群に分かれて24基の積石塚古墳が確認されている。後期には、古墳の築造数は爆発的に増加し、北部の丘陵上や西部の三方原台地縁辺部に群集墳が築造される。近年の第二東名高速道路建設や国道バイパスの建設工事に伴って大屋敷古墳群（42～44）、高根山古墳群（38～40）、雲岩寺古墳群（32～34）の調査が行われ、多数の後期古墳の資料が集積されている。

集落については、周辺部に多数の古墳群が存在する割には、ほとんど確認されていない。前期～中期は、遺物散布地は存在するものの、明確な遺構は確認されていない。後期は、東原遺跡で数軒の住居を確認しているが、あまりにも軒数が少ない。

古代　古代に入ると窯業が盛んになる。第二東名高速道路建設に伴い調査された篠場瓦窯跡群（26）で白鳳期の瓦の窯跡が検出された。河岸段丘の斜面を利用した構造の異なる３基の窖窯が築造されており、瓦の他に須恵器も焼成していたことが明らかになった。遠江における白鳳期の瓦窯としては、構造の判明した唯一の事例として注目される。瓦生産は奈良時代にも継続して行われており、東ノ谷瓦窯跡（35）から奈良時代中期の瓦が出土している。また平安時代以降には灰釉陶器の生産が行われるようになる。吉名古窯跡群（54）は操業が９世紀末～10世紀初頭であり、静岡県内で最初に操業を開始した灰釉陶器窯と考えられる。他に灰釉陶器窯として大屋敷古窯跡群（46）、譲栄古窯跡群（53）、新池古窯跡群（56）がある。

この時期の集落は向山Ⅰ遺跡（８）や東原遺跡で竪穴住居が検出されている。また清水遺跡（68）では奈良～平安時代の土器が発見されている。須恵器・灰釉陶器の比率が高く、獣足付壺片が含まれていることや、古来より交通の要衝地となっている場所に位置することから、麁玉郡の郡衙推定地にあげられている。

中世　浜北区の窯業生産は中世においても引き継がれて、山茶碗の生産が土取古窯跡群（62）、栃池古窯跡群、西ノ谷古窯跡などで行われている。特筆すべき遺跡は、第二東名高速道路建設に伴う発掘調査で発見された中屋遺跡があげられる。その後、旧浜北市により範囲確認調査が行われ、南北180～190m、東西130～140mの土塁を伴う方形区画溝が確認された。この遺構は当地方に居住していた有力者の大型居館跡と推定される。木製黒漆螺鈿鞍や呪符木簡が出土している。

近世　幕藩体制の成立と共に、浜北区の各村は天領や旗本の知行地となり、その支配下に置かれた。当時の天竜川は大天竜と小天竜の２つの流路に分かれ、小天竜は東原遺跡の東側の段丘崖を削って南流していた。その証拠に、延宝三年（1675）に築造された彦助堤が現在も近くに残っている。東原遺跡では、江戸時代後期の区画溝で囲まれた屋敷地が確認されている。

第３章　調査の成果

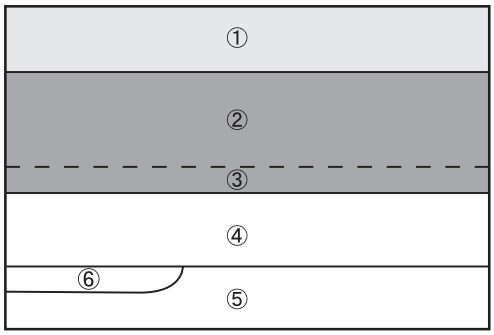
第１節　土壌と土層

黒ボク　最初に、この地域だけにある土壌の特徴について触れておきたい。東原遺跡が所在する河岸段丘浜北面だけに分厚く堆積している、通称“黒ボク”と呼ばれている黒褐色系シルトについてである。静岡県の天竜川以西では、ここだけに見られる土壌であり、畑一面を真っ黒い土が覆う景観をつくりだしている。この黒ボクは天竜川によって運ばれてきた植物腐植分と推定されており、非常に豊富な養分を含む有機質土で、植物の成長を大きく促進する。そしてこの土壌の存在が、浜北地区を園芸用植木および苗木の一大生産地へと押し上げた要因の一つとなっている。しかし発掘調査においては色々な悪影響を及ぼしている。土色の違いによる遺構識別を難しくしている点、風倒木痕や木の根の撹乱により遺構形状を正確に把握できない点であるが、詳細については後述する。

基本土層　今回の調査の基本土層は過去の調査結果とほぼ同様で、１～６層まで確認できた。南北に細長い調査区であるため、地点によって若干異なる点もあるが、おおむね全域で第５図の層位関係を把握することができた。１～３層が黒褐色系のシルト層で、これが黒ボクと呼ばれる土壌に相当する。なお、これまでに行われた調査の基本土層との対応関係は表３に示す。

１層は暗褐色シルト層で、土にしまりがある。線路敷の盛土であり、鉄道が敷かれた大正時代以前は耕作土であったと推測される。調査区の北半（主にＡ区）で、弥生土器片を多く含んでいる。

２層は黒褐色シルト層で、粘性・しまりともに弱い。地点によって異なり、20～50㎝程度の厚さ



第５図　基本土層図

東原15次調査 浜北市(1980)	東原34次調査 本報告(2011)	東原33次調査 浜松市(2008)	東原30～32次調査 県埋文研(2007)	調査29次調査 浜北市(2002)
Ⅰ層 表土	１層 暗褐色シルト(盛土)	Ⅰ 暗褐色シルト	１層 暗褐色シルト	表　土
Ⅱ層 黒色土	２層 黒褐色シルト(包含層)	Ⅱ 暗黒褐色シルト	２層 暗黒褐色シルト	黒色土(黒ボク土)
Ⅲ層 黒褐色土	３層 暗褐色シルト(漸移層)	Ⅲ 暗褐色シルト	３層 暗褐色シルト	暗褐色土
Ⅳ層 赤黄色土	４層 明黄褐色シルト(地山)	Ⅳ 褐色シルト	４層 褐色シルト	明黄褐色土
Ⅵ層 礫	５層 灰褐色砂質シルト(礫層)	Ⅴ 暗褐色シルト	５層 灰褐色砂質シルト	
Ⅴ層 砂質赤黄色土	６層 黄褐色粘質シルト			

表３　各次調査の土層対応表

層で、土器片を多く含んでいる。

3層は暗褐色シルト層で、しまりが弱い。2層とほぼ同色・同質の土壌で、分層に困難が伴う。過去の調査において、遺構の掘り込みはこの層の上面から行われていると指摘されている。

4層は明黄褐色シルト層で、やや粘性が強い。この層が地山面に相当するが、植物の根や動物の巣穴によって撹乱され、黒褐色のまだら模様が数多く見られる。

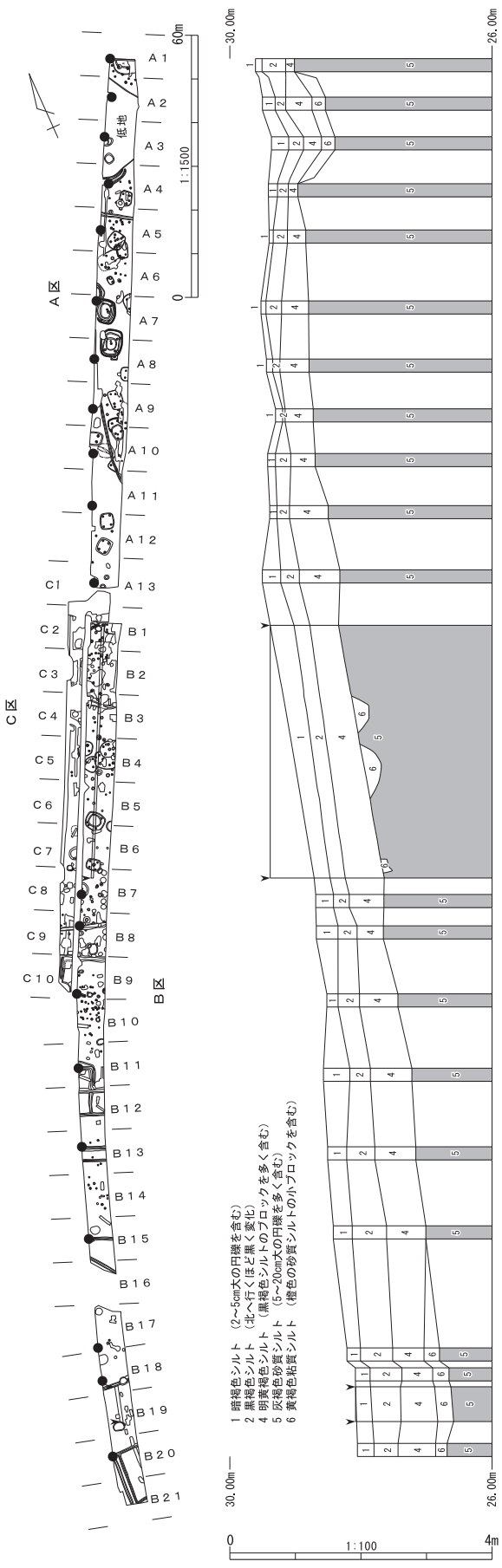
5層は灰褐色砂質土層で、5～30cm程度の円礫を多く含んでいる。堅くしまっており、ツルハシでも簡単に掘れない程である。1～4層と比較して透水性が高い。

6層は黄褐色粘質シルト層で、低地や幅の広い溝の底部だけに堆積している。第6図のA2～A3グリッド、B3～B4グリッド、B15～B21グリッドなどで認められる。

遺構検出面　一般的に丘陵や河岸段丘上の発掘調査では遺構検出が容易である場合が多いが、東原遺跡は例外であった。その原因は黒ボクにある。少なくとも弥生時代には堆積しており、黒ボク上が当時の生活面であった。基本土層図（第5図）では、3層の上面にあたる。したがって、この面で精査すれば遺構の掘り込みが検出されるはずであり、過去の調査でも確認されたと言われている。しかし実際にこの面を精査してみると、ぼんやりと遺構らしきものが見えるが、輪郭が分からない。

黒色の土からやや色合いの異なる黒色部分を探すという難しい作業であり、これを短期間で行うことは事実上不可能である。そこで検出面を少し下げて、4層（地山）上面に設定した。

これで明瞭に遺構が検出できると期待したが、まだ問題があった。4層は単一な土壌ではなく、長年の間に木の根や動物の巣穴によって撹乱されている。そのために遺構（特に小穴）との識別が難しい。



第6図　縦断土層柱状図

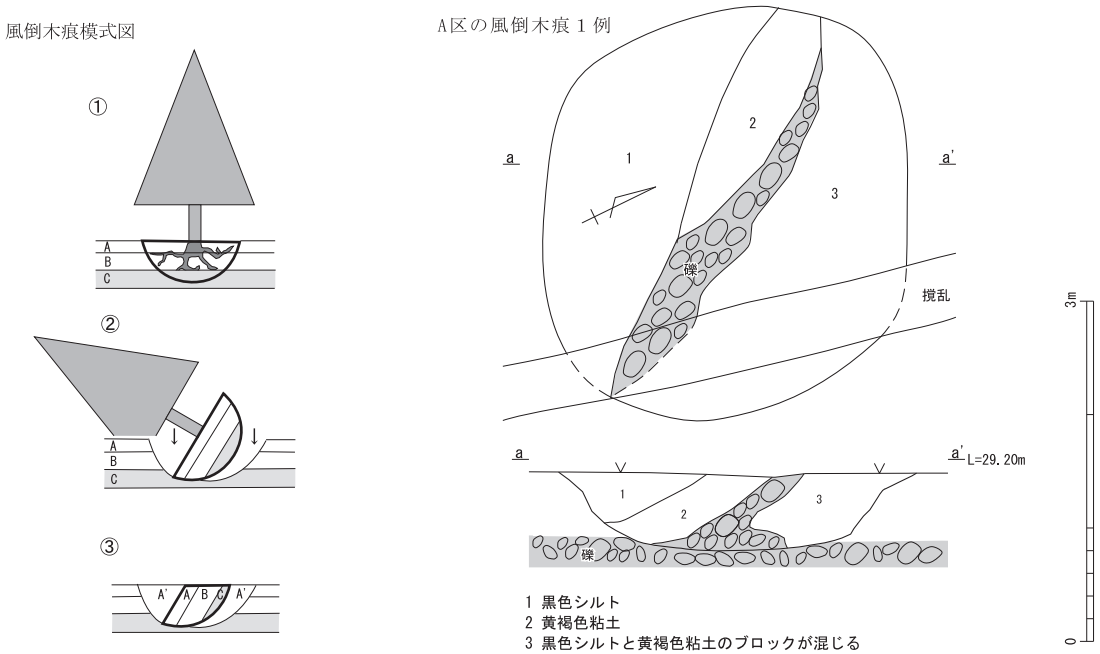
縦断地形　第６図は調査区を南北方向に縦断する土層図と土層柱状図で、２箇所の土層トレンチと20箇所の１m四方の試掘坑の実測結果を合成したものである。弥生時代のおおよその地形が推測できる。地形は、北端のA2～A4グリッドに窪地があり、その後は平坦部が続き、A13グリッドから徐々に傾斜が始まる。B3～B4グリッド付近に２条の窪地が認められ、そしてやや緩傾斜地があり、B8グリッドから傾斜は更に急になっている。弥生集落は高い平坦地に立地し、やや傾斜し始めたB7グリッド付近に南限がある。近くにある２条の窪地が何らかの影響を及ぼした可能性もある。

風倒木痕　東原遺跡ほど、風倒木痕であることがハッキリと分かり、また数多く認められる遺跡は他には無いと思われる。今回の調査では、幅８m前後の狭い調査区にも関わらず、約10m毎に一箇所ほどの頻度で大きな風倒木痕が確認された。小さなものを含めると更に多くなる。風倒木痕は遺構ではないので、記述すべきではないかもしれないが、調査の精度と信頼性に大きく影響を与えることから、それが出来る原因と実際にどのような形状になるのかを簡単に触れておきたい。

第７図（左）に示した模式図は風倒木痕のできる過程である。①木の根が地中に伸びるが、C層（東原遺跡の５層にあたる）が非常に固い礫層であるために進入できずに横に広がる。②台風などで木が倒れ、根と土と礫が跳ね上げられる。前後に空洞が生まれる。③空洞に土が流れ込み、木と根は腐食して消滅する。歳月の経過によって地表は平らになり、土層だけが残される。

このような経過で風倒木痕がつくられる。その風倒木痕が東原遺跡に多い要因は、植物が大きく育つ黒ボク層が厚く堆積していることと、木の根を進入させない堅い礫層の存在にある。

第７図（右）はA10グリッドの風倒木痕の実測図である。平面形が楕円形もしくは三日月形をしていることから、一見したところでは、竪穴住居の堀方に見える。そして東原遺跡の風倒木痕の面白い点は、検出面に必ずこぶし大の丸石が一直線に並ぶことであり、あたかも遺構のようである。



第７図　風倒木痕模式図・他

第２節　検出遺構

（１）概　要

・全体（第８図）　今回の東原遺跡第34次発掘調査では、弥生時代後期中葉～後葉の集落跡と江戸時代後期～明治時代初頭の屋敷跡を検出した。縄文時代については、遺物は出土したが、遺構は検出できなかった。

弥生時代後期中葉～後葉の遺構は、南北に長い調査区の北側（Ａ区全域およびＢ区のB7グリッド以北）に集中し、それより南側（B8グリッド以南）では皆無であった。それに対して江戸時代後期～明治時代初頭の遺構は、調査区の南側（Ｂ区のB2グリッド以南とＣ区のC3グリッド以南）に集中し、それより北側（Ｂ区およびＣ区の北端とＡ区の全域）では非常に希薄であった。以上の結果は調査前の知見どおりであり、調査区は北半で弥生時代後期集落の中央部を南北に貫通し、南半で江戸時代後期～明治時代初頭の屋敷地を南北に貫通していると推定される。

他に縄文時代の遺物（石核５点と剥片７点）が出土したが、これらは包含層および江戸時代の区画溝からの出土であり、明確に縄文時代の遺構と言えるものは検出できなかった。

・Ａ区（第９図）　Ａ区は弥生時代後期中葉～後葉の遺構を中心に検出した。江戸時代後期～明治時代初頭の遺構も検出したが、その数は少ない。

弥生時代後期の遺構は、竪穴住居跡を18軒（SB01～18）、溝を２条（SD02-A、SD02-B）、土坑を４基（SK06～09）、小穴を多数検出した。それらの中で注目されるものは、焼失住居１軒（SB11）、貼床のある住居４軒（SB10･11･13･18）、環状掘方をもつ住居３軒（SB10･11･18）、土器集積土坑１基（SK06）である。

竪穴住居の規模および分布は、Ａ区の南端（A11～A13グリッド）に比較的小型の住居が点在し、そこから北側に行くに従って住居密集度が高まり、中央部（A7・A8グリッド）で最大になり比較的大型の住居が集中している。更に北側に行くと、住居はまた小型化・希薄化し、北端付近（A2・A3グリッド）では空白域となっている。この空白域の原因については、第６図の縦断土層柱状図から判るように、そこに小谷が入り込んでいる関係で居住地として不適当であったためと考えられる。

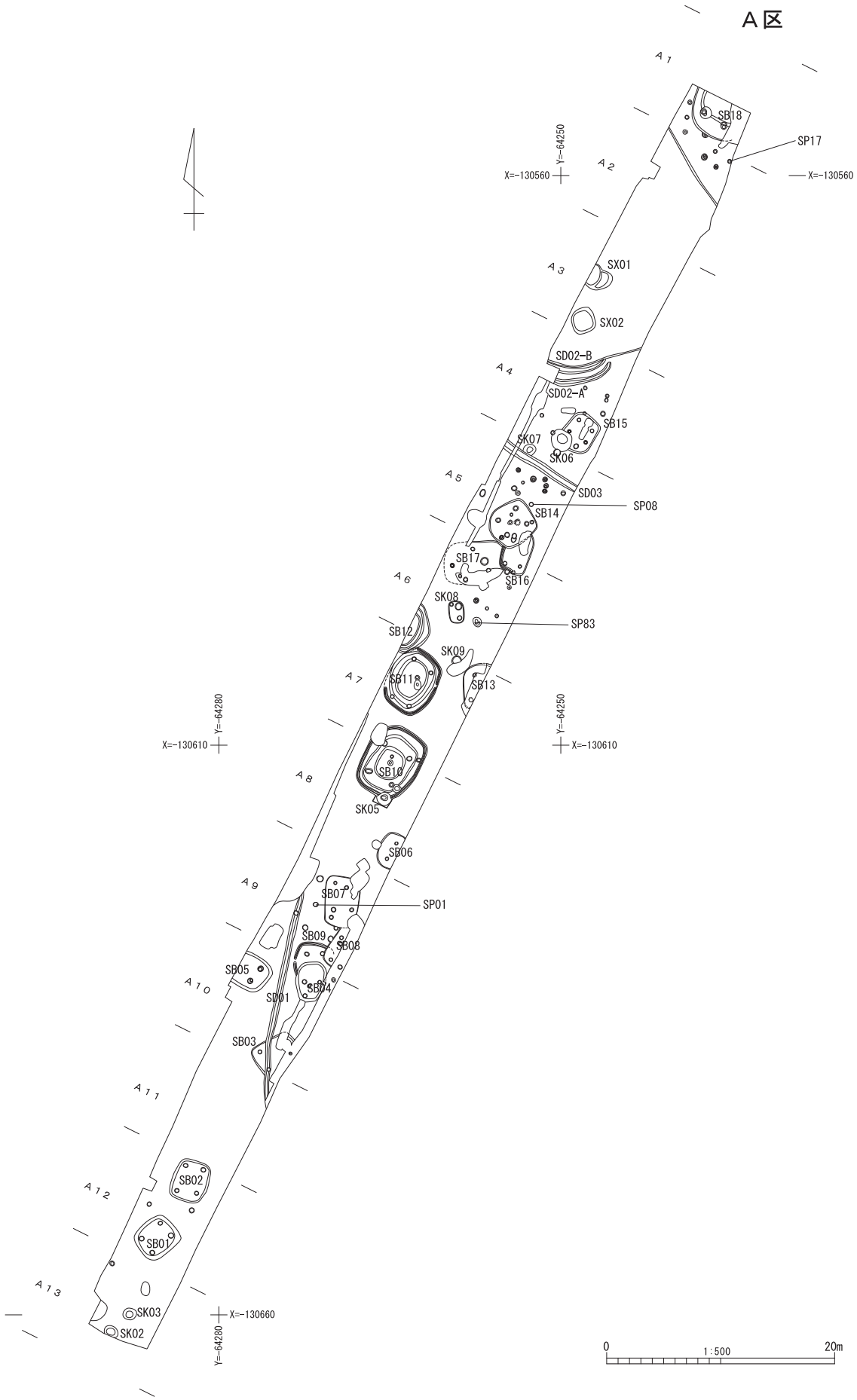
江戸時代後期の遺構は、溝を２条（SD01･03）、土坑を１基（SK05）、溝に伴うピット（小穴）列を検出した。他に時期不明の土坑を２基（SX01･02）検出したが、江戸時代後期以後の遺構である可能性が高い。

・Ｂ区（第10図）　Ｂ区は江戸時代後期～明治時代初頭の遺構を中心に検出した。ただし北端部分（B1～B7グリッド）では、Ａ区から続く弥生時代後期中葉～後葉の遺構を検出した。

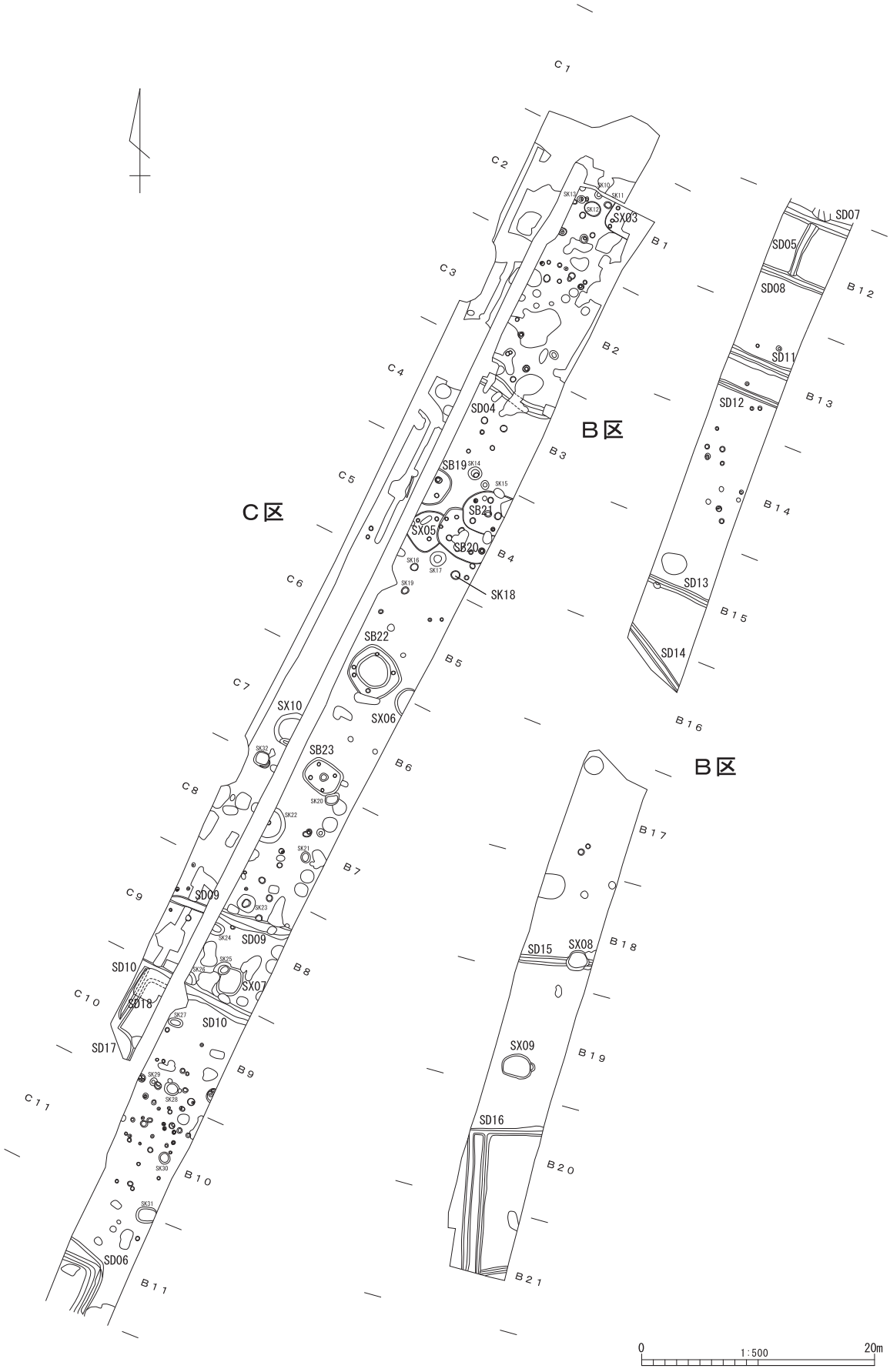
弥生時代後期の遺構は、竪穴住居を５軒（SB19～23）、土坑を４基（SK06～09）、小穴を多数検出した。竪穴住居は比較的小型であった。江戸時代後期の遺構は、屋敷の区画溝を12条（SD04～13、SD15･16）および土坑と小穴を多数検出した。また時期不明土坑を２基（SX03･05）検出した。

X=-130560
Y=-64350
Y=-64220
X=-130560
A区
A1
A2
A3
A4
A5
A6
A7
A8
A9
A10
A11
A12
A13
C区
C1
C2
C3
C4
C5
C6
C7
C8
C9
C10
B区
B1
B2
B3
B4
B5
B6
B7
B8
B9
B10
B11
B12
B13
B14
B15
B16
B17
B18
B19
B20
B21
X=-130700
X=-130700
X=-130850
X=-130850
Y=-64350
Y=-64220
0
1:1500
60m

第 8 図　遺構全体図


A区
A1
A2
A3
A4
A5
A6
A7
A8
A9
A10
A11
A12
A13
SB18
SP17
X=-130560
Y=-64250
SX01
SX02
SD02-B
SD02-A
SB15
SK07
SK06
SD03
SP08
SB14
SB17
SB16
SK08
SP83
SB12
SK09
SB11
SB13
X=-130610
Y=-64280
SB10
SK05
SB06
SB07
SP01
SB09
SB08
SB05
SD01
SB04
SB03
SB02
SB01
SK03
SK02
X=-130660
0
1:500
20m

第 9 図　A区遺構図


C区
B区
B区
SD04
SB19
SB21
SX05
SB20
SK18
SB22
SX06
SX10
SB23
SD09
SD10
SD18
SD17
SX07
SD06
SX03
SD07
SD05
SD08
SD11
SD12
SD13
SD14
SD15
SX08
SX09
SD16
0
1:500
20m

第10図　B・C区遺構図

・C区（第10図）　C区の遺構の残存状態は良好ではなかった。道路が拡張される以前にあった建物の基礎工事や拡張後に行われた道路の舗装工事によって、地中深くまで掘削された結果、遺構の大部分が削り取られていた。北半分は建物の基礎工事によって完全に撹乱されており、南半分は舗装工事等によって遺構面下20～30cmまで削られて遺構の底部がわずかに残っていただけであった。

弥生時代後期の遺構として小穴を数個、江戸時代の遺構として屋敷の区画溝を４条（SD09、10、17、19）と土坑および小穴を数個検出した。

（２）弥生時代の遺構

・竪穴住居

SB01（第11図）　A区南端のA12グリッドに位置する小型の竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。平面形は隅丸長方形で、3.2m×3.6mの規模をもつ。検出できた掘方の深さは約30cmであり、残存状態は良好であった。貼床、周壁溝、炉跡は丹念に精査したが、検出することができなかった。柱穴はP1～P4の４基を検出した。しかし前記したように、地山層は木や植物の根などによって撹乱されてまだら模様になっているために、この住居の柱穴については絶対の確信を持てない。

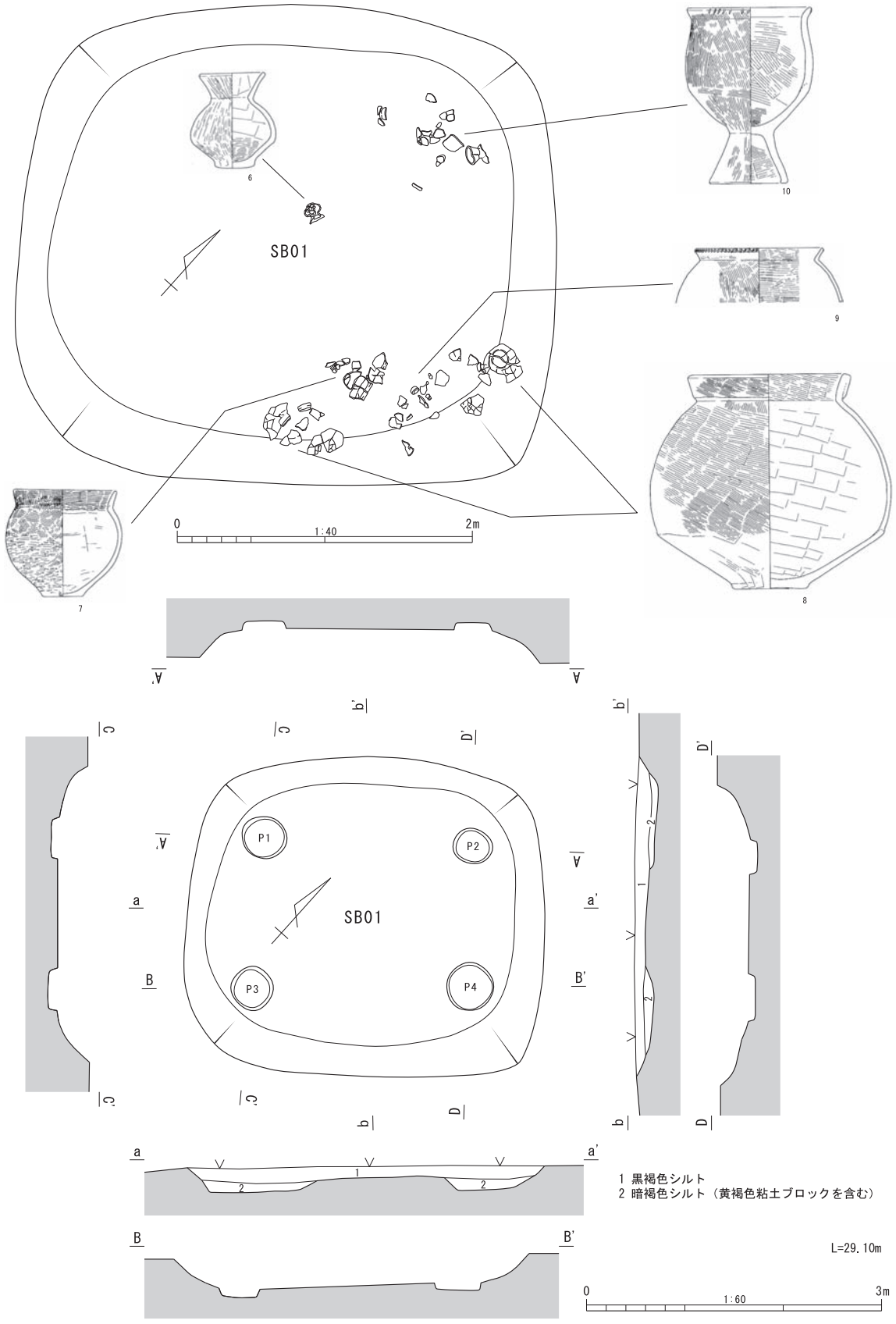
検出時、この竪穴住居は隅丸長方形の輪郭をはっきりと確認することができた。そして掘り進めていくと、埋土の中に多くの土器片が含まれていた。土器は床面と推定する位置から浮いた状態で、かつ住居の中心部に向かうに従って出土レベルが低くなる傾向が認められた。このことからみて土器は竪穴住居に直接的に伴うものではなく、住居が廃絶されてある程度の時間が経過した後に、堀方の窪地がゴミ捨て場になって土器片が廃棄されたものと推定される。土器片が住居の東側に集中していることから、集落の中心がある東側から捨てられたものと思われる。

当初、SB01は環状掘方をもつ住居と推測された。SB01を平面で検出した後に、幅20cmのトレンチを十文字に入れて埋土の堆積状況を確認したのであるが、２層の暗褐色シルト層（第11図の下図参照）が環状にまわっているように見えた。しかし実際に掘り進めていくと、次第に２層がはっきりしなくなり、完掘した時は環状掘方を確認することができなかった。

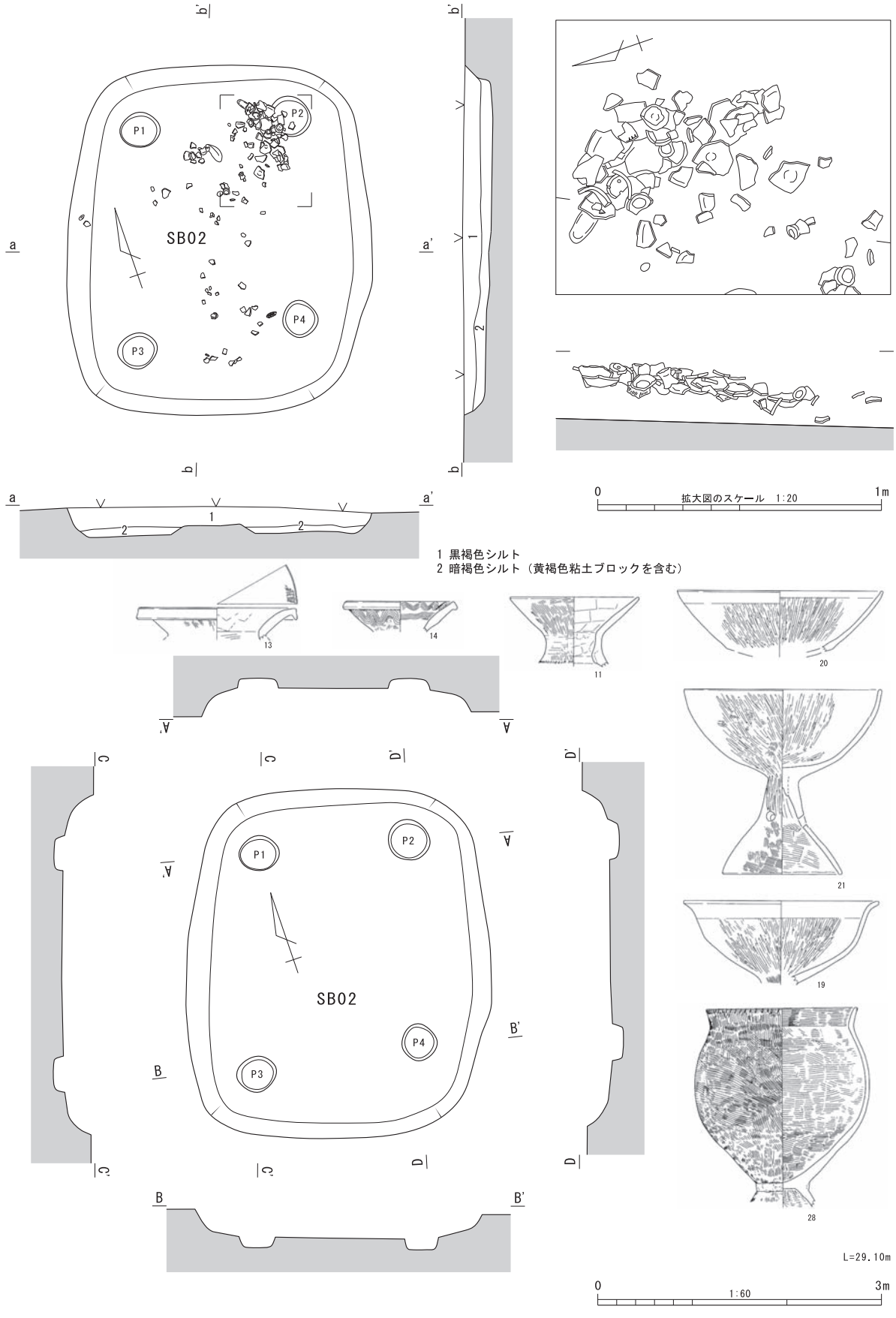
廃棄された土器の時期は、第33図の６の広口壺、７の鉢、10の台付甕の器形や丸味を帯びた口唇部等からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と推定する。したがって住居はその少し前に廃絶したものと考える。

SB02（第12図）　A区南端のA12グリッドに位置する小型の竪穴住居で、SB01のすぐ北側に当たる。この住居も単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。平面形は隅丸長方形で、3.2m×3.7mの規模をもつ。検出できた掘方の深さは約30cmであり、残存状態は良好であった。住居内にP1～P4の柱穴を４基確認したが、輪郭が不明瞭であり、やや確信が持てない。貼床、周壁溝、炉跡は、床面と推定した面を中心に丹念に精査したが、確認することができなかった。

SB02は、住居の平面形状や規模および多量の土器の堆積状況など、SB01と非常に類似している。



第11図　SB01実測図



第12図　SB02実測図

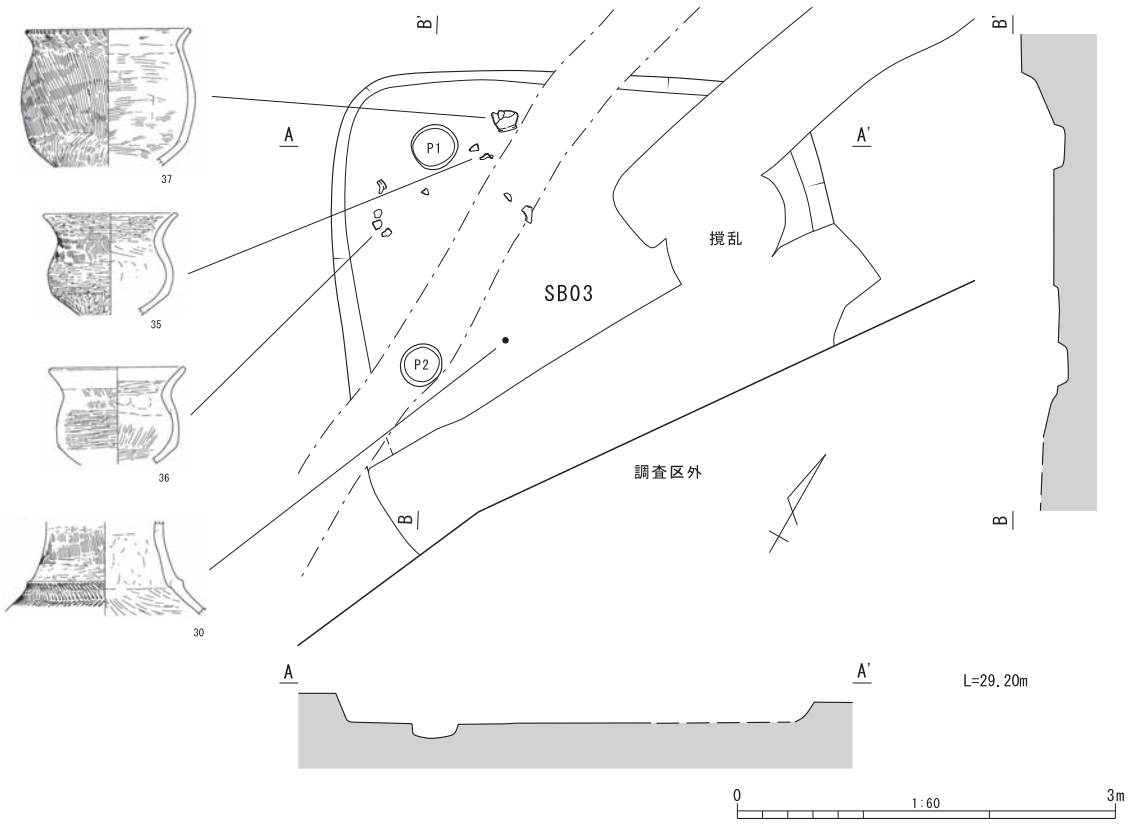
この竪穴住居も、検出時に隅丸長方形の輪郭が明瞭に検出された。掘り進めていくと、埋土に多量の土器片が含まれていた。土器は床面と推定した位置から少し浮いており、また北の壁際のレベルが一番高く、中心部に向かうに従って低くなっている。この堆積状況からみて、土器は竪穴住居に伴うものではなく、住居の廃絶後の窪地に北東方向から投げ捨てられたものであろう。

当初、SB02も環状掘方をもつ住居の可能性があった。第12図の土層図を見てもらうと分かるが、東西方向の土層図において、２層が中央部で途切れている。幅20cmのトレンチを十文字にいれた最初の段階で環状掘方が存在しそうな土層を示したので、慎重に掘り進めたが、最終的に環状掘方を確認することはできなかった。

出土土器の時期は、21の高坏と28の台付甕の形状および19、21、28の丸味を帯びた口唇部からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。ただし20の坏部形状と尖頭形の口唇部からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）の土器も混じっているようである。以上のことから、SB02は伊場様式期新段階（弥生後期中葉）に廃絶したと考える。

ひとつ興味深い点がある。出土土器の13と14に見られる壺の口唇部を下方に引き伸ばす技法である。これは東三河地方で盛んに行われていた土器製作技法であることからみて、東三河地方と関係が深い人物がSB02の近くに住んでいた可能性が高い。

SB03（第13図）　Ａ区のA10グリッドに位置する小型の竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。残存状態は悪く、全体の約半分を検出しただけである。東側は鉄道



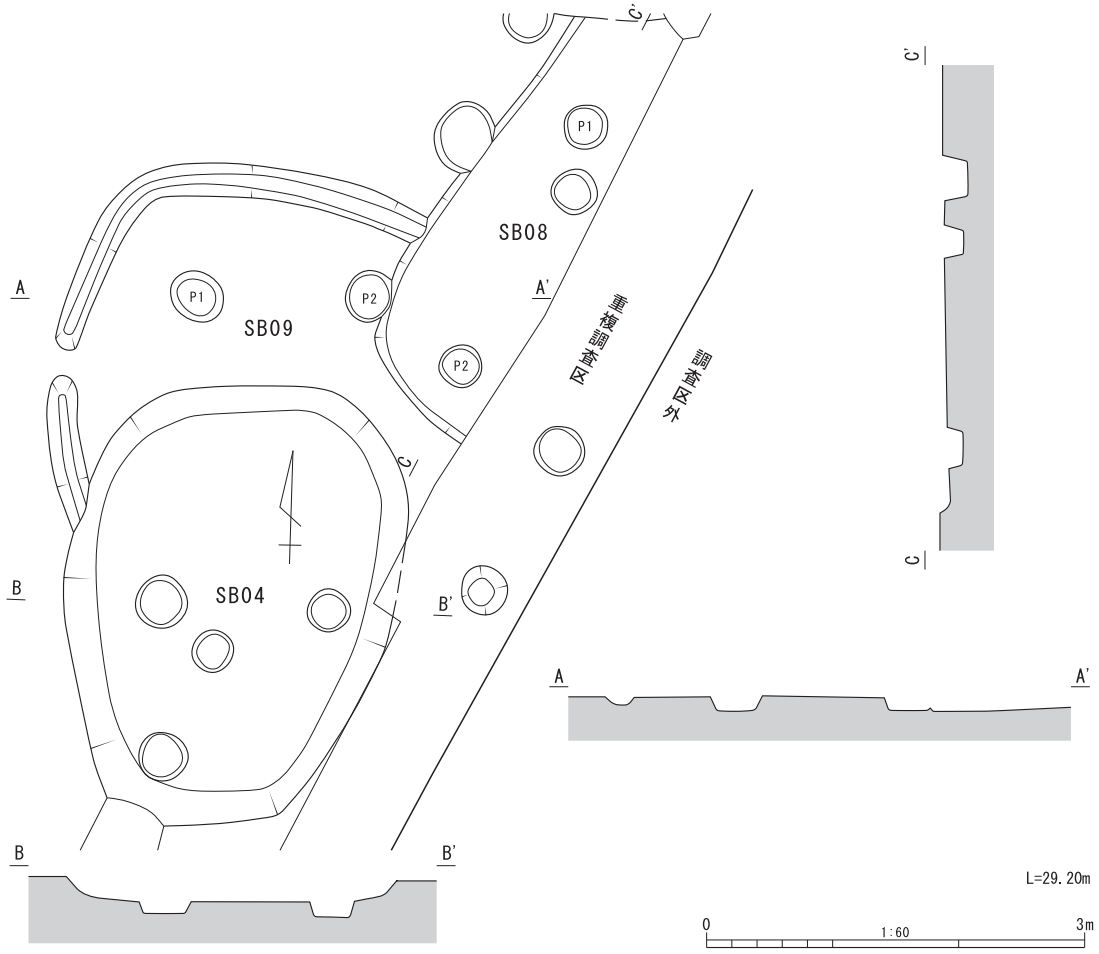
第13図　SB03実測図

の電気設備を敷設するために撹乱されて大きな溝となっており、西側は上層が江戸時代の溝SD01で切られている。堀方の深さは約20㎝で、西端を中心にして床面に接して土器が出土した。貼床、炉跡、周壁溝は検出できなかった。

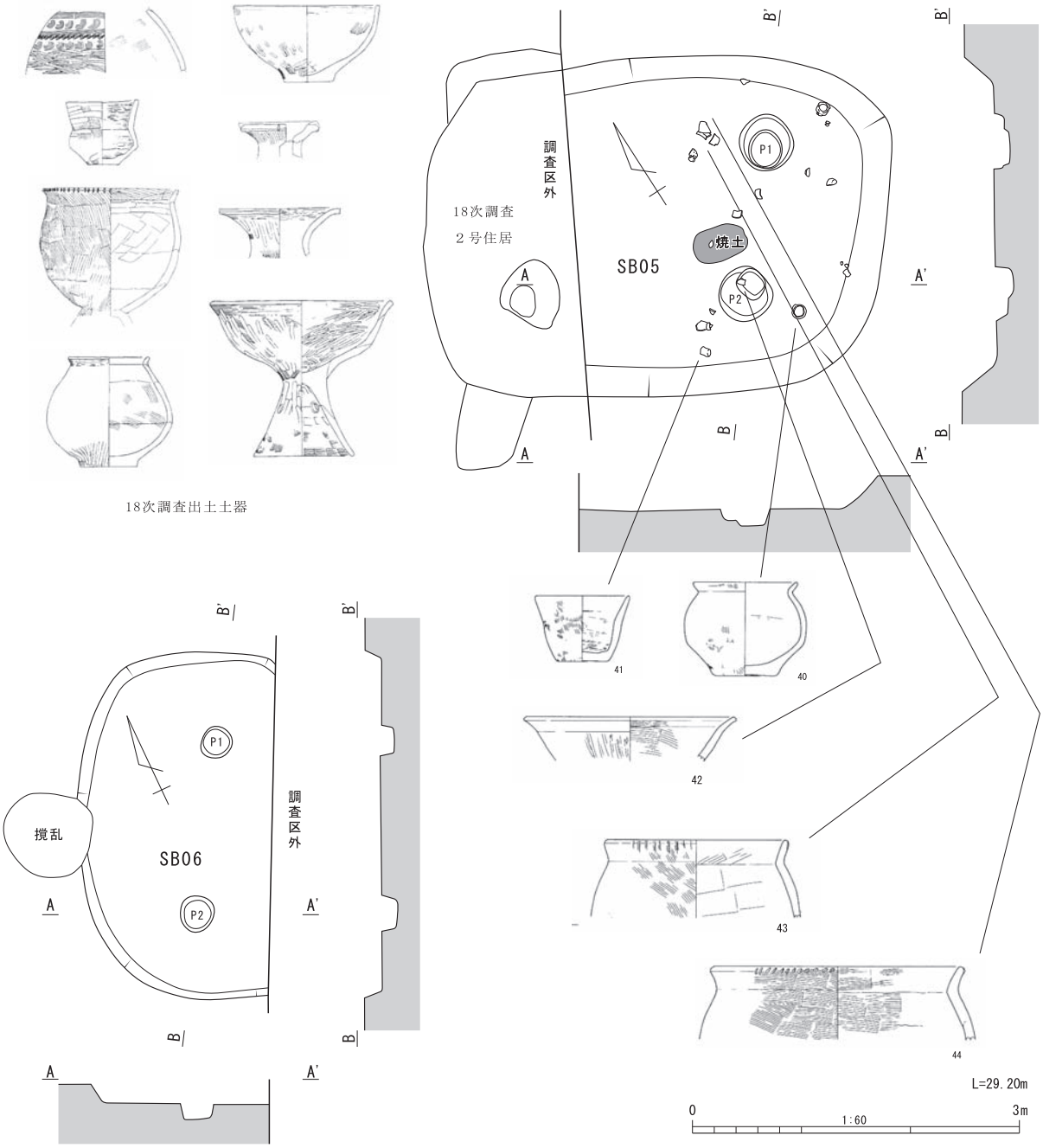
形状と規模は、残された部分から推定して、平面形が隅丸長方形で、約3.0m×3.9mの規模をもつと思われる。柱穴は西側の隅で１基（P1)、江戸時代の溝SD01の底面で１基（P2)、合計２基が確認された。他の２基は、その位置関係からみて、撹乱によって消失したものと推定される。

出土土器の時期は、35と36の小型鉢の器形からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。住居もこの時期に廃絶したと考える。

SB04（第14図） Ａ区のA10グリッドに位置する小型の竪穴住居で、北側の約半分がSB09と重複している。SB09との新旧関係は、SB04がSB09を切っていることからSB04の方が新しい。堀方の深さは約20㎝で、遺構の残存状態は良好ではなかった。平面形は、一部がやや変形しているが、本来は2.6m×3.4mの規模をもつ隅丸長方形であったと推測する。変形の原因は、過去に行われた東側での発掘調査の影響と思われる。貼床、周壁溝、炉跡は、床面と想定された面を丹念に精査したが、確認されなかった。柱穴は検出されなかった。住居の内部で小穴４基を確認したが、４本柱建物を想定するにはどの小穴も不自然な位置関係にある。２本柱建物の可能性も排除できないが、住居の短軸側に柱穴が並ぶ点が不自然である。住居内に柱の無い構造の竪穴住居である可能性がある。



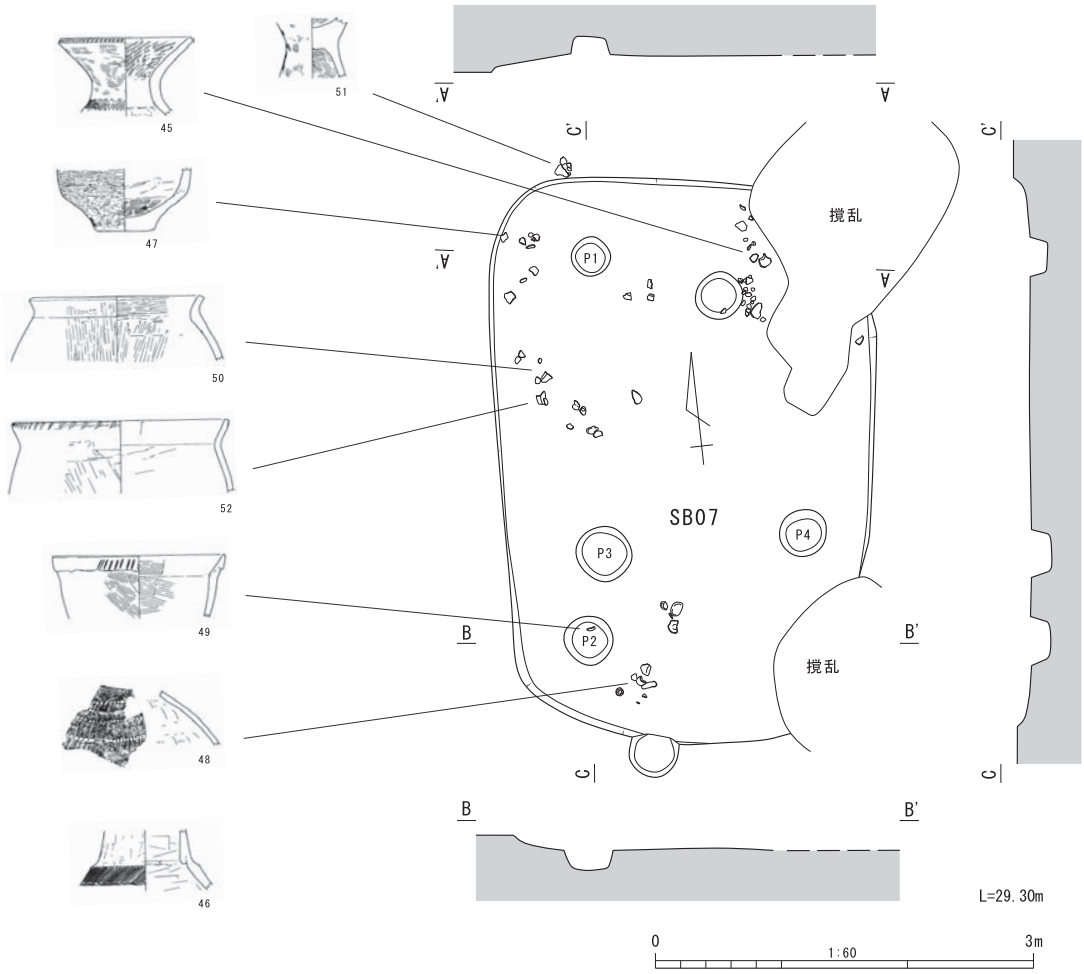
第14図　SB04･08･09実測図



第15図　SB05・06実測図

土器は38の台付甕の台部が床面に接して出土したが、他は小破片だけであった。SB04の廃絶時期は、台付甕の台部先端がやや内湾していることから、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と考える。

SB05（第15図）　A区のA10グリッドに位置する竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。全体の約３分の２を検出した。残りの３分の１は過去に浜北市が実施した第18次発掘調査で２号住居として検出されている。柱穴は第18次調査で１基を発見し、今回の調査で２基を発見した。そしてそれぞれの柱穴で一段下がった柱痕が確認されている。炉跡は明確なも



第16図　SB07実測図

のは検出されなかったが、柱穴（P2）の横にわずかに残る焼土が炉跡である可能性が高い。住居の形状と規模は、第15図の合成図を基に計測すると、平面形が隅丸長方形で、3.1m×4.2mの規模をもつ。貼床と周壁溝は検出されていない。住居の廃絶時期は、第18次調査で出土した高坏や鉢の器形などからみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と推定する。

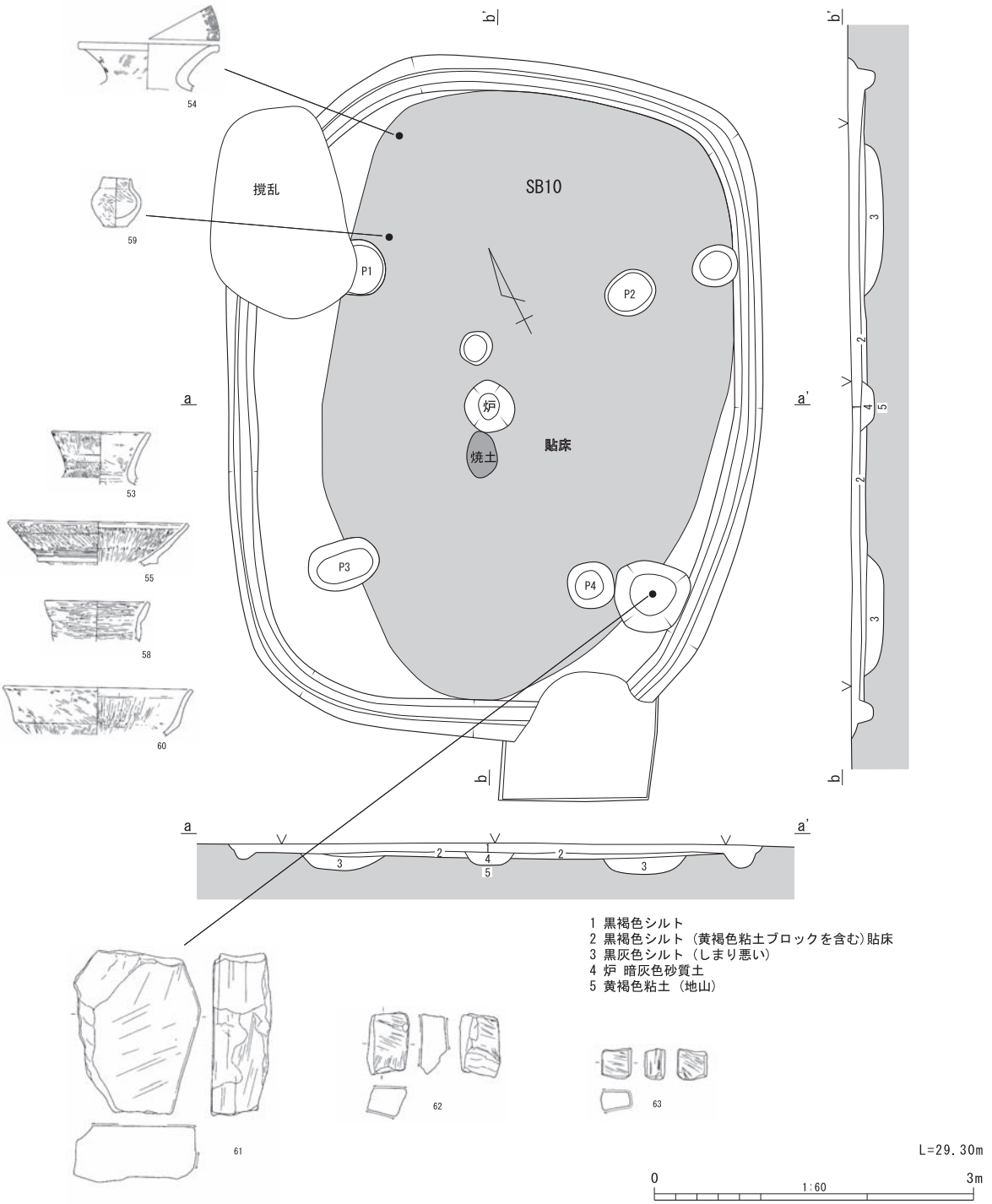
SB06（第15図）　A区のA8グリッドに位置する竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。全体の約３分の１を検出した。残りの３分の２は東側の調査区外に続いているが、過去に東側で（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した第31次発掘調査では検出されていない。住居の平面形は隅丸長方形とみられ、規模は、短軸が3.2m、長軸が検出された部分で1.8mを測る。柱穴は２基を検出したが、貼床、炉跡、周壁溝は検出できなかった。

出土土器は小破片が多く、図化できるものは無かった。住居廃絶時期は、住居の平面形や小破片の土器からみて、弥生後期中葉～後葉であろう。

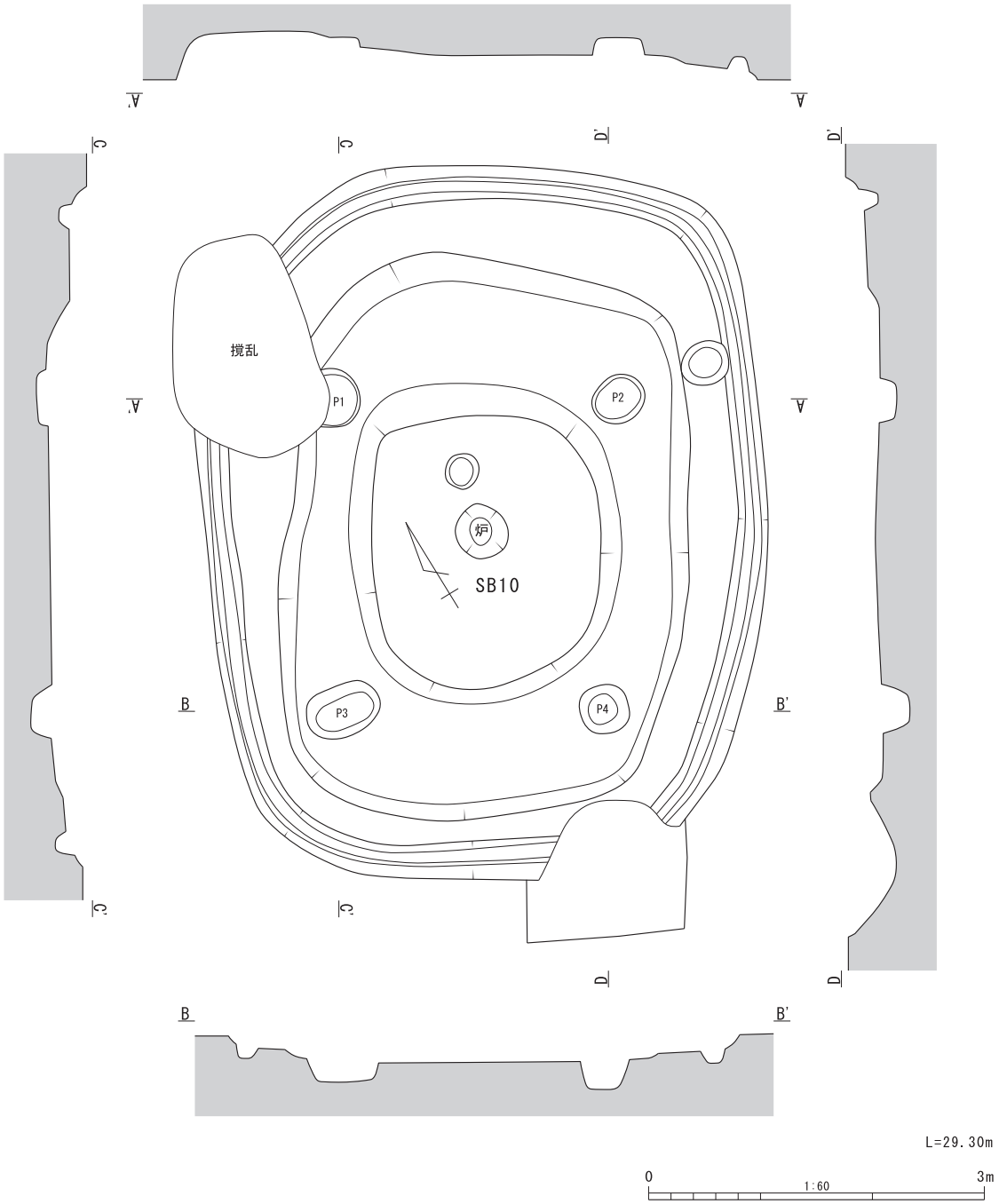
SB07（第16図）　A区のA9グリッドに位置する竪穴住居で、南端がSB08と重複している。切り合い関係は不明である。平面形が隅丸長方形で、3.1m×4.4mの規模をもつ。床面までの深さは浅く、残存状態は良好ではなかった。柱穴はP1とP2が対応し、他の２基は撹乱によって消滅したと思われる。柱穴がP1、P3、P4である可能性もあるが、その場合は南側のラインを間違えていることになる。

炉跡と周壁溝は検出できなかった。土器は床面と推定した面に接して比較的多く出土した。住居の廃絶時期は、出土土器からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）と考える。

SB08（第14図）　A区のA9グリッドに位置する竪穴住居で、南西の一部がSB09と重複している。切りあい関係は、SB08がSB09を切っており、SB09の方が古い。平面形は隅丸方形または隅丸長方形で、規模は不明である。堀方の深さは約10cmで、残存状態は非常に悪い。炉跡と周壁溝は、何度も精査したが、確認できなかった。柱穴はP1とP2が対になると思われる。土器は図化できるものは無かった。したがって時期は、弥生時代後期頃という以外にない。



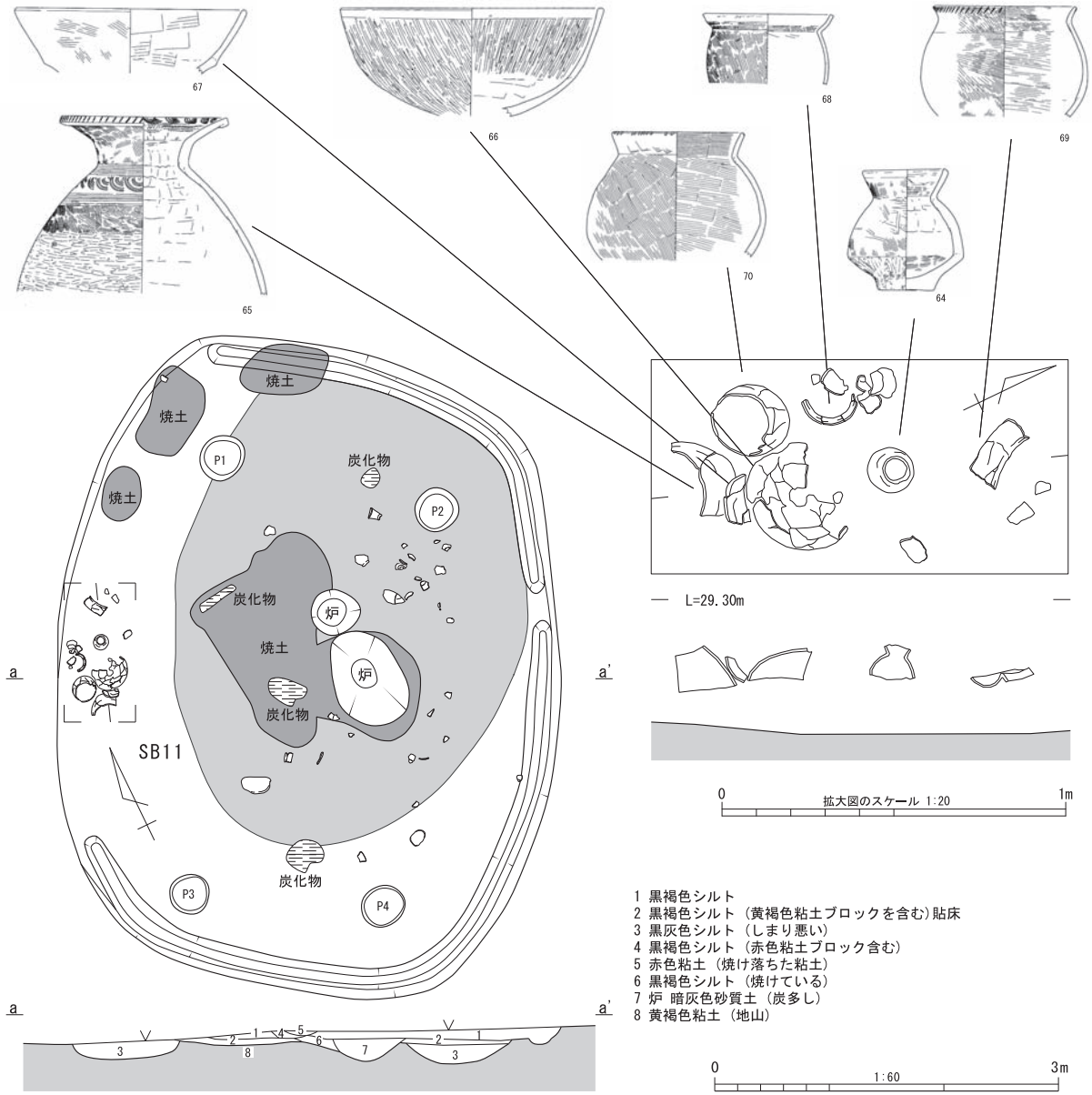
第17図　SB10実測図１



第18図　SB10実測図 2

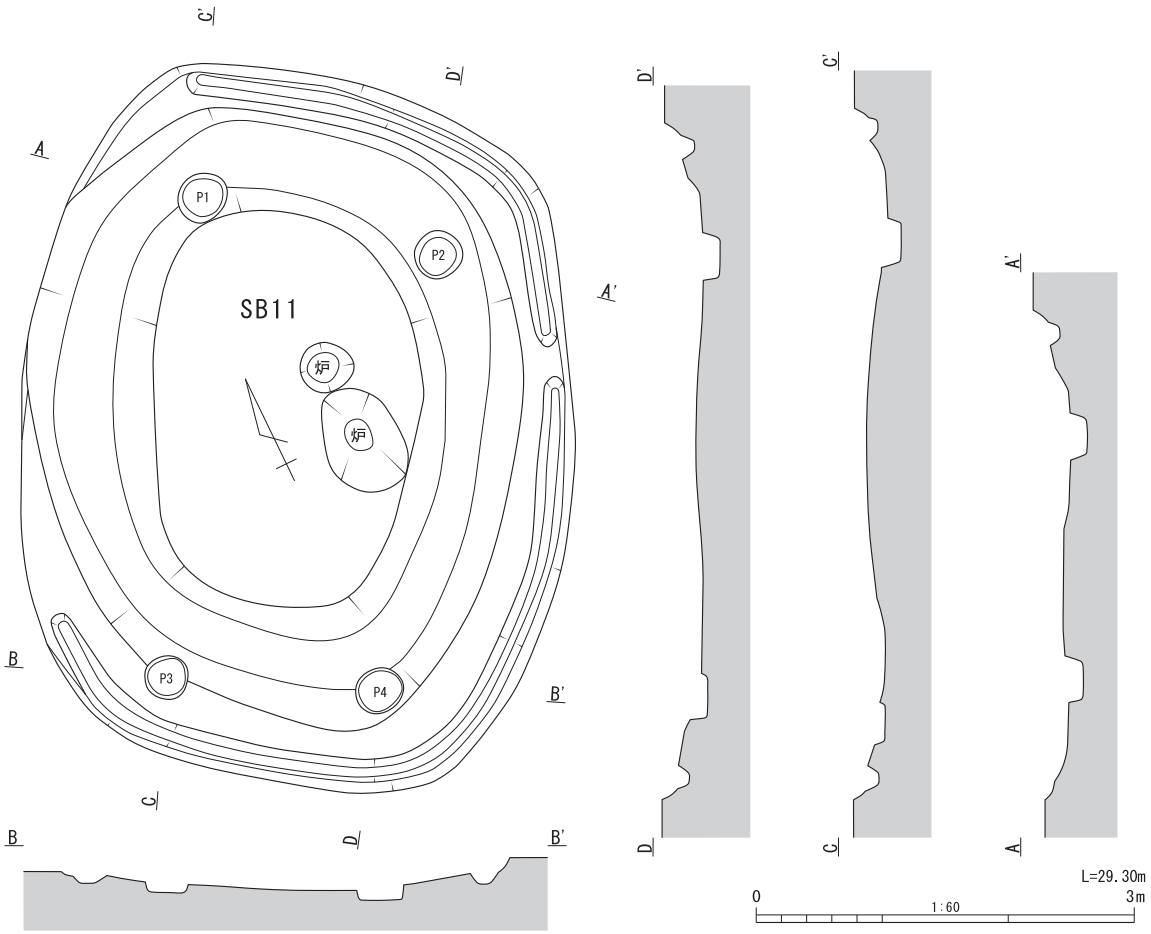
SB09（第14図）　Ａ区のA9グリッドに位置する竪穴住居で、南半がSB04と重複し、東端がSB08と重複している。切り合い関係は、SB04とSB08がSB09を切っており、SB09が一番古い。平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形で、規模は不明である。遺構の残存状態は非常に悪く、周壁溝の底部が検出できただけである。炉跡は検出できなかった。柱穴はP1とP2が対応し、残りの２基はSB04によって消滅したと推定する。土器は小破片のみで、図化できるものは無かった。

SB10（第17図・第18図）　Ａ区の中央、A7・A8グリッドに位置する大型の竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。南側の一部が江戸時代のSK05に切られ、北側の



第19図　SB11実測図１

一部が風倒木によって撹乱されているが、他は明確に検出することができた。平面形は隅丸長方形で、5.0m×6.4mの規模をもつ。遺構の残存状況は良好であり、床面の約７割で貼床が確認された。本来は床の全面が貼床であったと思われる。貼床の上面に接して54の壺口縁部と59の手づくね土器完形品が出土した。柱穴はP1～P4の４基を検出した。また中央部で小穴１基を検出したが、あまりにも炉に近いことからSB10と無関係の遺構であろう。炉跡は住居の中央で確認し、その横に炉から掻き出されたような状態で焼土が薄く堆積していた。しかし、この焼土も炉であった可能性を捨てきれない。また炉から１mほど離れた床面に細長い石が転がっていた。その時は気づかずに位置を測量しないまま取り上げてしまったが、置石炉に使われた石であった可能性が高い。柱穴（P4）のすぐ横にある小穴から61の砥石が滑らかな使用面を上に向けた状態で出土した。使用面が床面とほぼ同じ高さであることから、砥石を床面に埋めて使っていたと思われる。その他に住居内から同じ材質の砥石が２点発見されている。周壁溝は、特に東側で明確に確認できた。東原遺跡には周壁溝



第20図　SB11実測図２

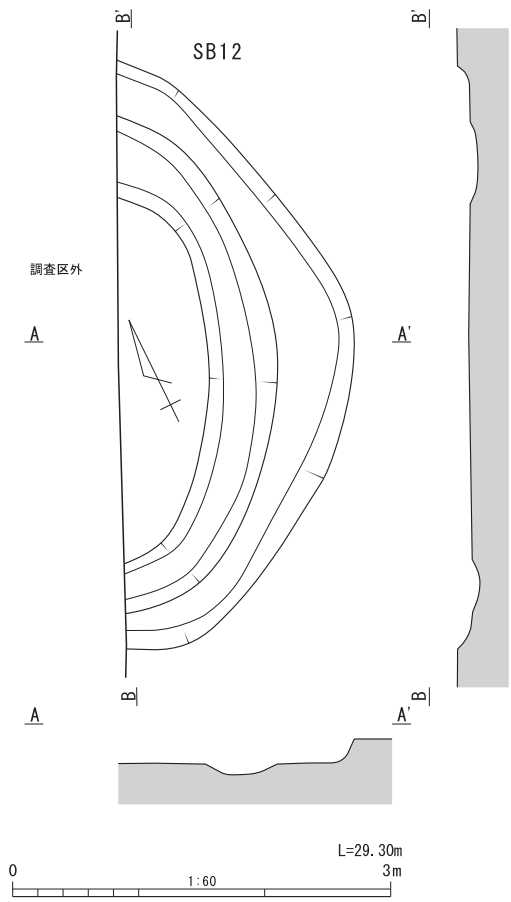
が無いと言われてきたが、今回の調査において数軒で検出している。

北壁の近くで土坑を検出した。比較的大きな土器片が深い位置に入っていることから、当初は貯蔵穴と想定して堀り進めた。しかし断面形がＶ字形をしていること、検出面に１ｍ程の長さで礫が並んでいること、住居の外まで続いていることなどから、最終的には風倒木痕であると判断した。この時にはじめて、東原遺跡の風倒木痕には、地表に一直線に並ぶ礫が伴うことを知った。

貼床を除去すると、下部構造としての環状堀方が現れた。中心部を残してドーナツ状に掘ったものであるが、東原遺跡第33次発掘調査でも２軒発見されている。埋土の中に土器片はほとんど入っていない。この環状堀方については、第４章で詳しく触れる。

住居の廃絶時期は、54や60の器形からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と推定する。

SB11（第19図・第20図）　Ａ区の中央、A7グリッドに位置する大型の竪穴住居で、北端がSB12と一部重複している。切り合い関係は、SB11がSB12を切っており、SB11の方が新しい。このSB11は焼失家屋であり、埋土の中に屋根や壁の構造材と推定する多くの炭化物や焼土が堆積していた。遺構の残存状態は、西側以外は良好であった。平面形はやや歪な隅丸長方形で、4.4m×5.5mの規模をもつ。炉跡は、中央付近で２基検出した。柱穴は、やや不自然な位置関係にあるが、P1～P4の４基を検出した。周壁溝は、西側部分を除き、明確に検出することができた。西側の不明瞭な部分は鉄道線路の路肩に当たり、工事等で削り取られたと推測する。



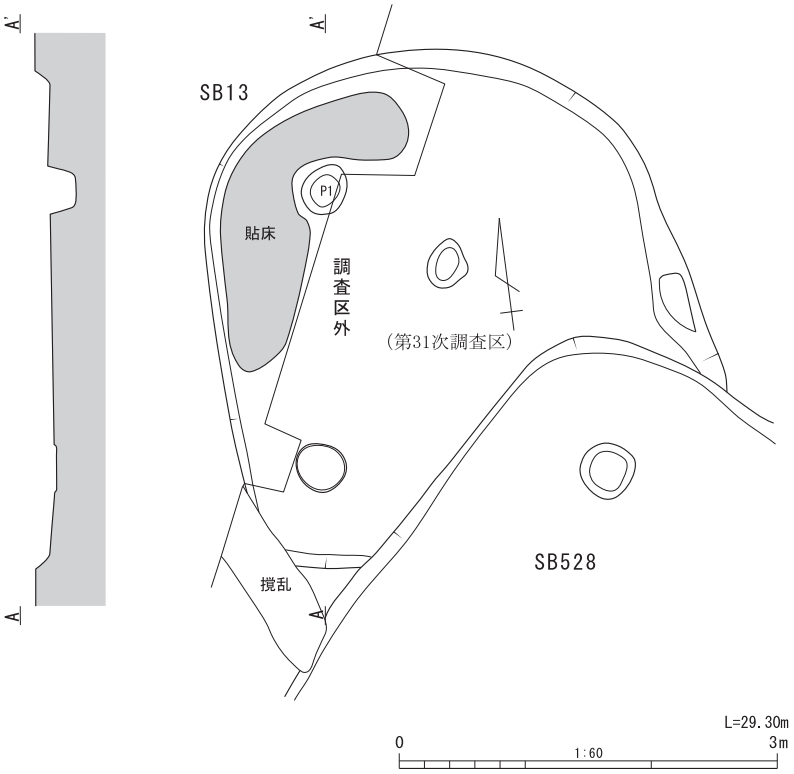
第21図　SB12実測図

貼床を除去すると、幅広い溝が中心部を残してドーナツ状に廻る環状堀方が現れた。埋土中に土器片がほとんど入っていないことから、建築時に何らかの目的をもって環状堀方が掘られ、直後に埋め戻されて貼床が行われたと推定する。その目的は湿気対策との説（浜文振2008）もあるが、当住居では溝の底面が水はけの良い礫層に達しておらず、その目的を達成できたか疑問である。

土器は床面から多数出土した。特に西側の壁際から出土した同時期に使われたと推定される一括土器が注目される。この住居の焼失時期は一括土器からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）である。

SB12（第21図）　A区の中央部、A6・A7グリッドに位置する竪穴住居で、床面までの堀方が約20㎝と比較的に残存状態が良好な遺構であった。検出した部分は全体の約５分の１であり、大部分は調査区外にあった。しかし過去に西側で行われた第18次調査では、SB12に接続する竪穴住居は発見されていない。第18次調査はトレンチ調査であったため、トレンチとトレンチの中間に入って見落とした可能性が考えられる。住居の形状と規模は不明であるが、現状で4.7ｍ×1.9ｍを測る。壁の少し内側を幅の狭い溝が廻るが、それが周壁溝かそれとも環状堀方か判断できなかった。柱穴が２基検出されるはずであるが、溝と重複したためか、確認できなかった。貼床は検出されなかった。

住居の廃絶時期は、82の台付甕の台部などから、弥生後期中葉～後葉と考える。



第22図　SB13実測図

SB13（第22図） Ａ区の中央部、A6・A7グリッドに位置する竪穴住居で、全体の約８分の１を検出した。残りの約８分の７は東側の調査区外にあり、過去の第31次調査でその一部（竪穴住居であると認識されていない）が検出されている。第22図は今回の検出部分と第31次調査の検出部分を合成した図面であるが、第31次調査の図面の一部を修正している。SB13は南側を竪穴住居（SB528）に切られているが、第31次調査の図面をそのまま信じれば、SB13の方がSB528より古くなる。SB13の平面形は、やや不自然な部分があるが、隅丸長方形とみられ、規模は3.7m×4.1mと推定される。床の全面で貼床が確認された。柱穴は、今回の調査部分で１基（P1）を検出し、また第31次調査の図面上にもそれらしき小穴がある。炉跡と周壁溝は検出されなかった。住居の中央部のやや北寄りにある小穴が炉跡であった可能性もあるが、確証がない。

出土土器は、住居の検出部分が狭いこともあって非常に少なく、図化できるものは無かった。住居の廃絶時期は、小破片の土器および周囲の状況からみて、弥生後期中葉～後葉であろう。

SB14（第23図） Ａ区の北側のA5グリッドに位置する竪穴住居で、南側の一部がSB16およびSB17と重複している。新旧関係は、３者の切り合い関係からみてSB14が一番新しく、次にSB16が新しく、SB17が最も古いと考える。遺構の残存状態は良好ではなかった。

住居の平面形は、一辺がやや変形しているが、本来は隅丸方形または隅丸長方形であったと推定する。3.7m×4.0mの規模をもつ。柱穴はP1～P4の４基を検出した。小穴（P5）は位置が少し不自然であるが、建て替え後の柱穴の可能性もある。貼床、炉跡、周壁溝は検出できなかった。

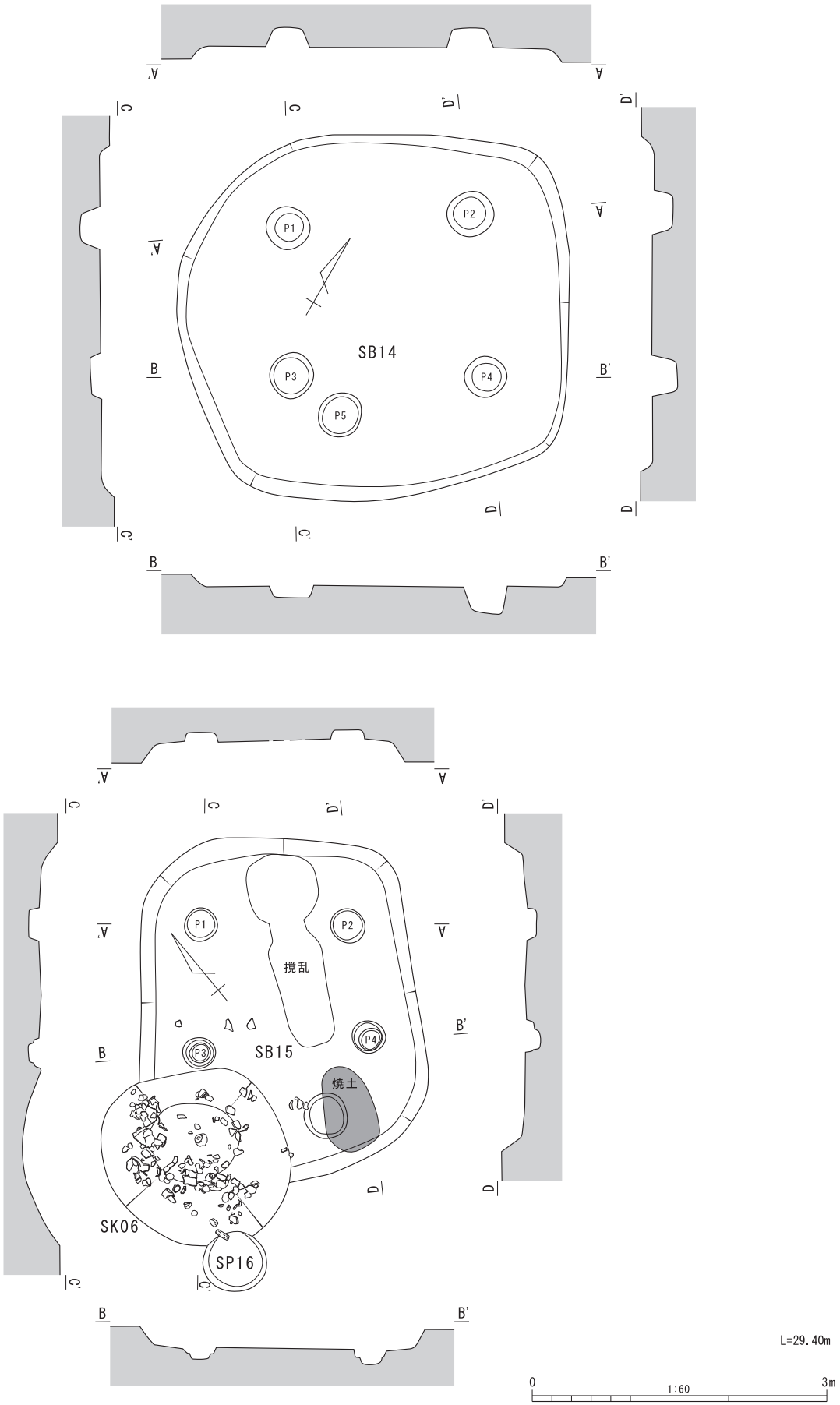
住居の廃絶時期は、83の壺口縁部および85と86の高坏脚部の形状から、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と推定する。

SB15（第23図） Ａ区の北側のA4グリッドに位置する小型の竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。中央部に鉄道の電気設備による撹乱坑があり、西端の一部が多量の遺物が出土したSK06と重複している。両者の新旧関係は、明らかにSK06の方が新しい。平面形は隅丸長方形で、2.8m×3.5mの規模をもつ。住居の南端で焼土が確認され、焼土の下部に土坑があった。貯蔵穴の可能性があるが、遺物は出土していない。柱穴は４基（P1～P4）が検出され、南側の２基（P3･P4）で柱痕が確認された。ただしP3とP4はやや不自然な位置にあり、検討の余地がある。炉跡と周壁溝は検出されなかった。

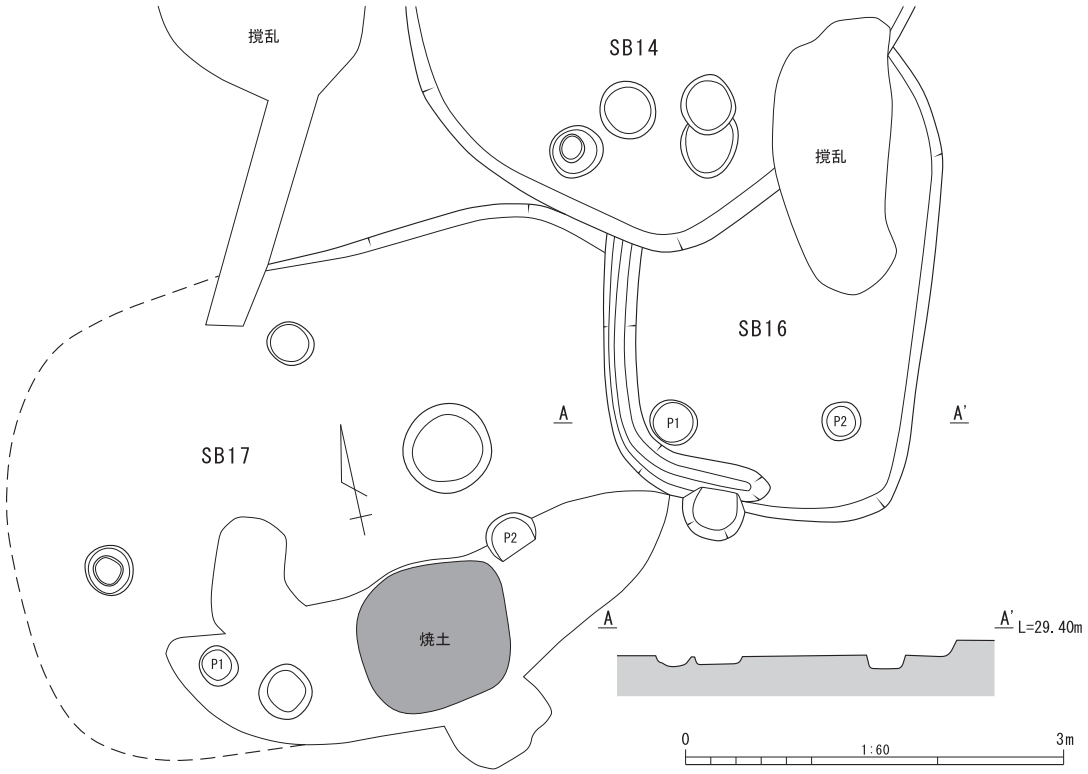
住居の廃絶時期は、出土土器とSK06に切られていることからみて、弥生後期中葉頃であろう。

SB16（第24図） Ａ区の北側のA5･A6グリッドに位置する小型の竪穴住居で、北側の一部がSB14と重複し、西側の一部がSB17と重複している。新旧関係は、SB17を切っていることからSB17より新しく、SB14に切られていることからSB14より古い。遺構の残存状態は悪く、各遺構の識別に苦労した。住居の平面形は隅丸長方形で、推定2.6m×3.5mの規模をもつ。炉跡と貼床は注意深く精査したが検出できなかった。周壁溝は一部を西側で検出した。

住居の廃絶時期は、SB14との切り合い関係からみて、弥生後期中葉頃であろう。



第23図　SB14・15実測図



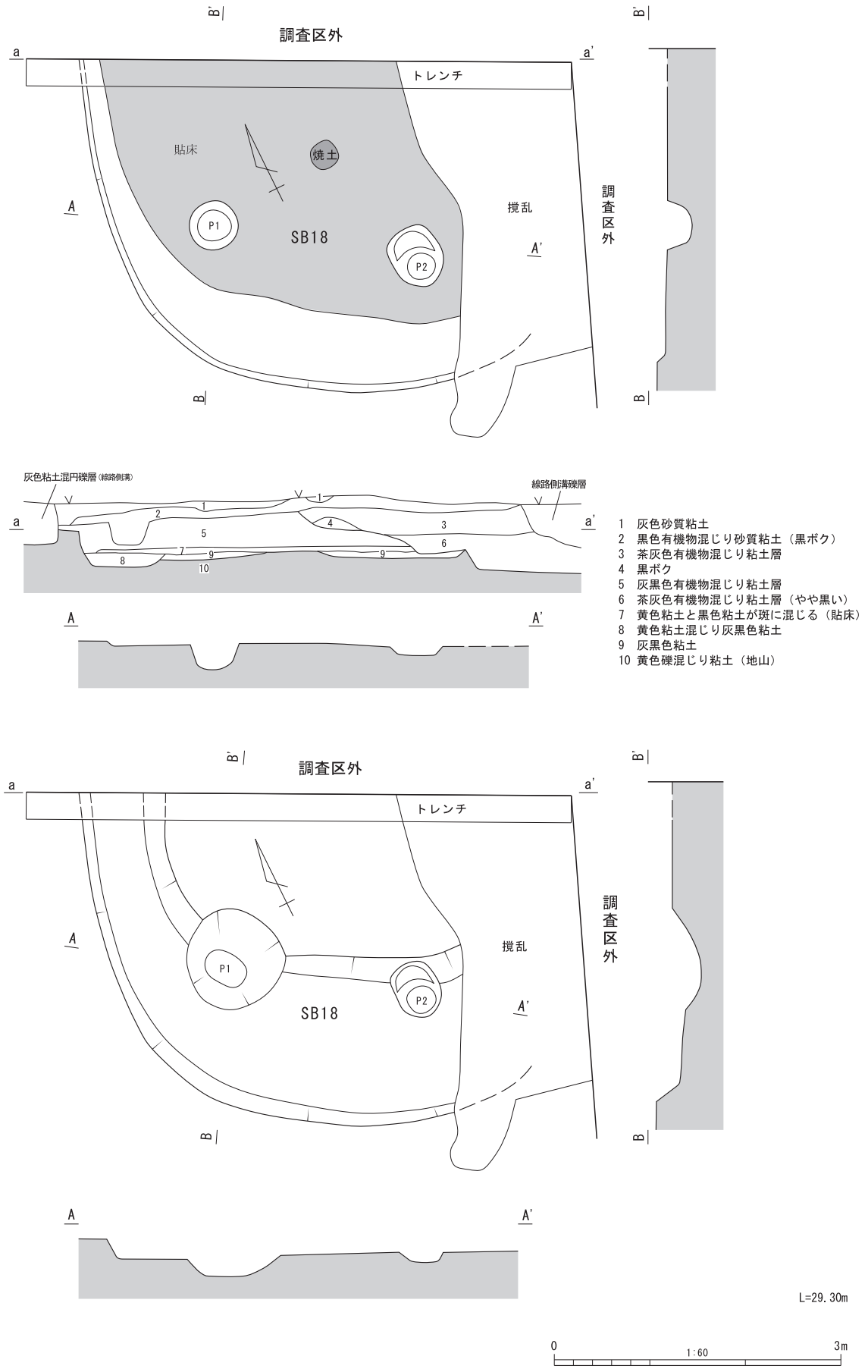
第24図　SB16・17実測図

SB17（第24図）　Ａ区の北側のA5・A6グリッドに位置する竪穴住居で、北側の一部がSB14およびSB16と重複している。新旧関係は、新しい方からSB14、SB16、SB17の順である。平面形と規模は不明である。今回の調査で検出した23軒の中で、この住居を識別することが一番難しかった。遺構の残存状態は悪く、出土土器も少なく、炉跡、貼床、周壁溝も検出されなかった。柱穴は、撹乱坑の斜面でP1とP2を検出した。

最初の精査時に、黒褐色土の中により黒い色をした楕円形の住居らしいアウトラインが現れており、土器片もその範囲から出土していた。さらに南側の広い範囲に焼土が認められた。そこで竪穴住居と想定して掘り進めたのであるが、焼土の下部に大きな風倒木痕があるのが判明した。

北側の壁が検出できたこと、柱穴を２基検出したこと、精査時にアウトラインが見えていたことから、竪穴住居であると判断した。風倒木痕は竪穴住居がつくられる前にできたと考える。

SB18（第25図）　Ａ区の北端のA1グリッドに位置する大型の竪穴住居で、全体の約２分の１を検出した。残り部分は北側の調査区外にある。遺構の残存状態は、撹乱坑を除けば、非常に良好であった。検出した部分においては、住居は単独で存在し、他との重複関係は認められなかった。住居の形状と規模は、東側に大きな撹乱坑があるために確実とは言えないが、平面形は隅丸長方形もしくは隅丸方形とみられ、短軸が4.8mと推定、長軸の検出長が3.5mを測る。柱穴はP1とP2の２基を検出し、P2の底面に柱痕が認められた。炉跡は、確実なものを検出することはできなかったが、中央付近にわずかではあるが焼土が認められ、それが炉跡であった可能性が高い。そしてSB18には

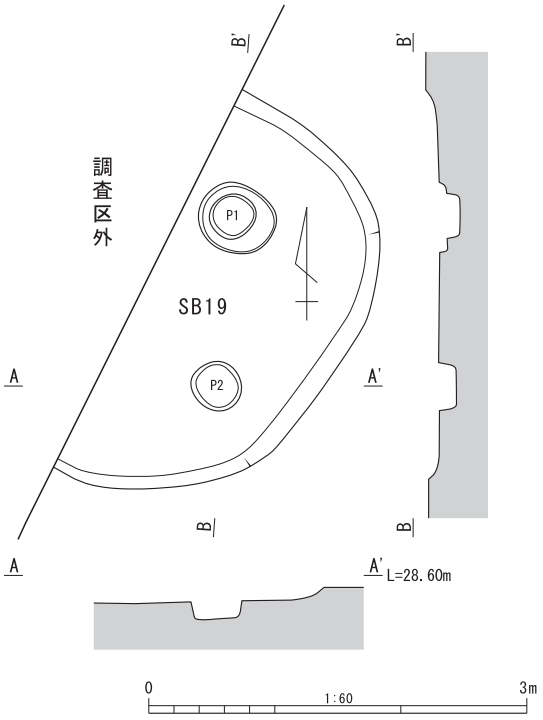


第25図　SB18実測図

貼床が明瞭に残っていた（第25図の７層）。貼床は、黄色粘土と黒色粘土が斑状に混じり、現在も堅く締まっていた。周壁溝は検出されなかった。

最後に貼床を除去すると、壁に沿ってドーナツ状に環状堀方が現れた。環状堀方の底面は地山の礫層に達していたが、意識的にそこまで掘ったのか、それとも偶然に達したのか判断できない。

住居の廃絶時期は、出土土器からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）と考える。



第26図　SB19実測図

SB19（第26図）　Ｂ区の北側のB4グリッドに位置する竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。全体の約３分の１を検出し、残りの約３分の２は西側のＣ区で検出できる筈であった。しかしＣ区は過去の道路改良工事により深くまで撹乱が及んでいたため、遺構は完全に消滅していた。平面形は隅丸長方形とみられ、規模は短軸が3.4m、長軸の検出長が1.7mを測る。柱穴はやや不自然な位置にあるが、P1とP2の２基を検出し、P1で柱痕を確認した。貼床、炉跡、周壁溝は検出できなかった。小量の土器が出土したが、図化できるものは無かった。

住居の廃絶時期は、小破片の土器以外に根拠はないが、弥生後期中葉～後葉であろう。

SB20（第27図）　Ｂ区の北側のB4グリッドに位置する竪穴住居で、全体の約５分の４を検出した。残りの約５分の１は東側の調査区外にあるが、過去の第32次調査では検出されていない。北側の一部がSB21と重複し、西側の一部がSX05と重複している。新旧関係は、SB21に切られていることからSB21より古く、SX05を切っていることかSX05より新しい。住居の残存状態は、撹乱坑が多く入り、良好ではなかった。柱穴はP1～P3の３基を検出し、P3には柱痕が認められた。貼床、炉跡、周壁溝は検出されなかった。平面形は隅丸長方形とみられ、短軸が推定3.7mを測る。小量の土器が出土したが、図化できたものは98の壺の口縁部だけであった。

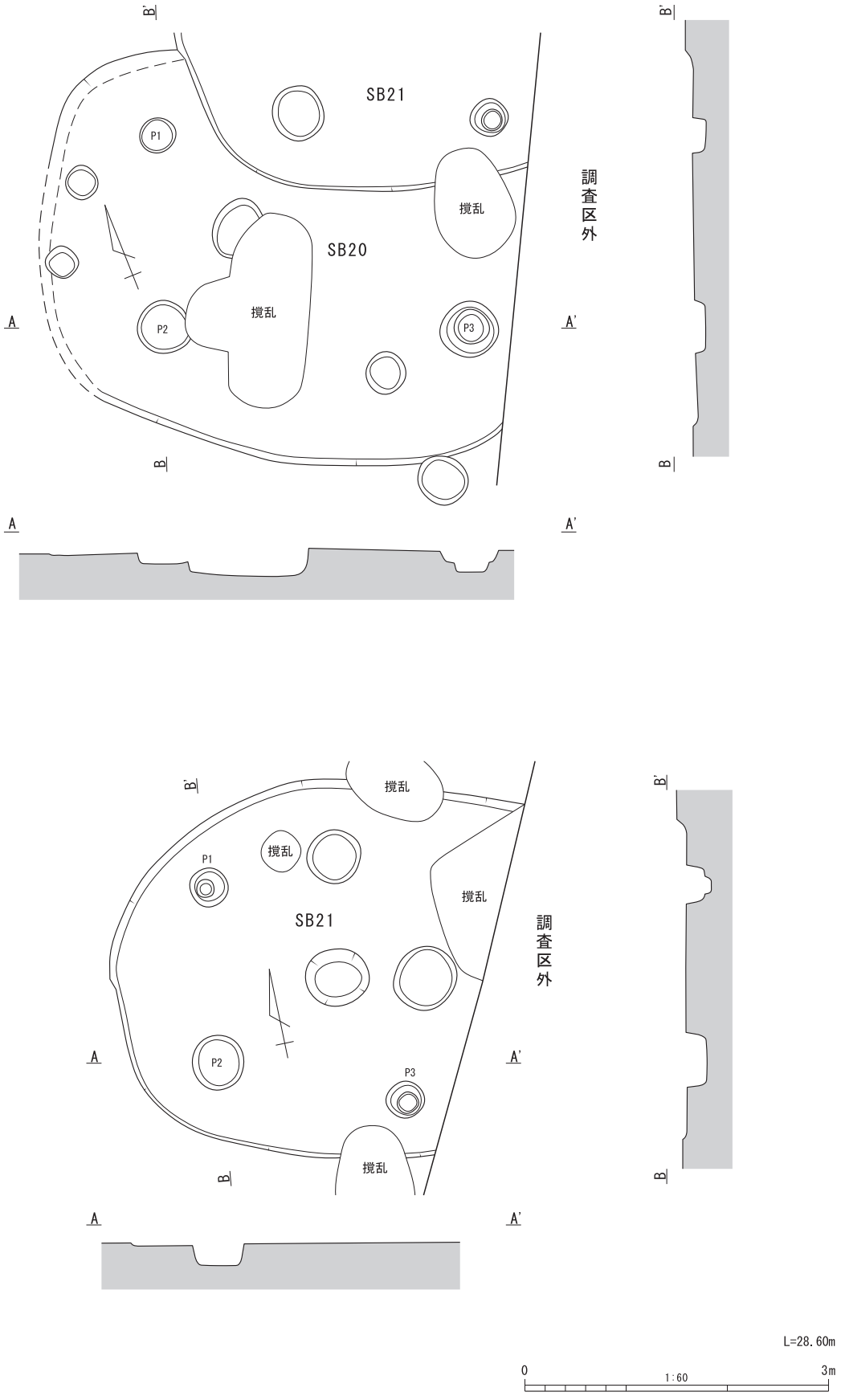
住居の廃絶時期は、小破片の土器以外に根拠はないが、弥生後期中葉～後葉であろう。

SB21（第27図）　Ｂ区の北側のB4グリッドに位置する竪穴住居で、全体の約３分の２を検出した。残りの約３分の１は東側の調査区外にあるが、過去の第32次調査では検出されていない。南側半分がSB20と重複しており、SB21がSB20を切っているからSB21の方が新しい。

平面形は楕円形または隅丸長方形とみられ、規模が短軸3.8m、長軸が検出長3.6mを測る。

柱穴は、P1とP2の２基を検出し、やや位置が悪いがP3も柱穴の可能性が高い。貼床、炉跡、周壁溝は検出されなかった。出土土器は非常に少なく、図化できるものは無かった。

住居の廃絶時期は、小破片の土器以外に根拠はないが、弥生後期中葉～後葉であろう。



第27図　SB20・21実測図

SB22（第28図） Ｂ区の北側のB5・B6グリッドに位置する竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。平面形は隅丸方形で、4.1m×4.4mの規模をもつ。遺構の残存状態は良好であった。柱穴は、P1～P4の４基を検出した。ただしP3の横で検出したP5が柱穴であった可能性もある。貼床、炉跡、周壁溝は検出されなかった。土器は埋土の１層と２層の境界面から多量に出土した。土器の下に埋土の２層があることからみて、住居（SB22）がある程度埋まった段階で、窪地に土器が廃棄されたことが分かる。また土器に混じって白色砂岩製の砥石が出土した。

この住居の堀方は他と異なり、床面の壁際がドーナツ状に残され、中央部が円形に深く掘られていた。これはSB11などでみられた環状堀方の一変種で、掘削の目的は同じと思われる。多数の環状堀方が検出された伊豆の日詰遺跡では、これを環状堀方の一形態として分類している。住居の廃絶時期は、出土土器からみて、弥生後期中葉もしくはそれ以降であろう。

SB23（第28図） Ｂ区の北側のB6グリッドに位置する小型の竪穴住居で、単独で存在し、他の住居との重複関係は認められなかった。平面形は隅丸長方形で、2.6m×3.4mの規模をもつ。炉跡、貼床、周壁溝は精査を繰り返したが検出できなかった。柱穴は、やや不明瞭であったが、P1～P4の４基を検出した。土器は小量が出土したが、図化できたものは無かった。また住居の南端を切っているSK20が検出された。SB23より新しいことは確実であるが、土器が出土せず、時期不明である。

住居の廃絶時期は、小破片の土器からみて、弥生後期中葉～後葉であろう。

・土坑

SK06（第29図） Ａ区の北側のA4グリッドに位置するすり鉢状の土坑で、SB15の南端を切っている。平面形は円形で、大きさ1.8m×2.0mを測る。この土坑からは多量の土器と礫と108と109の２点の打製石斧が出土した。注目すべき点は、こぶし大の礫を多く伴っていることである。第29次調査、第30次調査、第33次調査の土器集積土坑でも多量の礫を伴っていたことが報告されていることから、これは東原遺跡全体に共通する廃棄方法とみられる。時期は、出土土器からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。

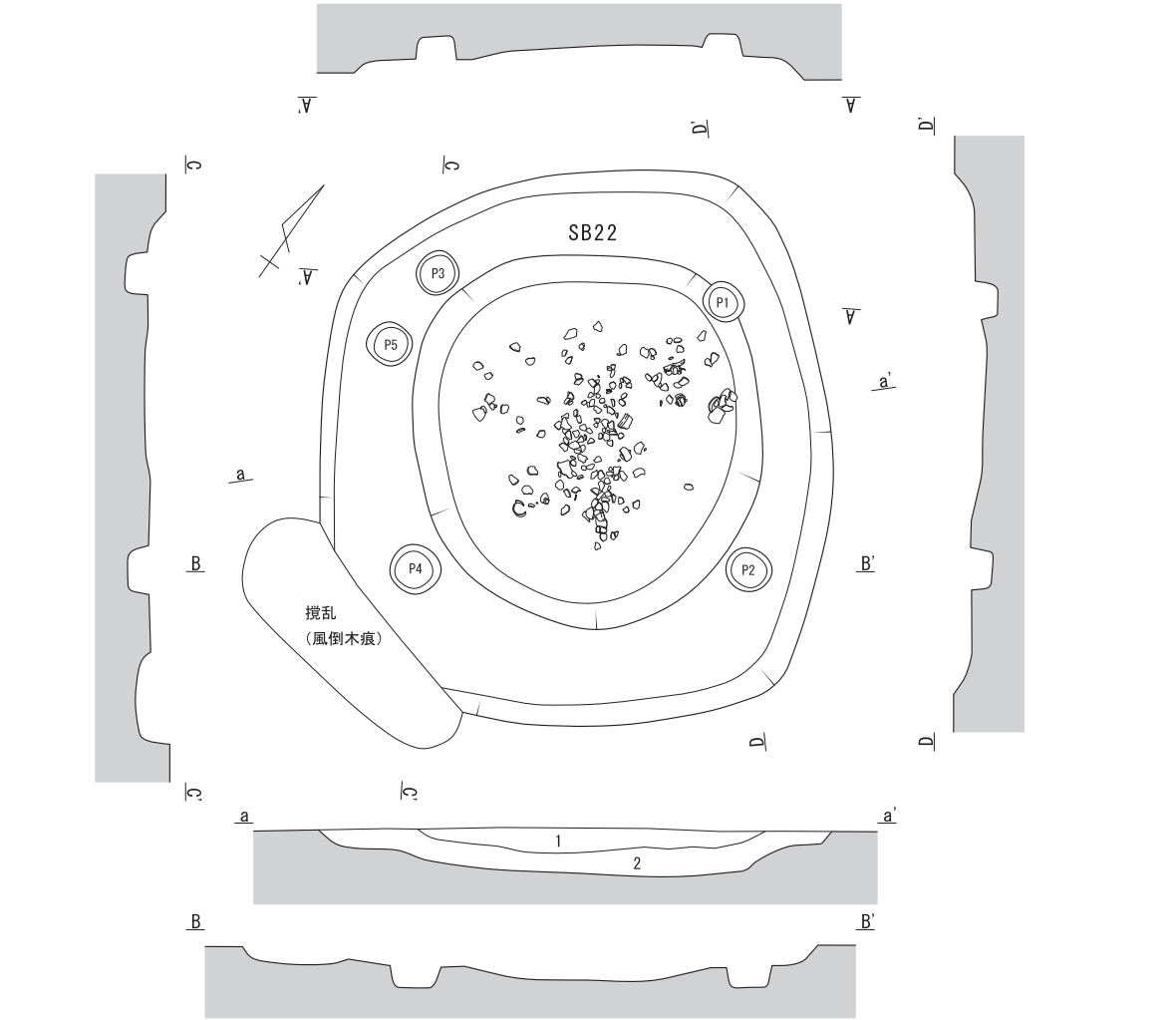
SK18（第10図） Ｂ区の北側のB4グリッドに位置する土坑で、小量の土器片と共に接合部に粘土帯を巻いた139の台付甕の台部が出土した。時期は、弥生後期中葉～後葉であろう。

・溝

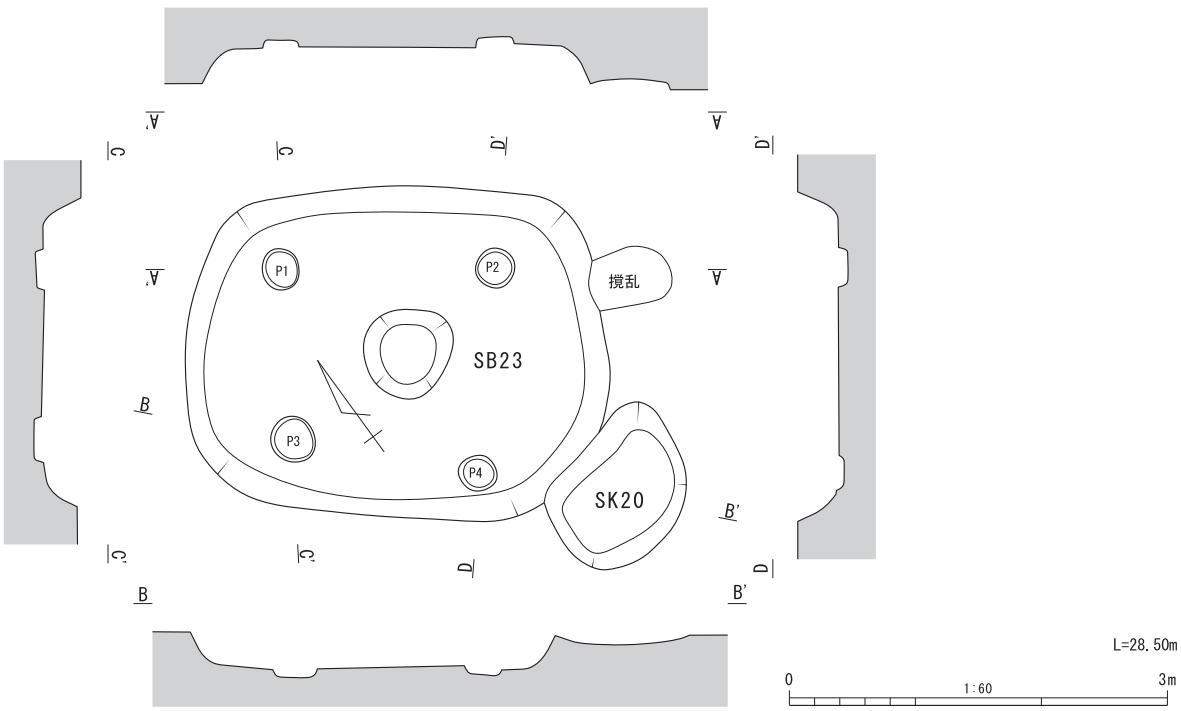
SD02（第９図） Ａ区の北側のA4グリッドに位置する溝で、平行する２条のSD02-AとSD02-Bからなる。北側の窪地の方向に弧を描いて消滅している。この溝からは138の高坏の坏部が少数の土器片と共に出土した。時期は、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。

・小穴

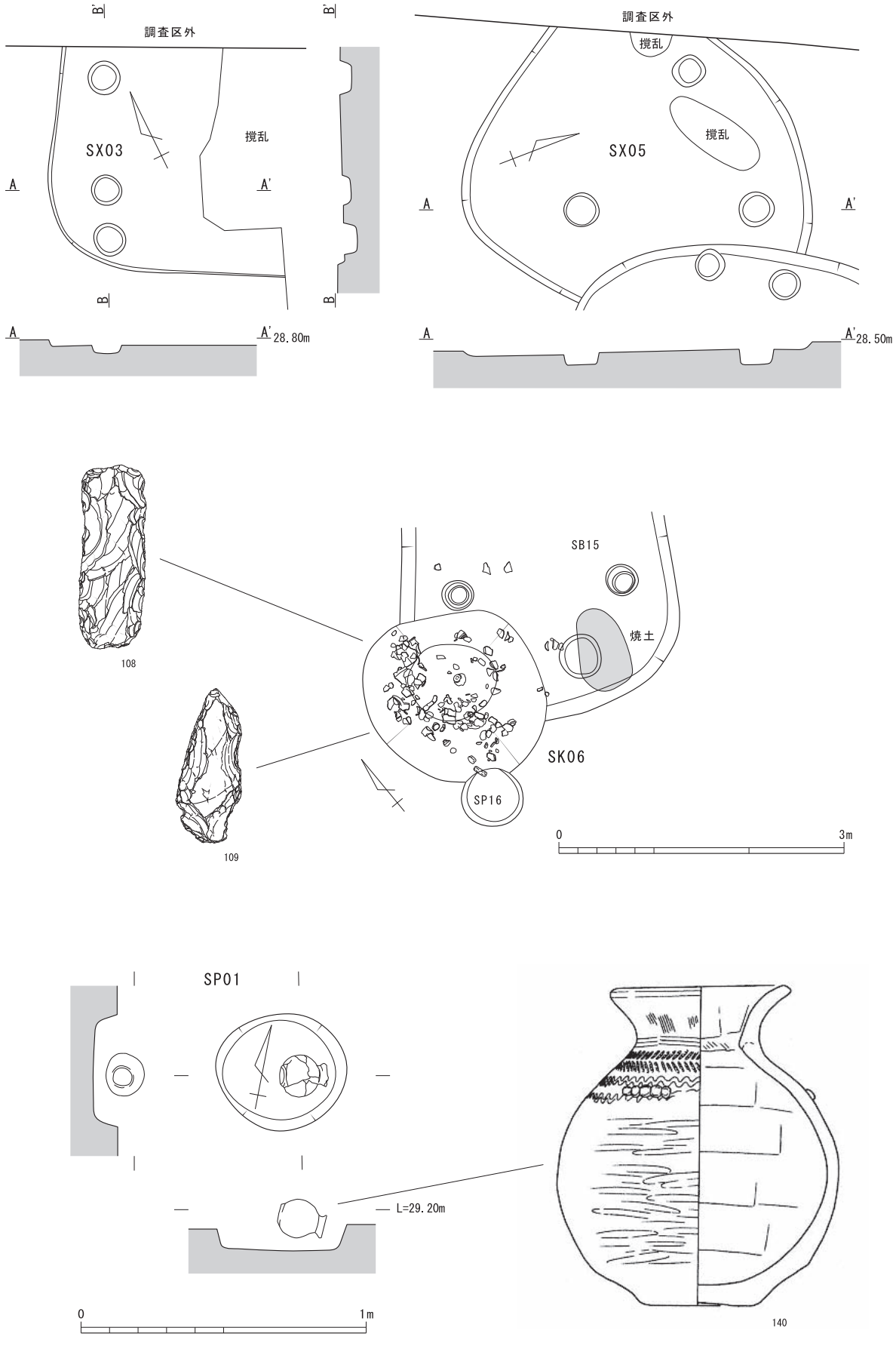
SP01（第29図） Ａ区のA9グリッドに位置する小穴で、平面形が楕円形、規模は大きさ41㎝×46㎝、深さ10㎝を測る。SP01の中に140の完形品の広口壺が入っていた。出土時、この小穴周辺に炭の小破片と土器片が多く散在していたため、竪穴住居を想定してトレンチ調査と平面精査を繰り返した。しかし黒褐色土の中から少しだけ濃い黒色の住居ラインを探し出すことは非常に難しく、最



1 黒褐色シルト
2 暗褐色シルト（黄褐色粘土ブロックを含む）



第28図　SB22・23実測図



第29図　SX03・05. SK06. SP01実測図

終的に確信が持てなかった。おそらく住居に伴う貯蔵穴であったと考える。時期は、弥生後期中葉～後葉であろう。

・不明土坑

SX03（第29図）　Ｂ区のB1グリッドにある土坑で、平面形と規模は不明である。遺構の深さは約10㎝で、残存状態は良好ではなかった。遺構の内部で小穴を３基検出した。土器は出土しなかった。竪穴住居の可能性があったが、周辺部が広範囲に撹乱されていることもあって、確信が持てなかった。時期は、埋土からみて、弥生時代後期であろう。

SX05（第29図）　Ｂ区のB4グリッドにある土坑で、平面形が不正形、規模は大きさ3.2m×3.6m、深さ８㎝を測る。遺構の残存状態は良好ではなかった。東側の一部がSB20に切られ、西側の一部が調査区外に伸びている。当初、竪穴住居と想定して掘り進めたが、炉跡、貼床、周壁溝などが検出されず、小穴は検出したが不自然な位置にあることから、最終的に住居である確信が持てなかった。時期は、出土した小破片の土器からみて、弥生時代後期であろう。

（３）江戸時代の遺構

・溝

SD01（第９図）　Ａ区のA9～A11グリッドにある浅い溝で、弥生時代後期の竪穴住居SB03を切っている。遺物は弥生土器の細片以外は出土しなかった。この溝の時期は、埋土が比較的に新しく見えることと、周辺の屋敷区画溝とほぼ同じに方向に伸びていることから、江戸時代の区画溝と判断した。

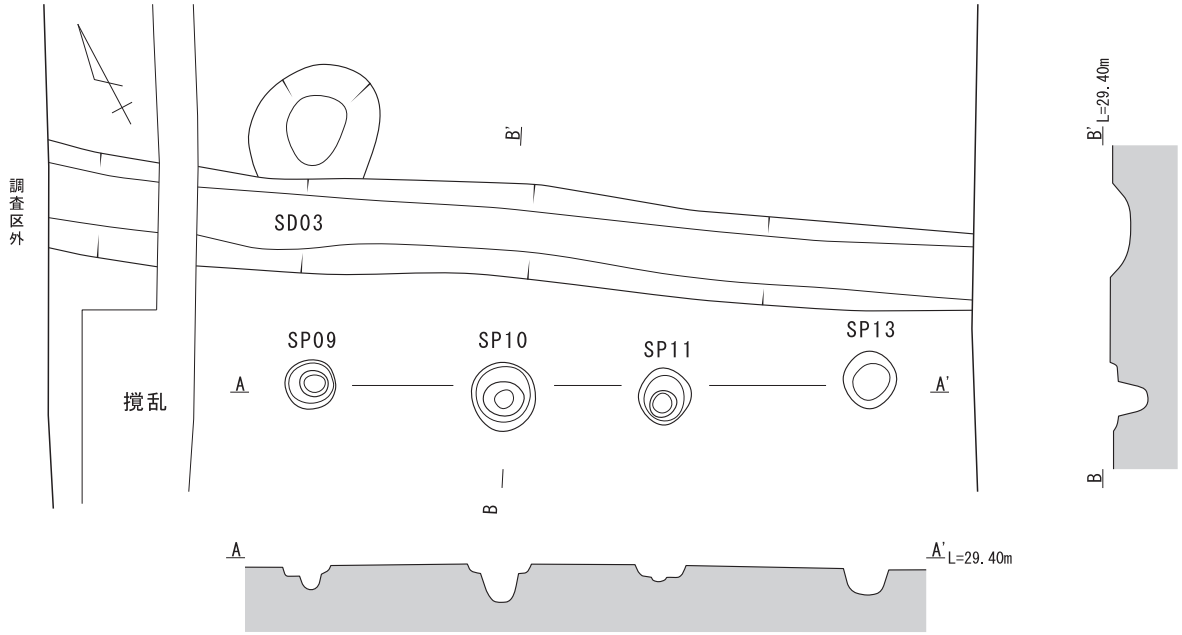
SD03（第30図）　Ａ区のA5グリッドにある東西方向に伸びる浅い溝で、幅約70㎝、深さ約20㎝、長さ7.3mを測る。溝の南側には並行して４基の小穴がある。遺物は、弥生土器の小破片以外は出土しなかった。この溝と４基の小穴は関連する遺構と考えた。時期は、溝が伸びている方向から、江戸時代の屋敷区画溝と判断した。並行する４基の小穴は柵もしくは板塀などの痕跡であろう。

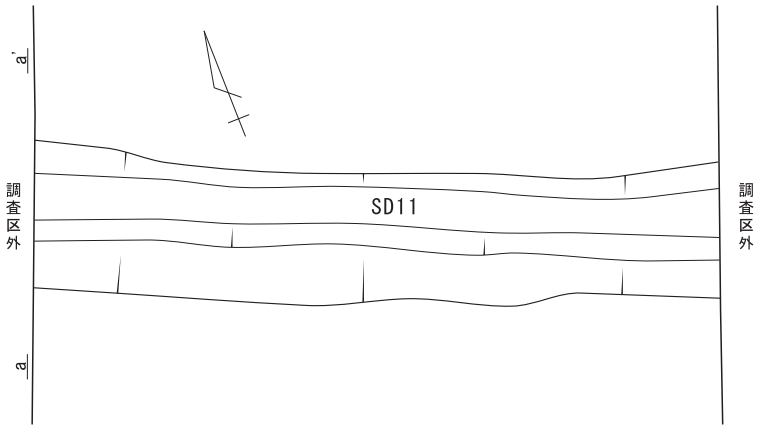
SD04（第10図）　Ｂ区のB3グリッドにある東西方向に伸びる深い溝で、風倒木痕などによって撹乱されている。遺物は弥生土器と江戸時代の土器の小片が出土した。この溝の時期は、埋土および溝が伸びる方向から、江戸時代の屋敷区画溝と判断した。

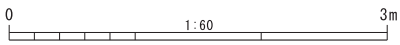
SD05（第10図）　Ｂ区のB12グリッドにある南北方向に伸びる深い溝であり、SD07とSD08に接続している。遺物は出土しなかった。時期は江戸時代と推定する。

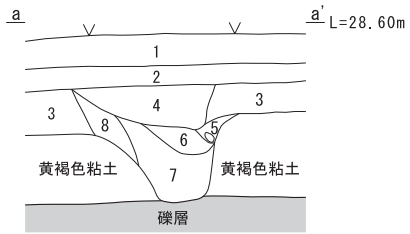
SD06（第31図）　Ｂ区のB11・B12グリッドにある直角に曲がる深い溝であり、底部にこぶし大の礫が堆積している。礫に混じって184の碗、188の石臼、186と187の砥石、194のかわらけが出土した。南端はSD07に接続し、接続部に人頭大の石を積み重ねた堰がつくられていた。堰は水が逆流しないための工夫であろう。用途は屋敷内の排水溝であり、時期は出土遺物から判断して江戸時代後期と考える。

SD07（第31図）　Ｂ区のB12グリッドにある東西方向に伸びる深い溝であり、江戸時代後期の屋敷区画溝である。遺物は江戸時代後期の土器片が少量出土している。









1 盛土 （砂・小円礫を多く含む）
2 黒灰色粘質土 （旧耕作土）
3 暗褐色砂質土
4 暗褐色砂質土 （黄褐色粘土大ブロックを多く含む）
5 暗褐色砂質土 （こぶし大の礫を含む） くずれた土
6 黒灰色砂質土 （ややしまりなし）
7 黒灰色砂質土
8 黒灰色砂質土 （黄褐色粘土の小ブロックを少し含む）

第30図　SD03・11実測図

SD08（第10図）　Ｂ区のB12グリッドにある東西方向に伸びる深い溝であり、江戸時代後期の屋敷区画溝である。遺物は江戸時代後期の土器片が少量出土している。

SD09（第10図）　Ｂ区のB8グリッドとＣ区のC9グリッドにある東西方向に伸びている溝で、江戸時代後期の屋敷区画溝である。

SD10（第10図）　Ｂ区のB9グリッドとＣ区のC10グリッドにある東西方向に伸びている溝で、江戸時代後期の屋敷区画溝である。SD18およびSD17が接続し、それらから江戸時代後期の遺物が少量出土した。

SD11～SD13（第10図）　Ｂ区のB13グリッドにある東西方向に伸びている溝で、江戸時代後期の屋敷区画溝である。少量の土器が出土した。

SD15・SD16（第10図）　Ｂ区のB18グリッドにある東西方向に伸びている深い溝とB20～B21グリッドにあるコの字状に巡る深い溝で、大量の江戸時代後期の土器が廃棄されていた。一部に明治初年まで下る遺物も見られた。屋敷区画溝であろう。

・土坑

SK05（第９図）　Ａ区の中央、A8グリッドに位置する土坑で、SB10の南端を切っている。大きさ1.4m×1.4mの浅い方形掘方の中に円形のすり鉢状土坑が掘られている。用途は不明である。時期は、方形掘方の角が明確に出ていることから、江戸時代の遺構と推測する。遺物は弥生土器の小破片以外は出土していない。

・小穴群（第10図）　Ｂ区のB9～B11グリッドで多数の小穴を検出した。調査区の幅が狭いこともあって、具体的に建物を復元することはできなかった。東側の第32次発掘調査で江戸時代の屋敷建物が検出されていることから、それに関連した建物であろう。

（４）時期不明の遺構

SX01（第９図）　Ａ区のA3グリッドにある深い土坑で、土器は出土せず、時期不明である。埋土からみて、比較的新しい遺構と判断した。

SX02（第９図）　Ａ区のA3グリッドにある深い土坑で、土器は出土せず、時期不明である。SX01と同種、同時期の遺構である。

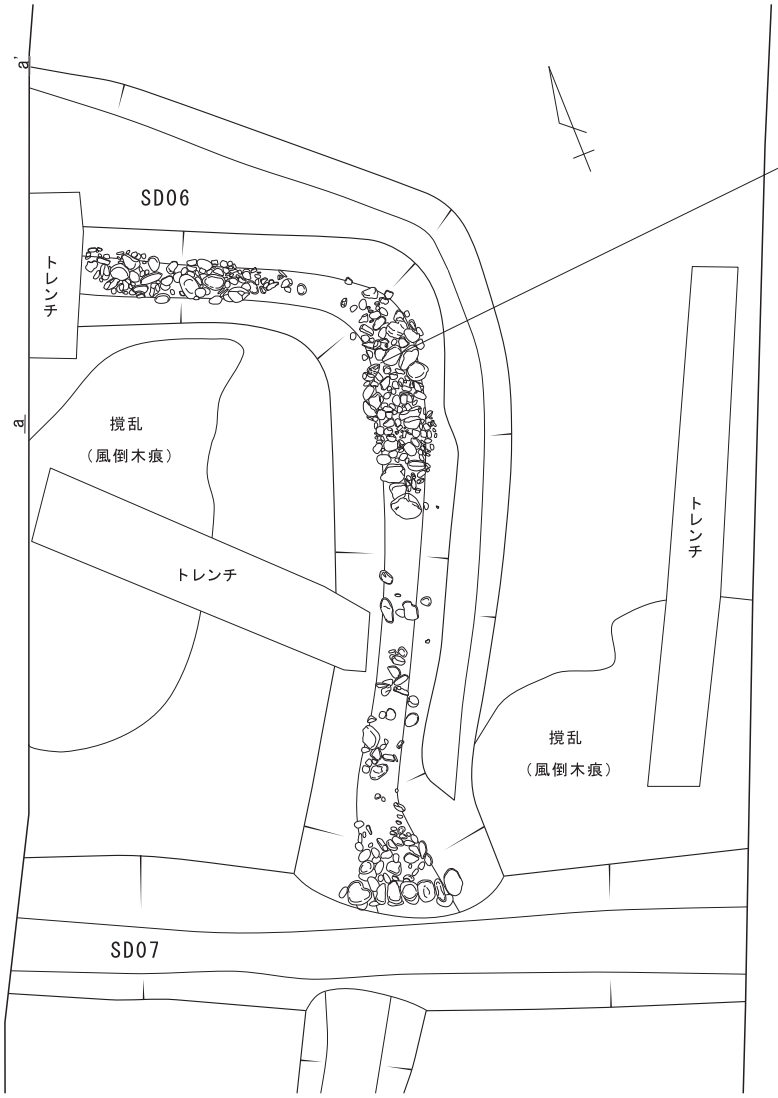
SX06（第10図）　Ｂ区のB5・B6グリッドにある浅い土坑で、全体の約２分の１を検出した。少量の弥生土器片が出土した。弥生時代の遺構の可能性が高い。

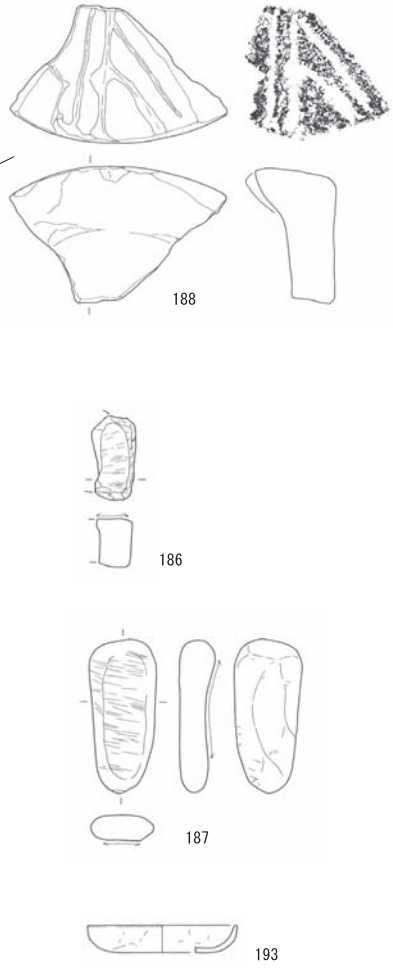
SX07（第10図）　Ｂ区のB8グリッドにある浅い土坑で、土器は出土しなかった。周辺には撹乱坑が多くある。江戸時代の遺構である可能性が高い。

SX08（第10図）　Ｂ区のB18グリッドにある深い土坑で、溝（SD15）を切っている。時期は江戸時代以降である。

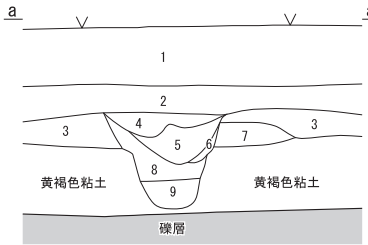
SX09（第10図）　Ｂ区のB19グリッドにある浅い土坑で、土器は出土しなかった。時期は江戸時代後期であろう。

SX10（第10図）　Ｃ区のC7グリッドにある浅い土坑で、土器は出土しなかった。





SD06　出土遺物



1 盛土　（砂・小円礫を多く含む）
2 黒灰色粘質土　（旧耕作土）
3 黒灰色砂質土　（暗褐色の小ブロックを含む）
4 黒色砂質土
5 暗灰色砂質土　（黄褐色粘土ブロックを多く含む）
6 黒灰色砂質土
7 黒灰色砂質土　（炭を多く含む，黄褐色粘土ブロックを少し含む）
8 黒灰色砂質土　（黄褐色粘土ブロックを少し含む）
9 黒灰色砂質土　（円礫を多く含む）

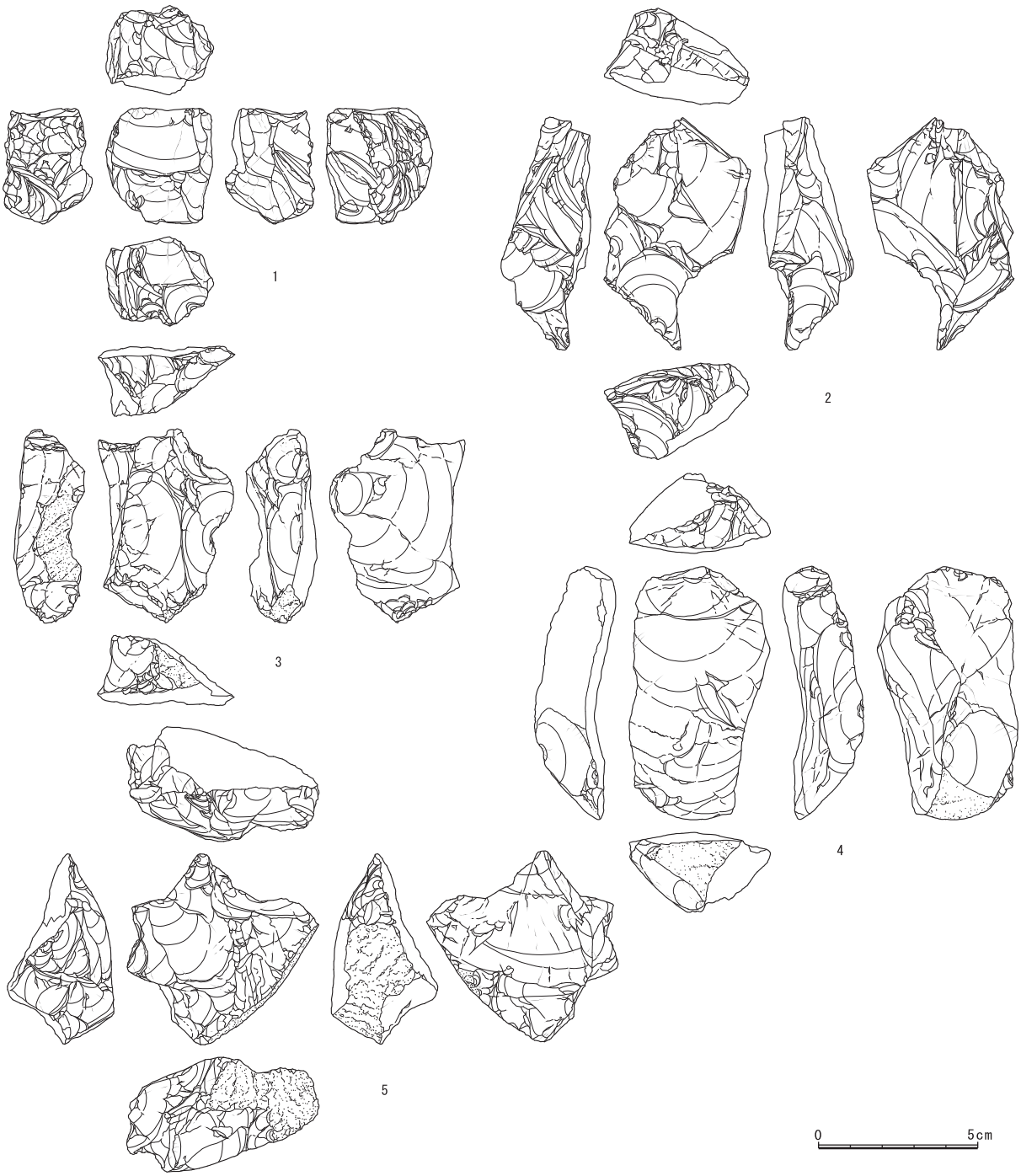
0　1:60　3m

第31図　SD06・07実測図

第３節　出土遺物

（１）縄文時代の遺物

１～５は縄文時代の石核である。石材は頁岩で、表面から数㎜の厚さが風化により乳白色に変化しているが、内側は黒色のままである。他に頁岩の剥片７点（総重量62.1ｇ）が出土している。１は大きさ3.3×3.6×2.8㎝、重さ39.8ｇを測り、A6グリッドの包含層から出土した。２は大きさ4.5×7.3×2.8㎝、重さ63.0ｇを測り、B-1区の包含層から出土した。３は大きさ4.3×6.1×2.2㎝、重さ47.4ｇ

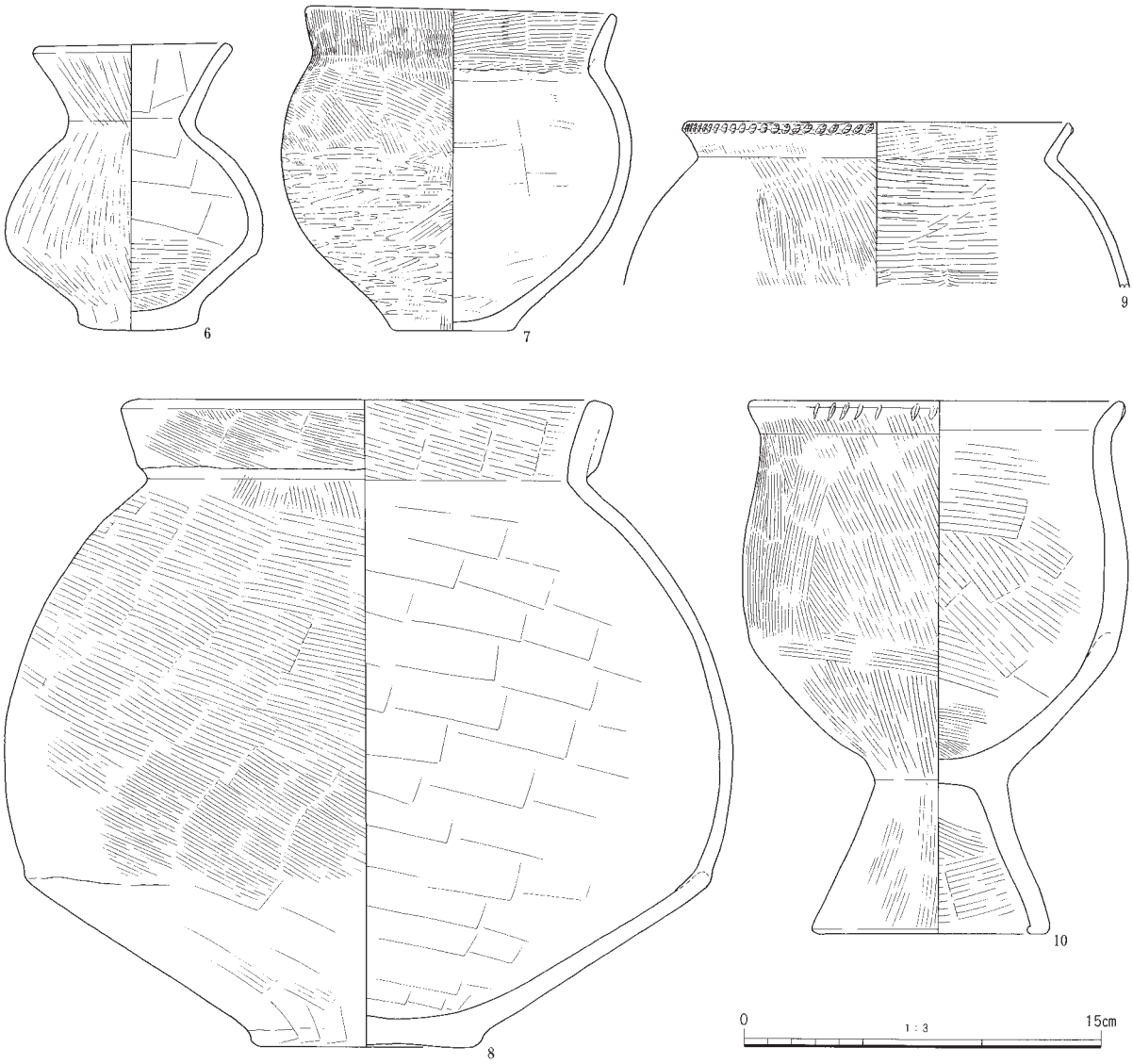


第32図　縄文時代石器実測図

を測り、A区北半の包含層から出土した。4は大きさ4.4×8.0×2.5㎝、重さ59.0ｇ、A6グリッドの包含層から出土した。5は大きさ6.0×6.0×3.1㎝、重さ83.0ｇ、A区北半の包含層から出土した。これらの石器の時期を縄文時代と推定したが、明確な遺構および共伴した土器が無いことから、確証はない。

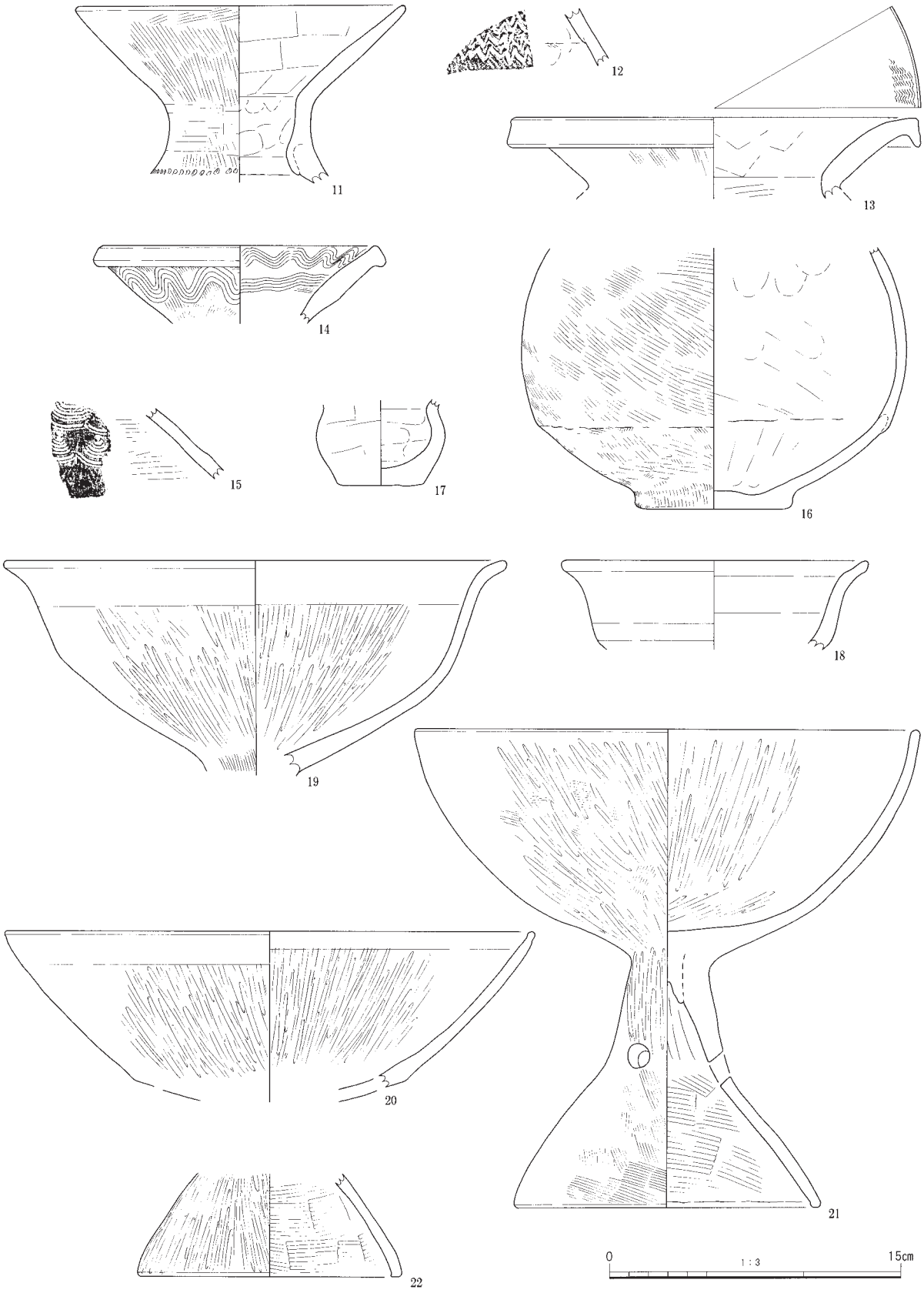
（2）弥生時代の遺物

SB01出土土器（第33図）　6は小型広口壺で、直線的に開く口縁部、下半に稜がある体部、丸味を帯びた口唇部をもつ。7は小型鉢で、体部下半に横方向の細かなヘラミガキが認められる。8は大型鉢で、折り返し口縁部をもつ。菊川様式の影響を受けている。9は台付甕で、球胴形の体部と、丸味を帯びた口唇部をもつ。10は台付甕で、やや内湾した台部と、丸味を帯びた口唇部をもつ。
以上のSB01出土土器の時期であるが、6の器形、9の球胴形の体部、9と10の丸味を帯びた口唇部などから伊場様式期新段階（弥生後期中葉）と考える。



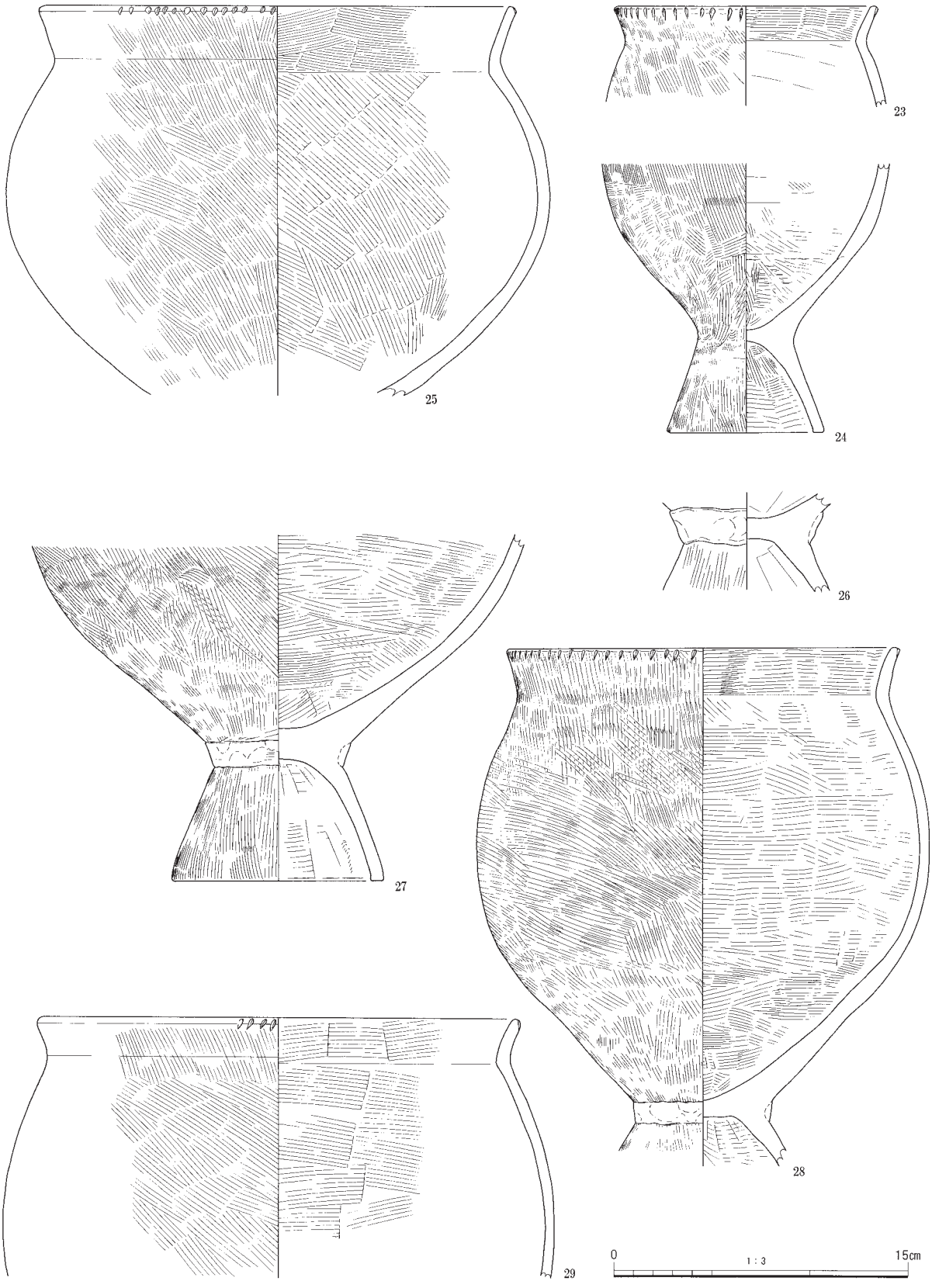
第33図　SB01出土遺物

SB02出土土器（第34･35図） 11は壺で、直線的に開く口縁部と、やや長い頸部をもつ。菊川様式の影響を受けている。12は壺の肩部の破片で、粗雑な波状紋を施している。この粗雑な波状紋は東



第34図　SB02出土遺物 1

原遺跡で多く認められる。13は広口壺の口縁部で、内面に扇状紋を施し、口唇部を下方に引き伸ばしている。口唇部を下方に伸ばす技法は東三河で行われているものであり、その影響を受けている

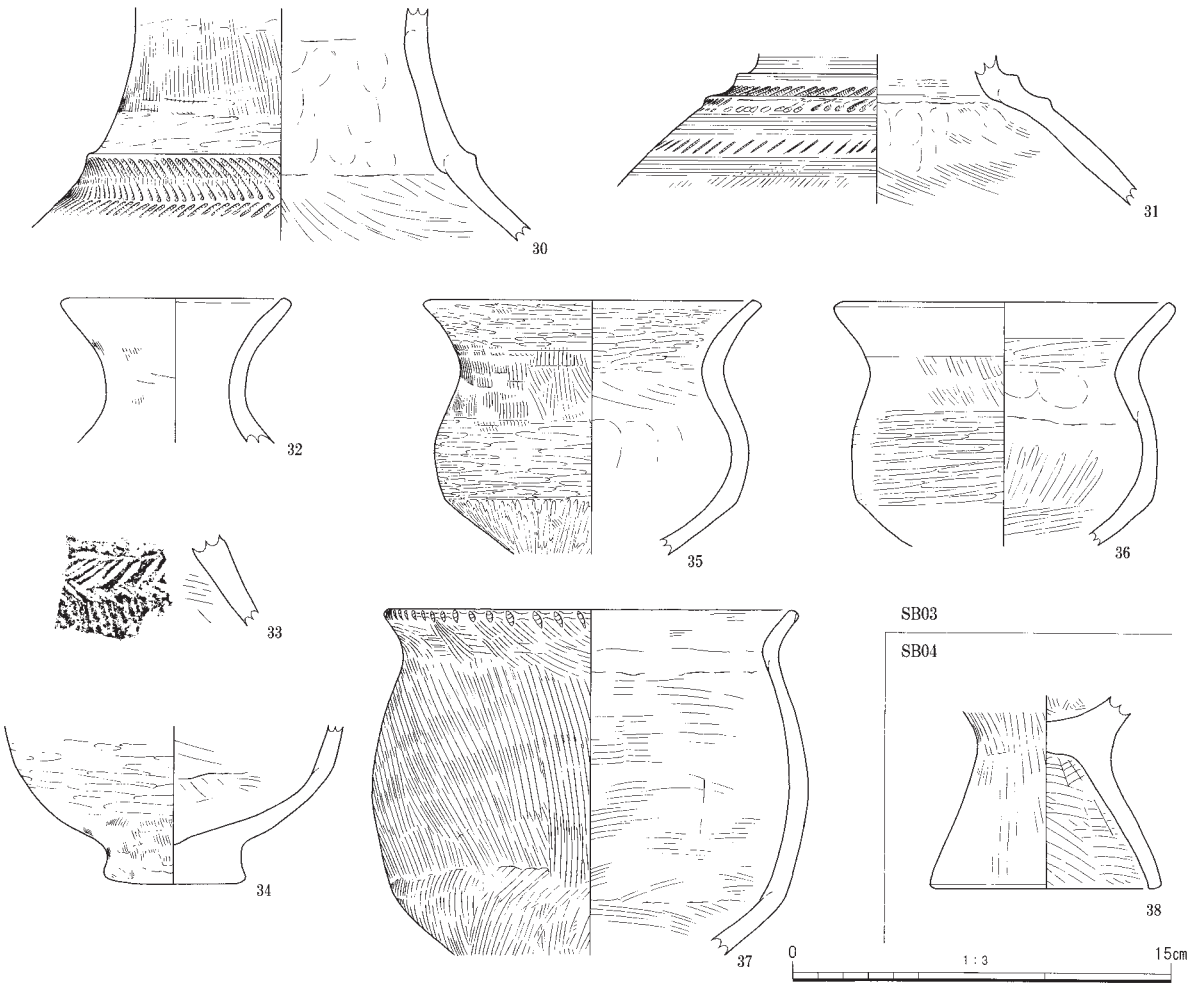


第35図　SB02出土遺物 2

と考える。14は広口壺の口縁部で、内外面に波長の長い波状紋を施し、口唇部を少し下方に引き伸ばしている。これも東三河の影響を受けている。15は壺の肩部で、扇状紋を多段に施している。16は広口壺の下半部で、球胴形の体部をもつ。17は手づくね土器で、口縁部を欠く。18は小型高坏で、坏部の途中に稜をもつ。19は高坏の坏部で、外反した口縁部と丸味を帯びた口唇部をもつ。東原遺跡では、この形状の高坏が非常に多い。20は高坏の坏部で、尖頭形の口唇部と、坏部下方に稜をもつ。21は高坏で、半球状の坏部と下半が内湾する脚部をもつ。22は高坏の内湾する脚部破片である。23は台付甕の上半部で、丸味を帯びた口唇部をもつ。24は台付甕の下半部で、やや内湾する台部をもつ。接点はないが、胎土からみて23と24は同一個体と思われる。25は台付甕で、球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。26は台付甕の接合部で、粘土帯とその表面に指頭圧痕が認められる。粘土帯は西遠江特有の技法であり、これについては第４章で触れる。27は台付甕の下半部で、やや内碗する台部をもつ。28は長胴形の台付甕で、接合部の粘土帯と丸味を帯びた口唇部をもつ。29は台付甕で、球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。

以上の時期は、20の坏部形状と丸味を帯びた口唇部、21と22の内湾する脚部、24と27のやや内湾した台部、23、25、28、29の丸味を帯びた口唇部からみて、欠山様式期と考える。

SB03出土土器（第36図） 30は広口壺の肩部および頸部で、三角突帯上に刺突羽状紋を施している。菊川様式の影響を受けている。31は広口壺の肩部で、２段の三角突帯をもち、刺突斜線紋と横



第36図　SB03・04出土遺物

線紋を交互に施している。菊川様式の影響を受けている。32は壺のラッパ状に開く口縁部と頸部で、丸味を帯びた口唇部をもつ。これも菊川様式の影響を受けているのであろう。33は壺の肩部の破片で、三角突帯の上に刺突羽状紋を施している。菊川様式の影響を受けている。34は壺の下半部で、球胴形の体部をもつ。35は短い口縁部が外に開く小型鉢で、口縁部の内側と体部の外面に細かなヘラミガキ痕が認められる。36も口縁部が外に開く小型鉢で、強くヨコナデされた口縁部と丸味を帯びた口唇部をもつ。

以上のように、SB03出土土器は菊川様式の影響を受けた土器が目立つ。

時期は、31の横線紋と刺突斜線紋および2段の三角突帯、36や37の丸味を帯びた口唇部などからみて、欠山様式期（弥生後期後葉）の比較的古い時期と考える。

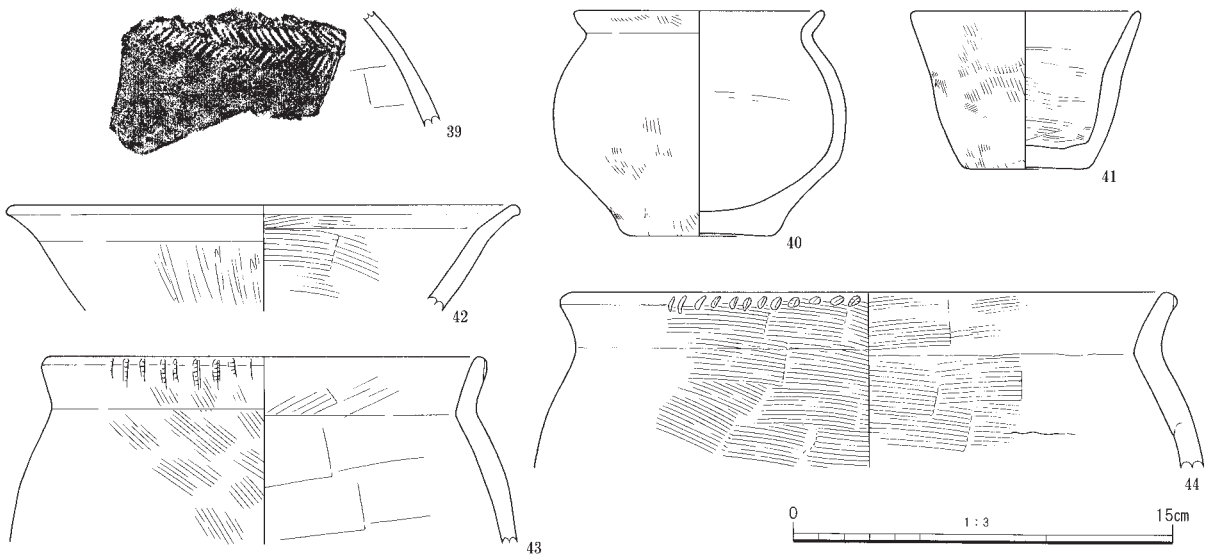
SB04出土土器（第36図） 38はやや内湾気味に広がる台付甕の台部で、時期は伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろうか。SB04からは土器がほとんど出土しなかった。

SB05出土土器（第37図） 39は壺の肩部で、刺突羽状紋を施している。40は小型鉢で、外反する短い口縁部と丸味を帯びた口唇部をもつ。41はコップ状の小型鉢で、直線状に開く口縁部と尖頭形の口唇部をもつ。42は高坏の坏部と思われ、外側へ屈曲した口縁部と丸味を帯びた口唇部をもつ。43と44は台付甕の体部上半で、丸味を帯びた口唇部をもつ。

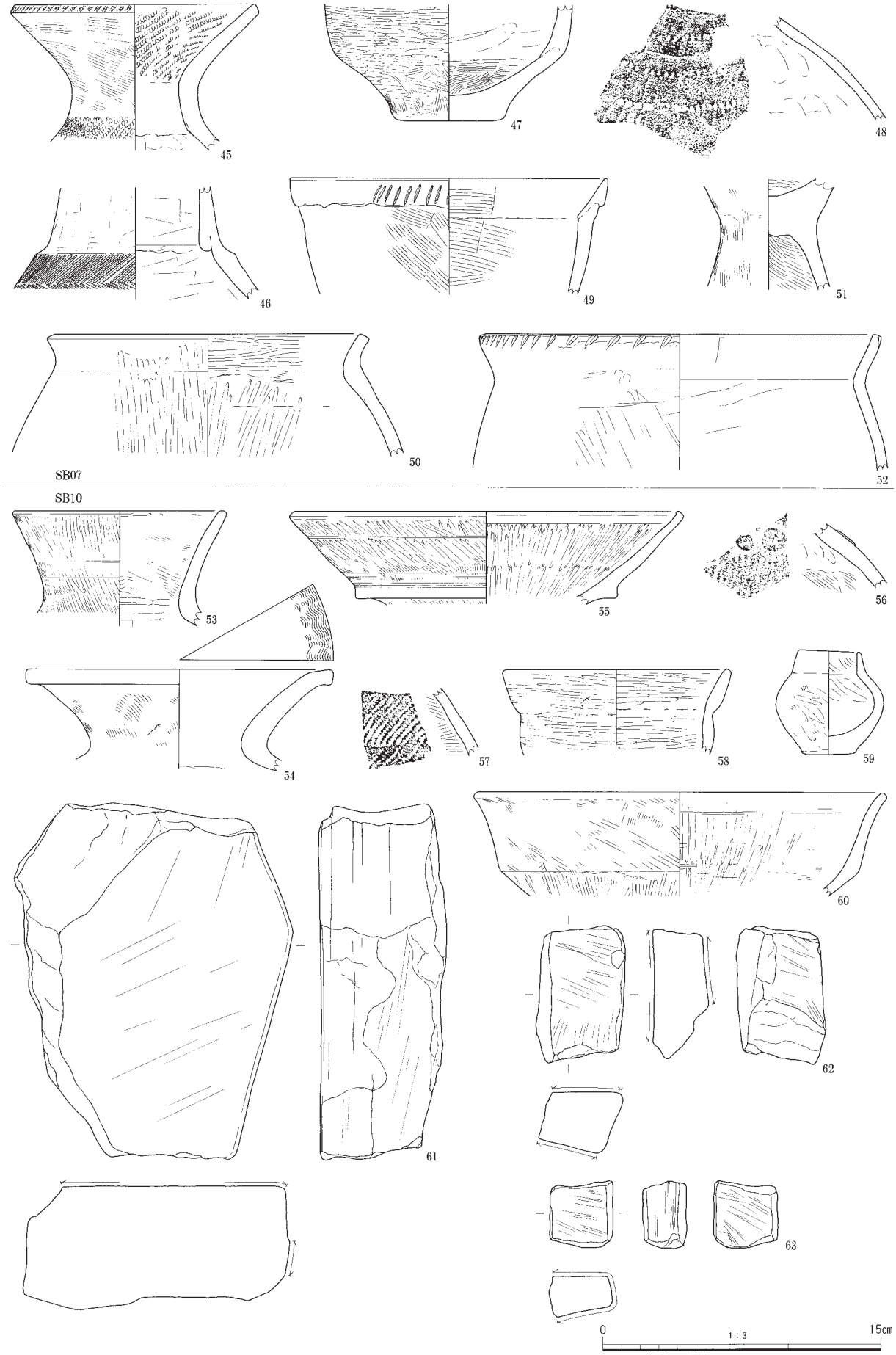
時期は、過去の第18次調査で出土した土器のうち（第15図参照）、高坏の脚部形状と片口鉢の器形からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と推定する。今回の出土土器も矛盾しない。

SB07出土土器（第38図） 45は広口壺の口縁部および頸部で、口縁部の内側と肩部に縄紋を施している。菊川様式の影響を受けている。46は広口壺で、肩部の三角突帯上に刺突羽状紋を施し、頸部に縦方向のヘラミガキ痕が認められる。菊川様式の影響を受けている。47は壺の体部下半で、横方向への細かなヘラミガキを施している。48は広口壺の肩部で、刺突横線紋と刺突斜線紋が交互に施されている。49は珍しい器形であるが、鉢であろうか。ススの付着は認められない。50は鉢の上半部で、内外面が細かくヘラミガキされている。51は台付甕の接合部である。52は台付甕の体部上半で、やや内湾した口縁部をもつ。

以上の時期は、48の紋様と52の内湾した口縁部からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）であろう。

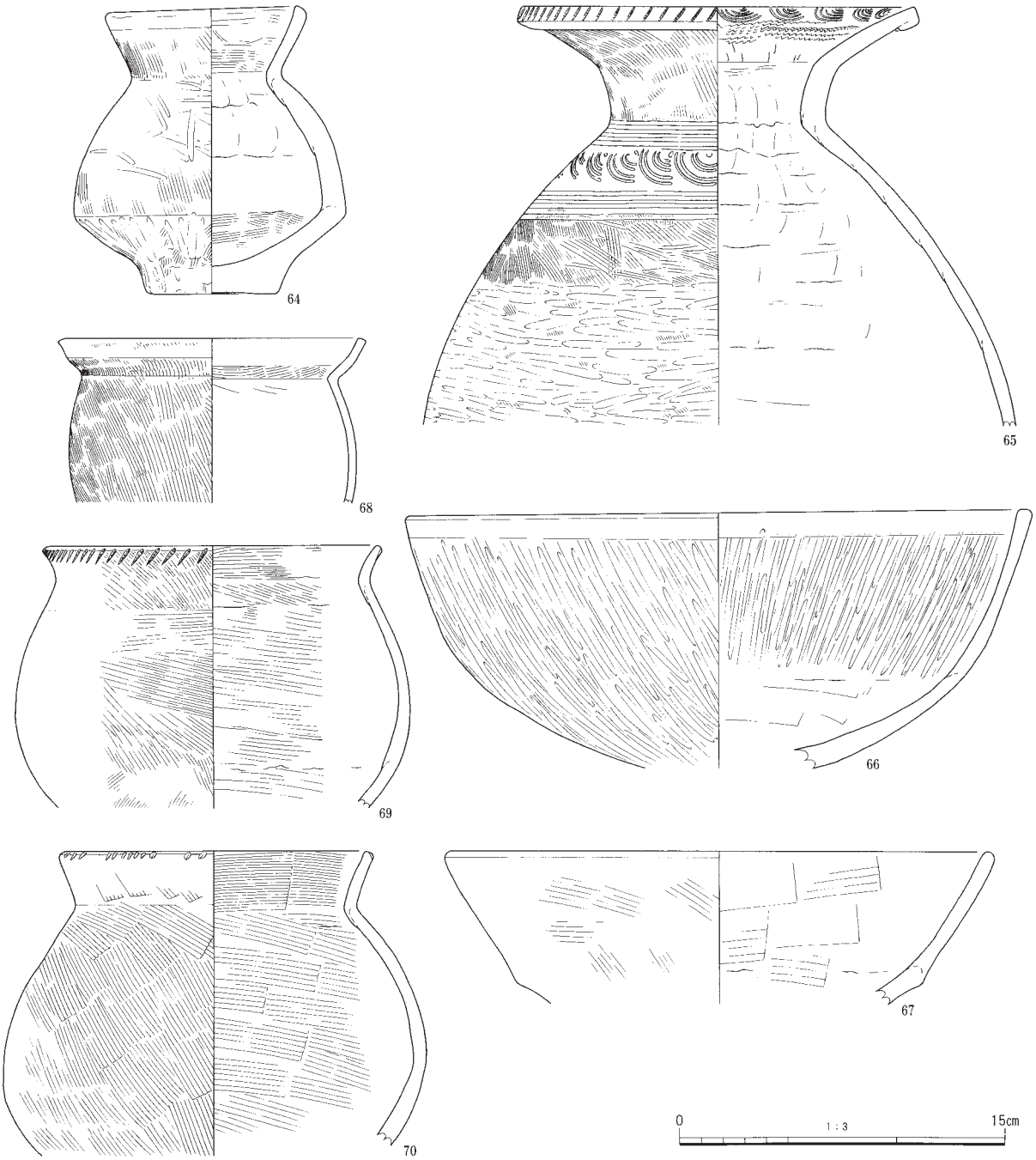


第37図　SB05出土遺物



第38図　SB07・10出土遺物

SB10出土遺物（第38図） 53は壺の直線状に開く口縁部で、丸味をおびた口唇部をもつ。54は広口壺で、先端で少し屈曲する口縁部をもち、その内側に波状紋を施している。55は高坏の坏部であろうか。外面下部に三角形の突帯を巡らせ、内外面とも縦方向の丹念なヘラミガキ痕が認められる。類似した三角形の突帯をもつ高坏は都田川流域の椿野遺跡で多く出土している。西からの影響の可能性がある。56は壺の肩部で、縄紋を施し、円形浮紋をつけている。57も壺の肩部で、縄紋を施している。56と57は菊川様式の搬入品もしくは影響であろう。58は口縁部を皮厚した小型鉢で、内外面に横方向のヘラミガキ痕が認められる。59は壺形手づくね土器の完形品である。60は高坏の坏部で、下部に稜をもち、外反する口縁部と丸味を帯びた口唇部をもつ。61～63は砥石で、61は非常に平らで滑らかな使用面をもつ。61は住居内の小穴から滑らかな面を上にした状態で出土した。62は



第39図　SB11出土遺物（一括）

2面、63は3面の使用面をもつ。以上の遺物の時期は、54や60の器形からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。

SB11出土土器（第39･40図） 64はやや内湾する口縁部をもつ広口壺で、体部下方に稜をもち、口縁部に強いヨコナデ痕が認められる。65はなで肩の広口壺で、折り返し口縁部をもち、口縁内側に扇状紋と波状紋を施し、肩部に扇状紋と横線紋を施している。折り返し口縁、なで肩は菊川様式の影響をうけている。66は半球形の高坏坏部で、口唇部に弱いヨコナデ痕が認められる。67は坏部下部に稜をもつ高坏で、丸味を帯びた口唇部をもつ。68～70は台付甕である。68は強く内湾する口縁部をもち、口唇部の角に刻み目を入れていない。69と70は共に球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。

（一括土器の検討） 上記の64～70はSB11の西側の壁寄りから出土した土器群である。残念ながら、出土地点が線路敷の法面であったためと、住居の埋土がすべて黒褐色系の類似した土壌であり分層できなかったため、土器群と住居との関係を明確に確認できなかった。しかし、①どれも比較的に大きな破片である、②床面とほぼ同じ高さで検出された、③住居は焼失している等から、壁際に置かれた土器が火災によってそのまま埋没したものと考えられる。これらのことから土器は同じ時期に使用されていた一括土器とみなしてよいと考える。詳しい出土位置と出土状況は第19図に示した。

（考慮すべき問題点） 一括土器の時期を検討するにあたって、考慮しなければならない東原遺跡特有の問題点がある。①菊川様式の影響を強く受けている点、②古い紋様や器形が次の土器様式期まで残っている点である。①については、従来から西遠江で最も強く菊川様式の影響をうけている遺跡として認識されてきた。②については、これまでの調査担当者は、東原遺跡の土器はこの地域の土器様式の中心地（標式遺跡）である伊場遺跡群の土器とは少し違うなと、薄々気づいていた。具体的に言うと、扇状紋および波状紋や半球状の坏部をもつ高坏などの古い要素が新しい時期まで残存している点である。

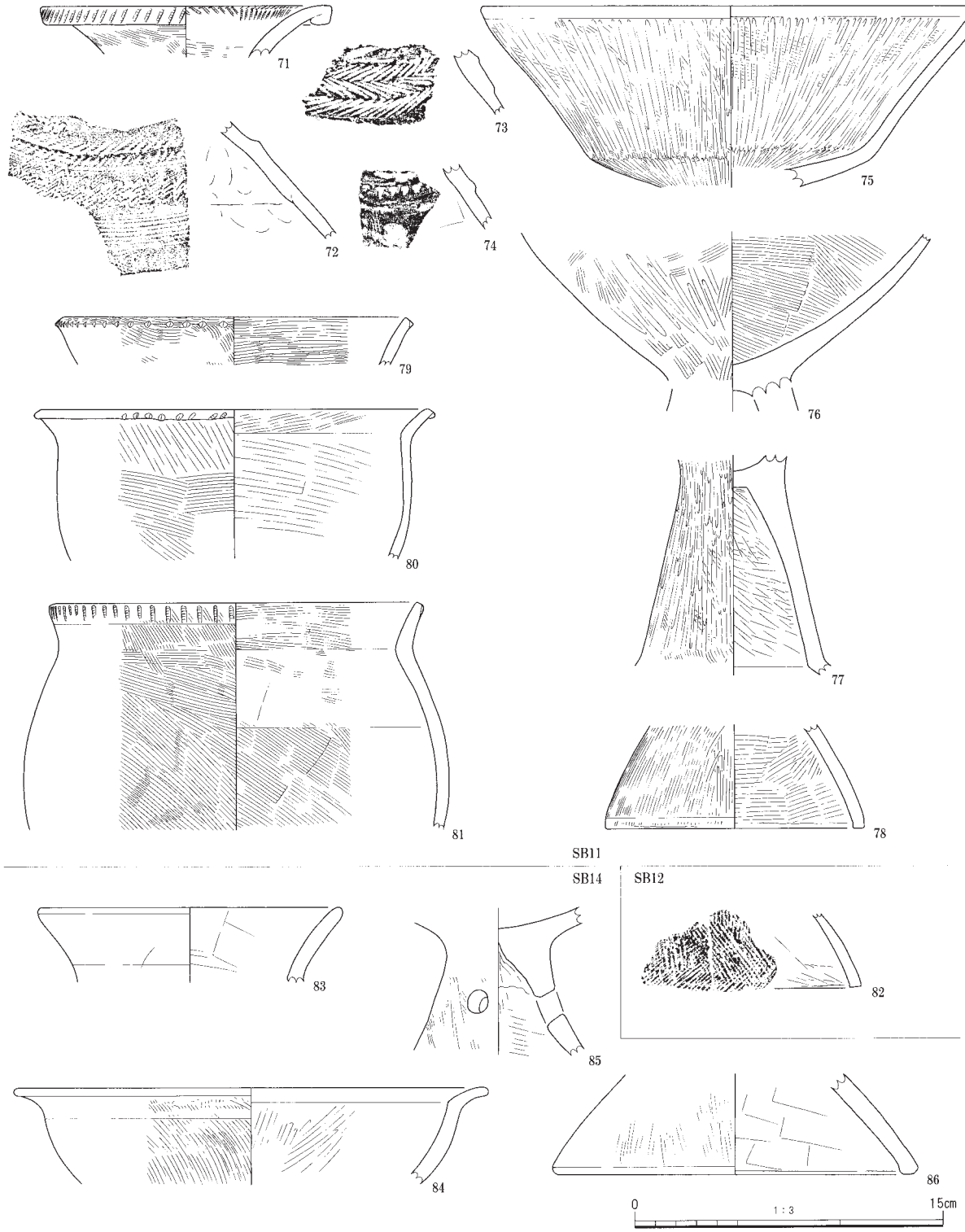
（一括土器の時期） 以上の点を考慮に入れてみていこう。一括土器が欠山様式（弥生後期後葉）の範疇にあることは間違いないが、さらに欠山様式をⅠ～Ⅲに細分した編年（鈴木敏則1991）で言うと、68の刻み目のない内湾口縁部甕の存在と67の高坏坏部の器形からみて、欠山Ⅱ様式もしくは欠山Ⅲ様式にあたる。そしてS字状口縁台付甕がまったく出土していないことから、欠山Ⅲ様式が除外されて、欠山Ⅱ様式となる。69と70の球胴形の体部をもつ台付甕も欠山Ⅱ様式とみて矛盾しない。

問題となるのは、64の下胴部に稜をもつ器形、65のなで肩の器形、65の扇状紋、66の半球形の坏部である。これらはすべて古い要素であり、伊場遺跡群ではこの時期まで残らない。

これをどのように考えるかであるが、前二者は菊川様式にみられる特徴であることから菊川様式の影響をうけたもの、後二者は東原遺跡の特質で前様式の要素が残ったもの、と考えれば解決する。

（その他の出土土器） 71～81が一括土器以外のSB11出土土器である。71は広口壺の口縁部で、折り返し口縁をもち、口唇部と口縁部の内側に刺突斜線紋を施している。72は広口壺の肩部で、三角突帯上に刺突斜線文、その下に波状紋と横線紋を施している。73と74は広口壺の肩部で、三角突帯上に刺突羽状紋または棒状工具による刺突紋を施している。71～74は菊川様式の影響を受けている。75は高坏のやや深い坏部で、下部に稜をもち、口唇部を強くヨコナデして丸くつくっている。76は高坏の坏部で、外面にヘラミガキ痕が認められる。77は高坏の脚部で、屈曲部より下が欠損してい

る。おそらく内湾するのであろう。スカシ孔は無い。78は高坏脚部の先端で、大きく内湾している。79は台付甕の口縁部で、口唇部に明瞭な面をもつ。80は台付甕の上半部で、直立した体部をもつ。81は台付甕の上半部で、口縁部に指によるヨコナデ痕が認められる。以上の土器の時期であるが、75の高坏坏部の形状などから、一括土器と同じ欠山Ⅱ様式であろう。79を除けば、否定する要素は何も見当たらない。79は口唇部に明瞭な面をもち、古い様相を示すが、小破片であることからみて混入品の可能性がある。

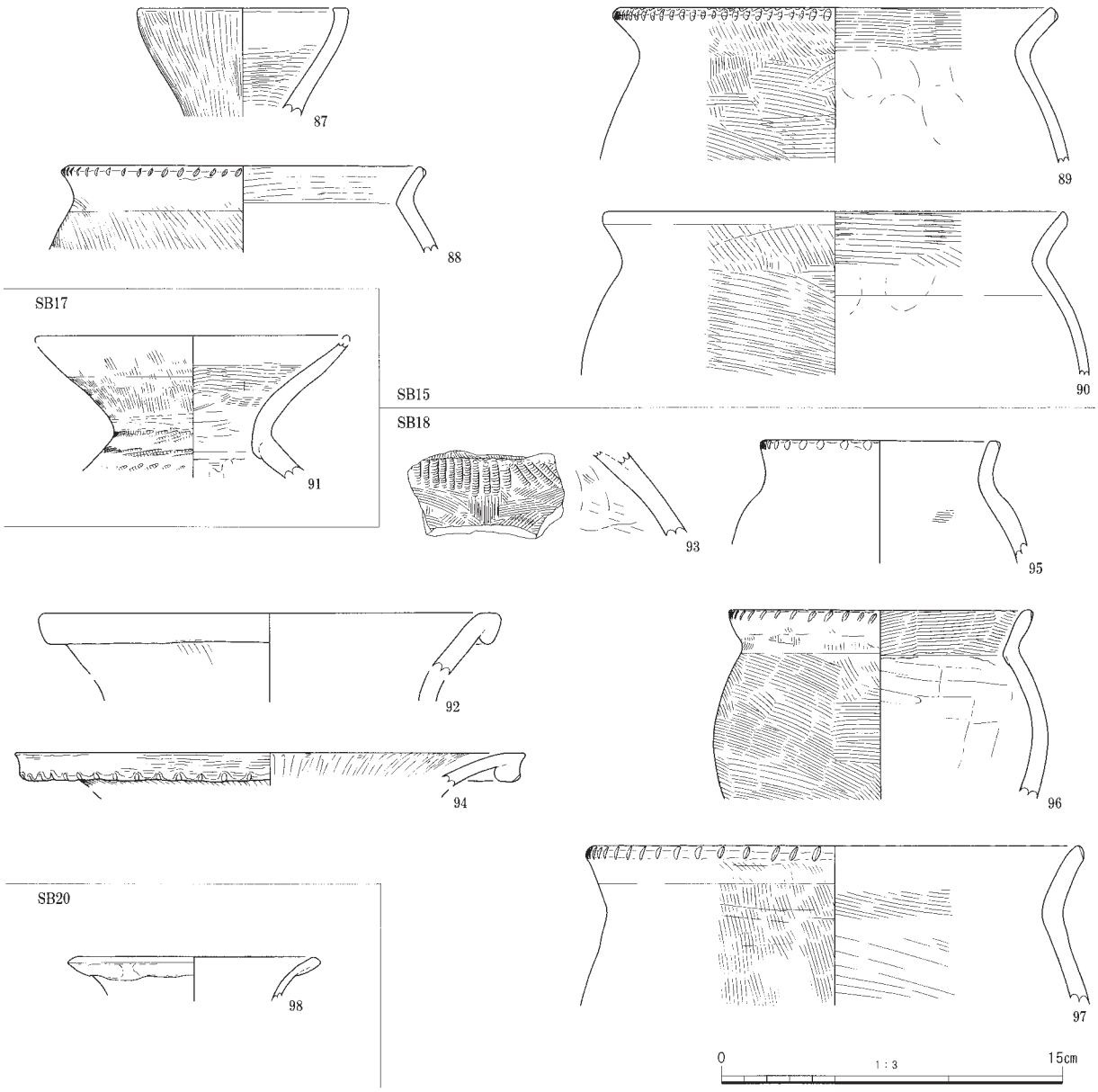


第40図　SB11・12・14出土遺物

SB12出土土器（第40図） 82は台付甕の台部で、段ごとに方向を変えるハケ調整が認められる。

SB14出土土器（第40図） 83は広口壺の口縁部で、やや外反して開き、丸味を帯びた口唇部をもつ。84は高坏の坏部で、先端部が外に屈曲している。これは東原遺跡で多く認められる器形であり、東原遺跡の特質のひとつである。85は高坏の脚部で、円形のスカシ孔を3方向にもつ。脚端は欠損しているが、おそらく内湾するものと思われる。86は高坏の脚端部で、内湾して大きく開いている。以上の時期は、83の丸味を帯びた口唇部や86の内湾して開く脚端部からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。欠山様式期（弥生後期後葉）に入る可能性もある。

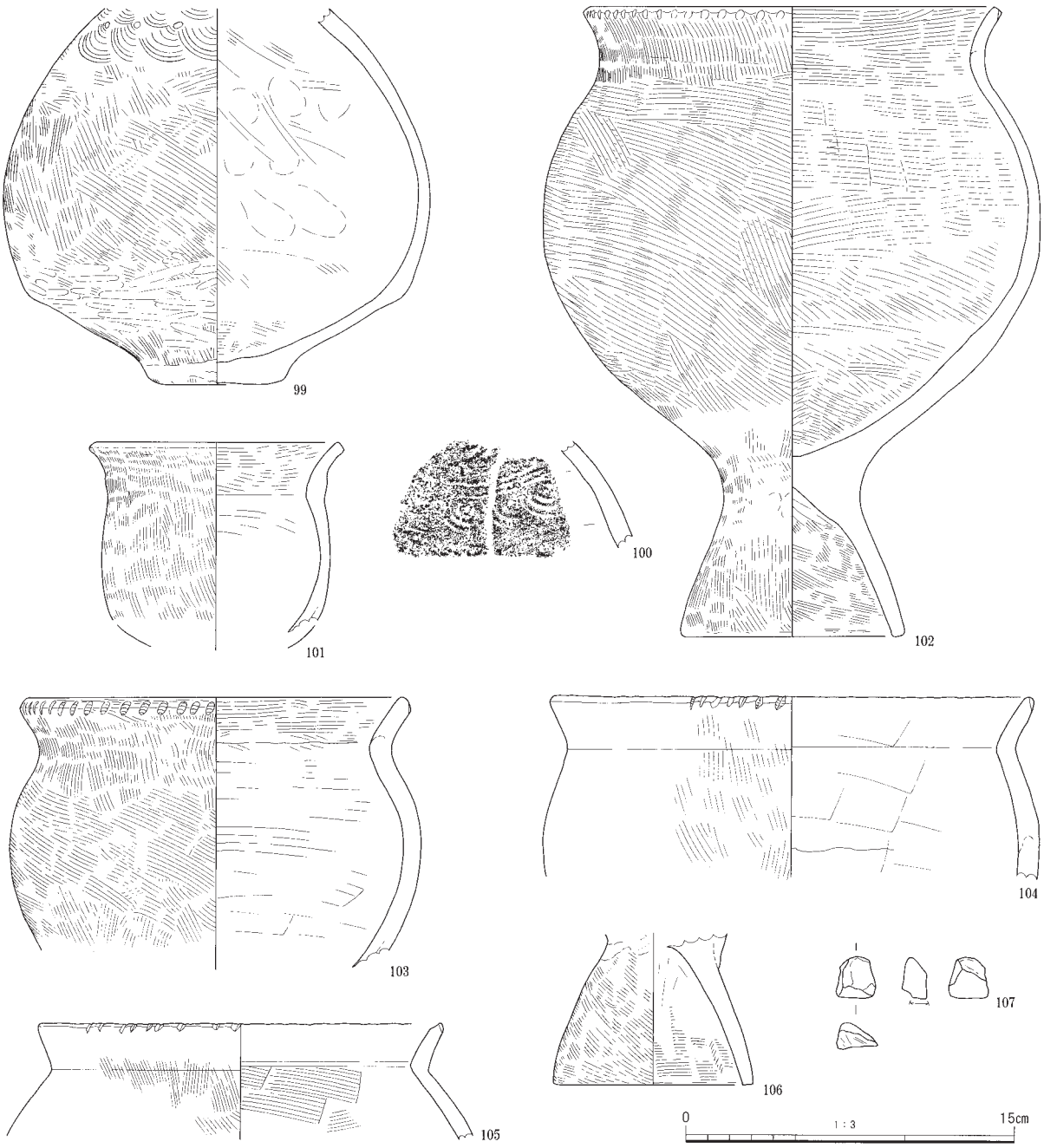
SB15出土土器（第41図） 87は壺の内湾する口縁部で、口唇部に明瞭な面をもつ。88は台付甕の上半部で、口縁部に弱いヨコナデ痕が認められる。89と90は台付甕の上半部で、丸味を帯びた口唇部をもち、90は口唇部に刻み目を入れない。土器の時期は、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。



第41図　SB15・17・18・20出土遺物

SB17出土土器（第41図） 91は広口壺の頸部から上の部分である。先端が欠損しているが、内湾する口縁部と尖頭形の口唇部をもつと思われる。時期は、欠山様式期（弥生後期後葉）である。

SB18出土土器（第41図） 92は広口壺の口縁部と思われ、折り返し口縁と不整形の口唇部をもつ。93は広口壺の肩部で、刺突斜線紋を施している。上端に三角突帯の一部が認められる。94は菊川様式の高坏で、折り返し口縁と口唇部の角に刻み目をもつ。95は台付甕の体部上半で、球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。表面が摩滅しており、調整痕が見えない。96も台付甕の体部上半で、球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。97は台付甕の体部上半で、丸味を帯びた口唇部をもつ。時期は、92の口唇部の形状、95～97の丸味を帯びた口唇部、96の球胴形の体部からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）である。

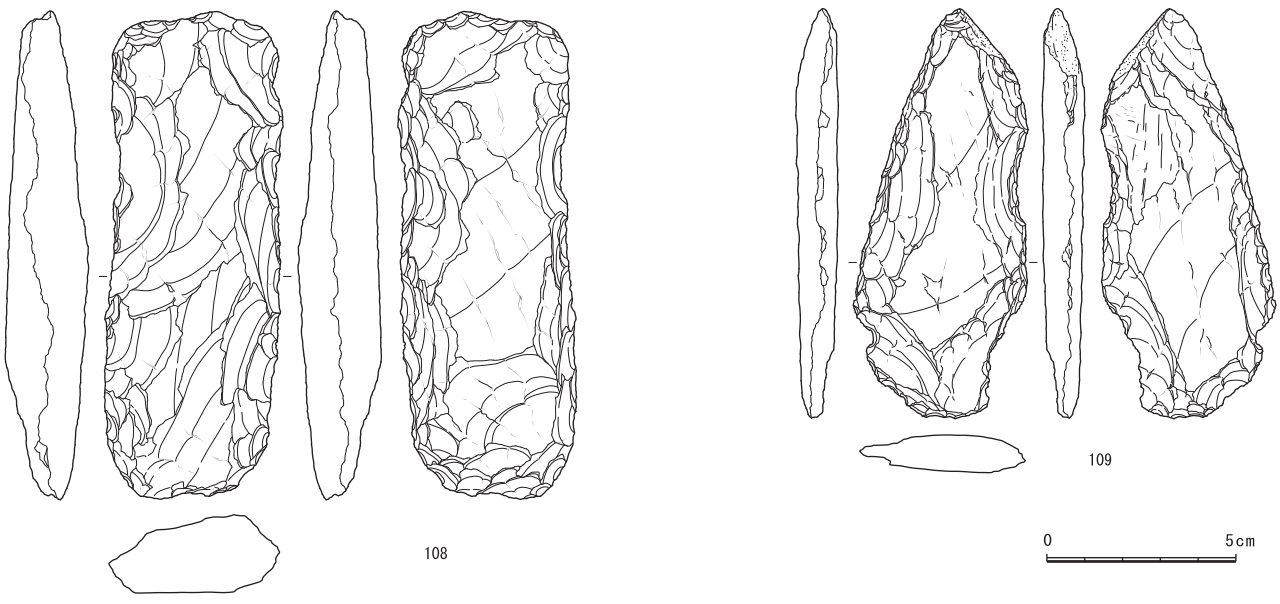


第42図　SB22出土遺物

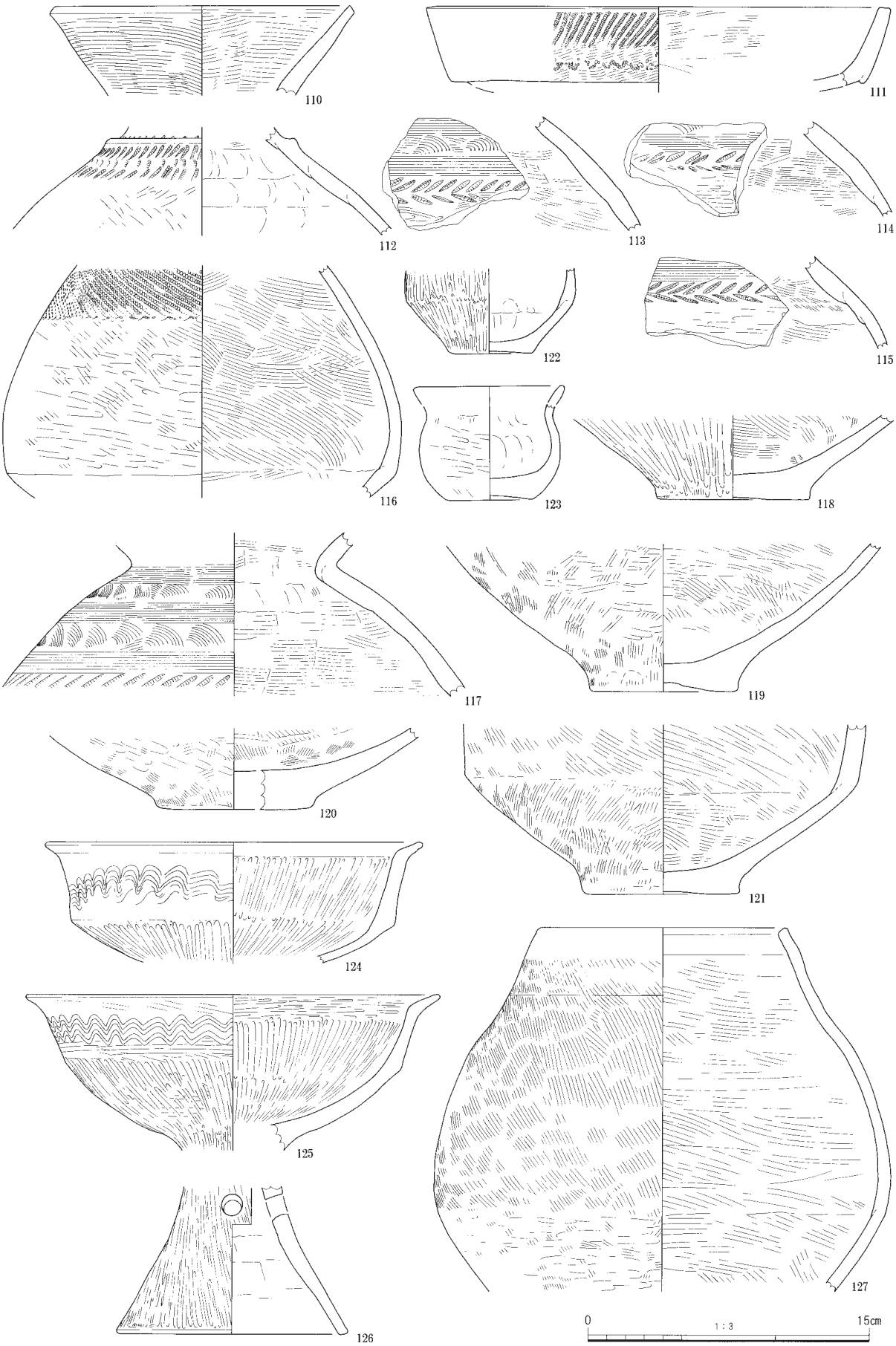
SB20出土土器（第41図） 98は広口壺の口縁部で、折り返し口縁をもち、外面に横方向のヘラミガキ痕が認められる。菊川様式の影響を受けている。

SB22出土土器（第42図） 99は下方に弱い稜をもつ広口壺の体部で、肩部に大きな扇状紋を２段に施している。体部下半にヘラミガキ痕が認められる。100は広口壺の肩部で、刺突斜線紋、横線紋、扇状紋を施している。101は台付甕で、直立する体部からゆるやかに口縁部が外反する。102は台付甕で、やや内湾した台部と丸味を帯びた口唇部をもつ。103～105は台付甕の体部上半で、それぞれ丸味を帯びた口唇部をもつ。106は台付甕の台部で、先端が内湾している。107は小さい砥石で、一面に使用痕が認められる。以上の出土遺物の時期は、99と102の器形、内湾する台部、丸味を帯びた口唇部等からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。

SK06出土遺物（第43･45･46図） SK06から多量の土器と石器が出土した。108と109は緑色片岩製の打製石斧で、両者ともSK06内の上層から土器片と共に出土した。大きさは、108が13.1×4.5×2.1㎝、109が10.8×4.6×1.0㎝を測る。重さは、108が187.0g、109が71.5gを量る。110は広口壺で、口縁部が直線状に開く。111は広口壺の二重口縁部で、外面に縄紋を施し、下端にＳ字状の結節部が認められる。菊川様式の影響を受けている。112は広口壺の肩部で、三角突帯の上に刺突羽状紋を施している。これも菊川様式の影響を受けている。113と114は広口壺の肩部で、扇状紋、横線紋、刺突羽状紋を施している。115も広口壺の肩部で、横線紋と刺突羽状紋を施している。116は体部下方に稜をもつ壺で、肩部に縄紋を施している。縄紋の下端にＳ字状の結節部が見られる。菊川様式の影響を受けている。117は広口壺の体部上半で、横線紋、扇状紋、刺突斜線紋を交互に施している。118～121は壺の底部で、119が上げ底であり、他は平底である。122は小壺の下半部と思われる。縦方向に細かなヘラミガキ痕が認められる。123は坩で、口縁部先端が欠損している。124は高坏で、坏部外面の途中に稜をもつ。口縁部を外側に屈曲しつつ引っ張って尖頭形につくっている。外面に粗雑な波状紋を施している。125は高坏で、坏部外面の途中にわずかな稜をもつ。口縁部を外側に屈曲しつつ引っ張って尖頭状につくり、外面にやや雑な波状紋を施している。126は高坏の脚部で、円形のスカシ孔を四方向にもつ。脚端はやや内湾気味に開く。125と126は同一個体と思われるが、



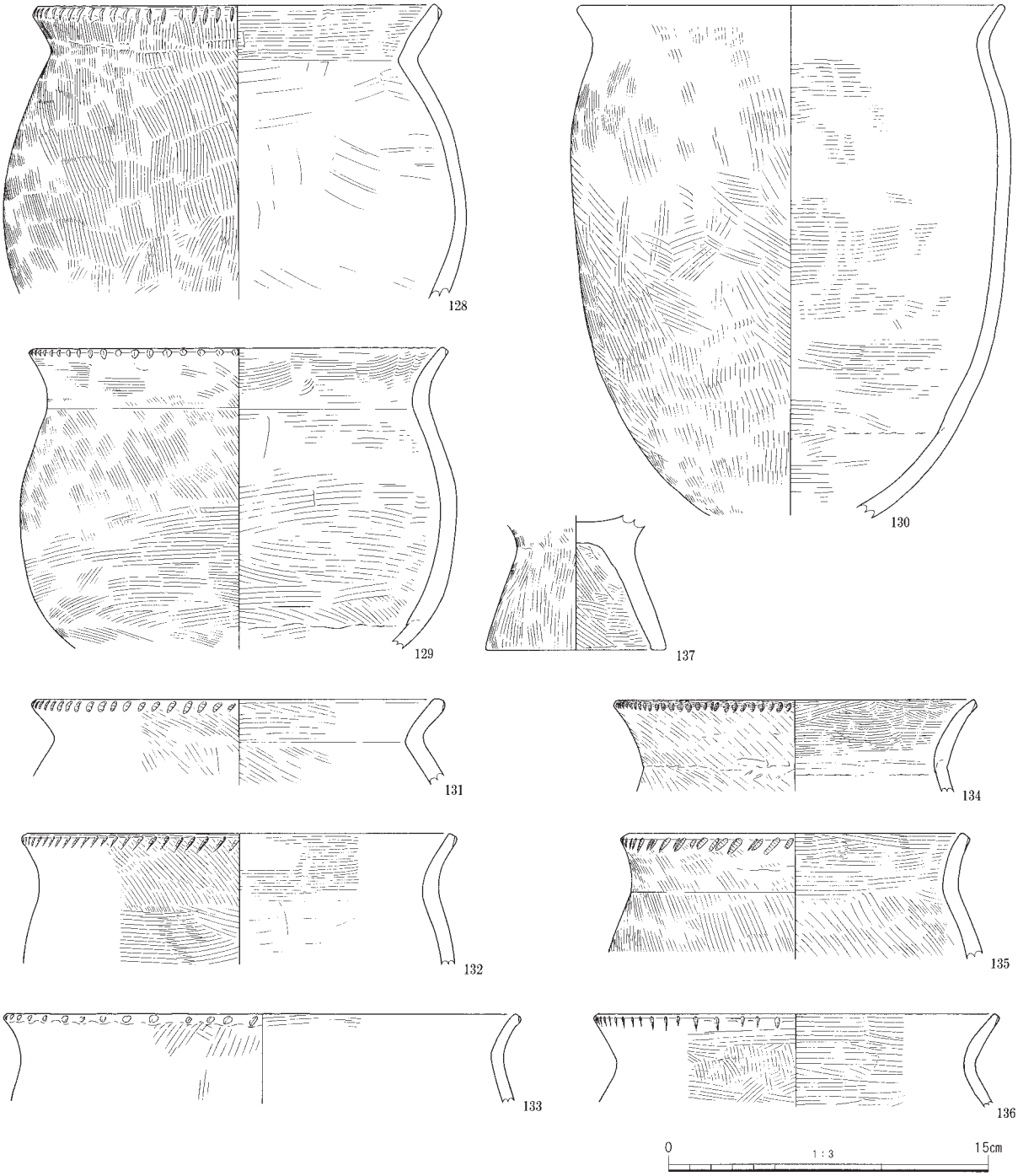
第43図　SK06出土遺物１



第44図　SK06出土遺物 2

接点は無かった。127は珍しい器形で、伊場遺跡群における編年（鈴木敏則 1991）で長頸壺Ｃと呼ばれているものと同形と推定する。球胴形の体部と窄んだ口縁部をもち、体部下半に横方向のヘラミガキ痕が認められる。128は台付甕の上半部で、球胴形の体部をもつ。129も台付甕の上半部で、球胴形の体部と丸味を帯びた口唇部をもつ。130は長い体部をもつ台付甕で、丸味を帯びた口唇部をもつ。131～136は頸部から口縁部の破片で、131と133は丸味を帯びた口唇部をもつ。137は台付甕の台部で、直線的に開いた先端部に平らな面をもつ。

SK06出土土器の時期であるが、124と125の坏部の器形や127の存在からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）と考える。



第45図　SK06出土遺物 3

SD02出土土器（第46図） 138は高坏の坏部で、途中に稜をもち、口縁部が外反気味に広がる。口唇部に強いヨコナデ痕が認められ、口唇部を丸くつくっている。時期は、稜をもつ坏部の形状および丸味を帯びた口唇部からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）である。

SK18出土土器（第46図） 139は台付甕の台部で、先端部がやや丸味を帯び、接合部に粘土帯を巻いている。時期は、先端部の形状からみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。

SP01出土土器（第46図） 140は広口壺で、球胴形の体部、外反する口縁部、丸味を帯びた口唇部をもつ。肩部に刺突羽状紋と波状紋を施し、５個１単位の円形浮文を三方向に付けている。体部に横方向の細かいヘラミガキ痕が認められる。肩部の刺突羽状紋と円形浮文は菊川様式の影響であろうか。時期は、球胴形の体部、丸味を帯びた口唇部からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）である。

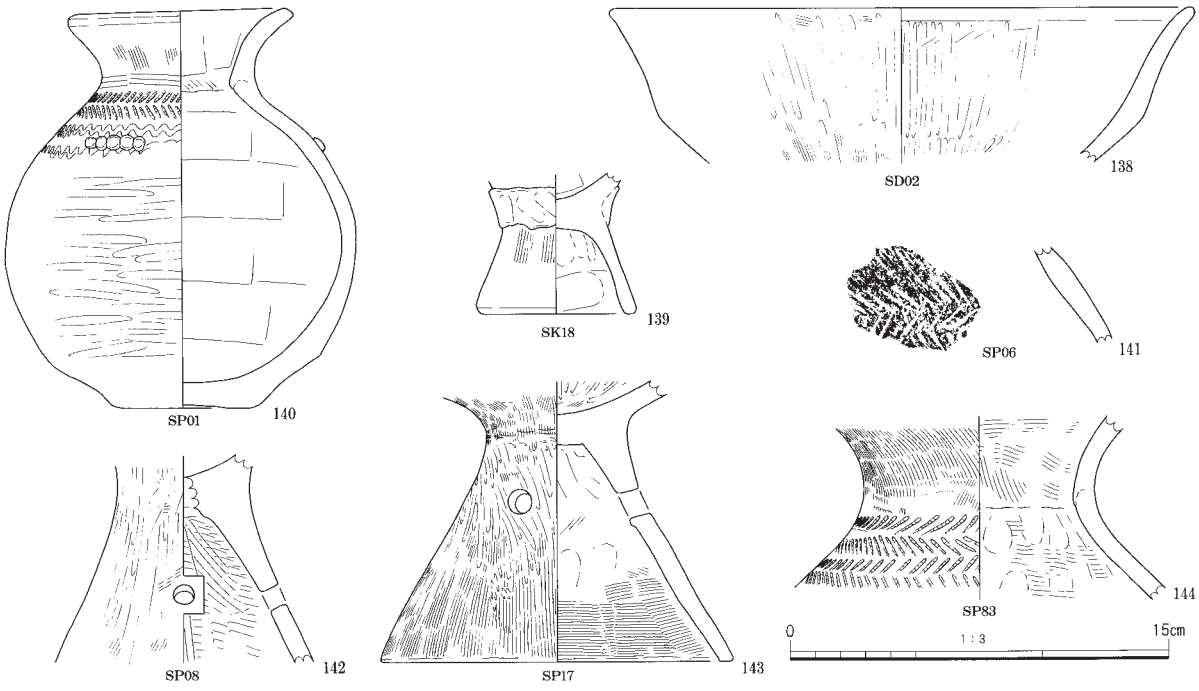
SP06出土土器（第46図） 141は広口壺の肩部で、複数段の刺突羽状紋を施している。菊川様式の影響を受けている。時期は、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）以降であろう。

SP08出土土器（第46図） 142は高坏の脚部で、ラッパ状に開き、スカシ孔を四方向にもつ。一部に縦方向のヘラミガキ痕が認められる。先端が欠損していて形状不明であるが、おそらく内湾するのであろう。時期は、紋様を施していないことからみて、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。

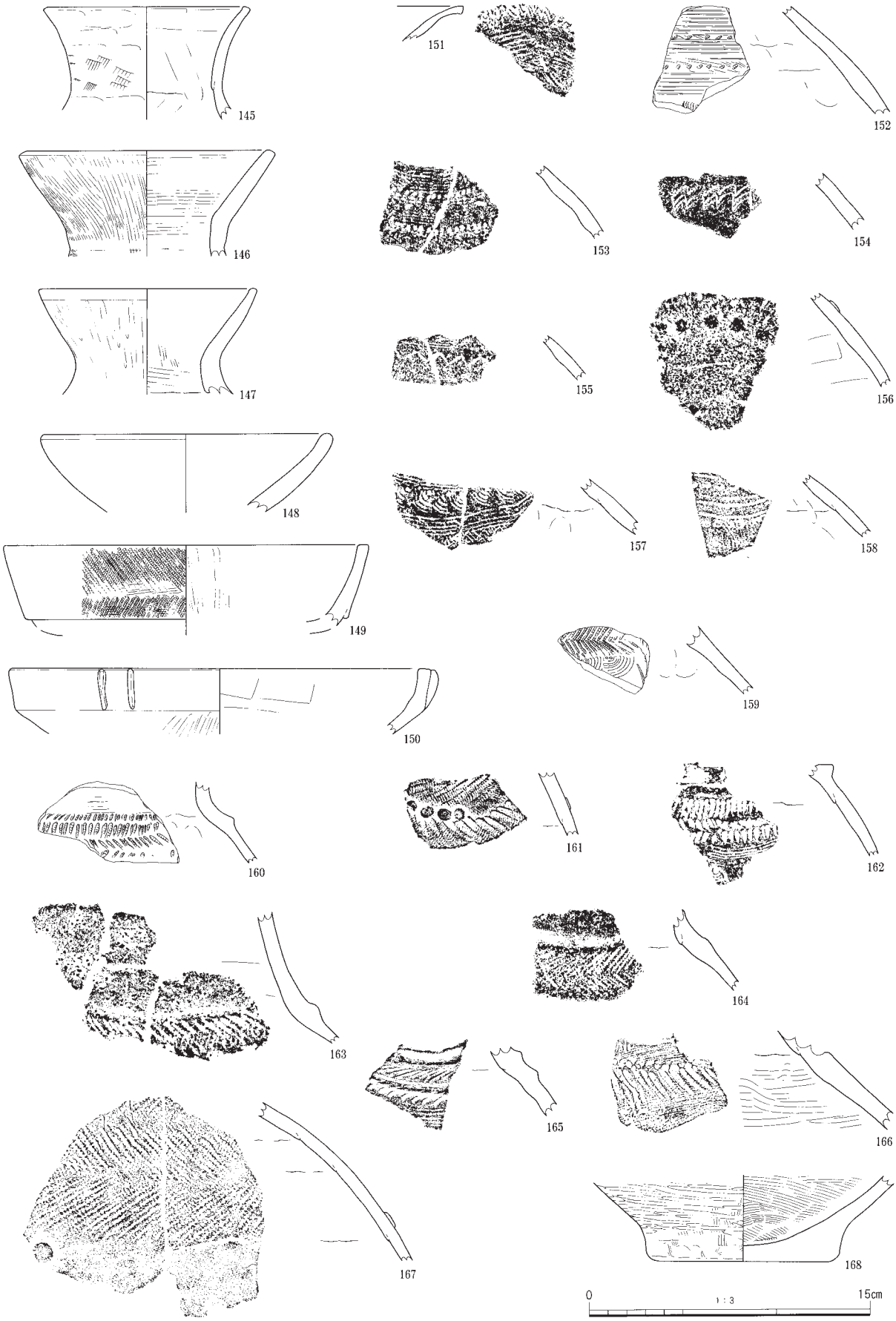
SP17出土土器（第46図） 143は高坏の脚部で、ラッパ状に開き、スカシ孔を三方向にもつ。縦方向のヘラミガキ痕が認められる。時期は、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）であろう。

SP83出土土器（第46図） 144は広口壺の頸部から肩部の破片で、肩部に複数段の刺突羽状紋を施している。菊川様式の影響を受けている。時期は、複数段の刺突羽状紋からみて、欠山様式期（弥生後期後葉）であろう。

包含層出土土器（第47･48図） 145は広口壺の口縁部で、わずかに外反して、口唇部にやや平らな面をもつ。146は広口壺の口縁部で、直立した頸部から外側に屈曲して直線的に開く。この形状は菊川様式の影響があると思われる。147は広口壺の口縁部で、内湾して開き、口唇部を尖頭形に



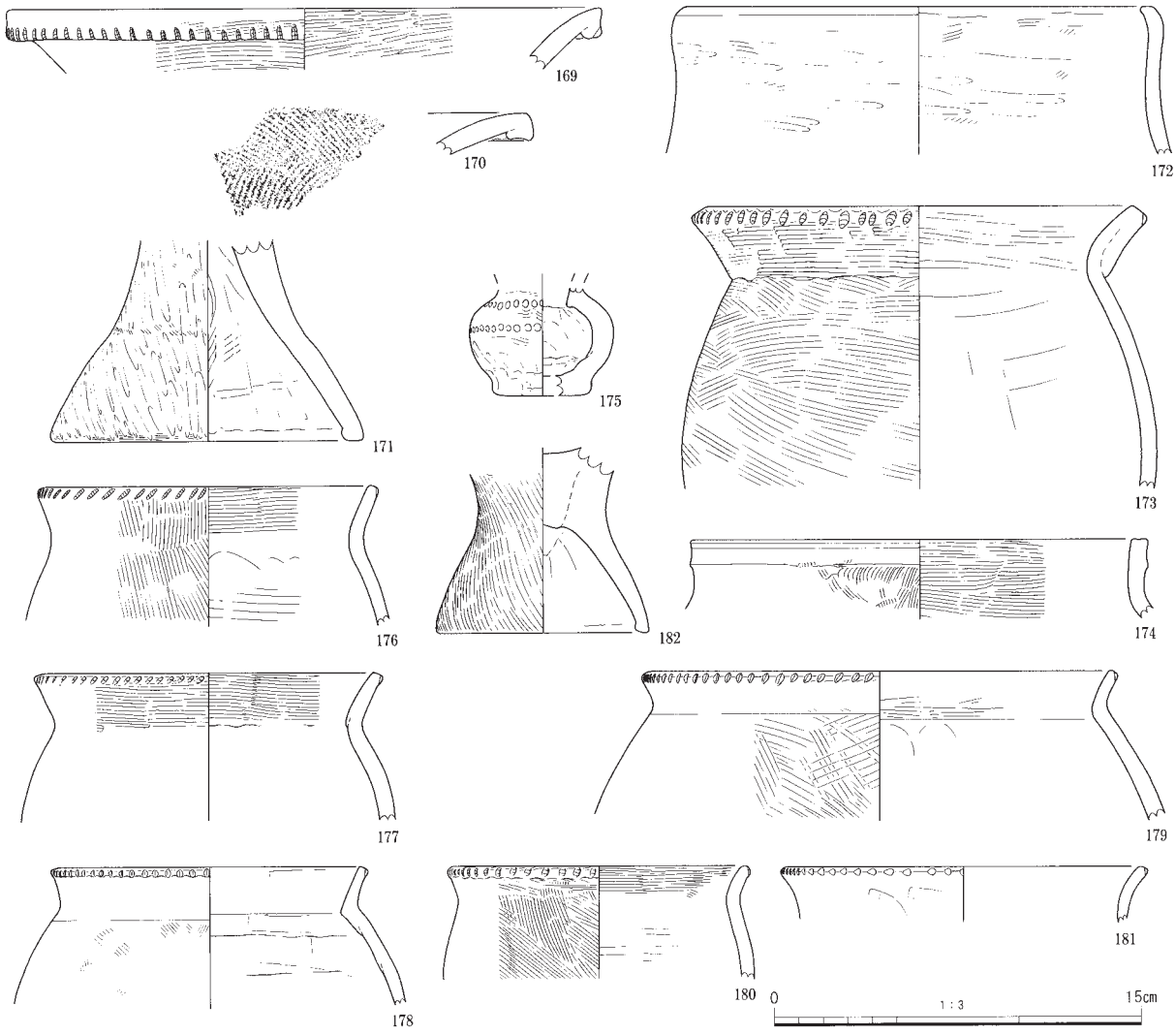
第46図　SD･SK･SP出土遺物



第47図　包含層出土遺物１

つくっている。148は壺の口縁部で、内湾して開き、丸味を帯びた口唇部をもつ。149は広口壺の二重口縁部で、外面に羽状縄紋を施している。中間にS字状の結節部が認められる。150は広口壺の二重口縁部で、外面に棒状浮文を2本1単位で三方向に付けている。151は広口壺の口縁部で、内面の端に粗雑な波状紋を施している。152〜167は壺の肩部で、各種の紋様が見られる。168は壺の底部。169と170は菊川様式の高坏坏部で、折り返し口縁と口唇部の角に刻み目をもつ。170は内面に縄紋を施している。両者は胎土からみて、明らかに東遠江からの搬入品である。171は高坏脚部で、先端が内湾気味に開く。外面に縦方向のヘラミガキ痕が認められる。172は珍しい器形の鉢または長頸壺で、口縁部の先端を内側にすこし曲げている。内外面とも横方向のヘラミガキ痕が認められる。173は、折り返し口縁をもち、口唇部の角に刻み目を入れている。ススの付着が認められないことから、鉢であると考える。菊川様式影響を受けている。174は鉢で、やや皮厚した口縁部をもち、口唇部に平らな面をつくっている。175は壺形の手づくね土器で、口縁部を欠損している。棒状工具によって2段の円形刺突紋を施している。176〜181は台付甕の体部および口縁部であり、182は大きく内湾した台付甕の台部である。

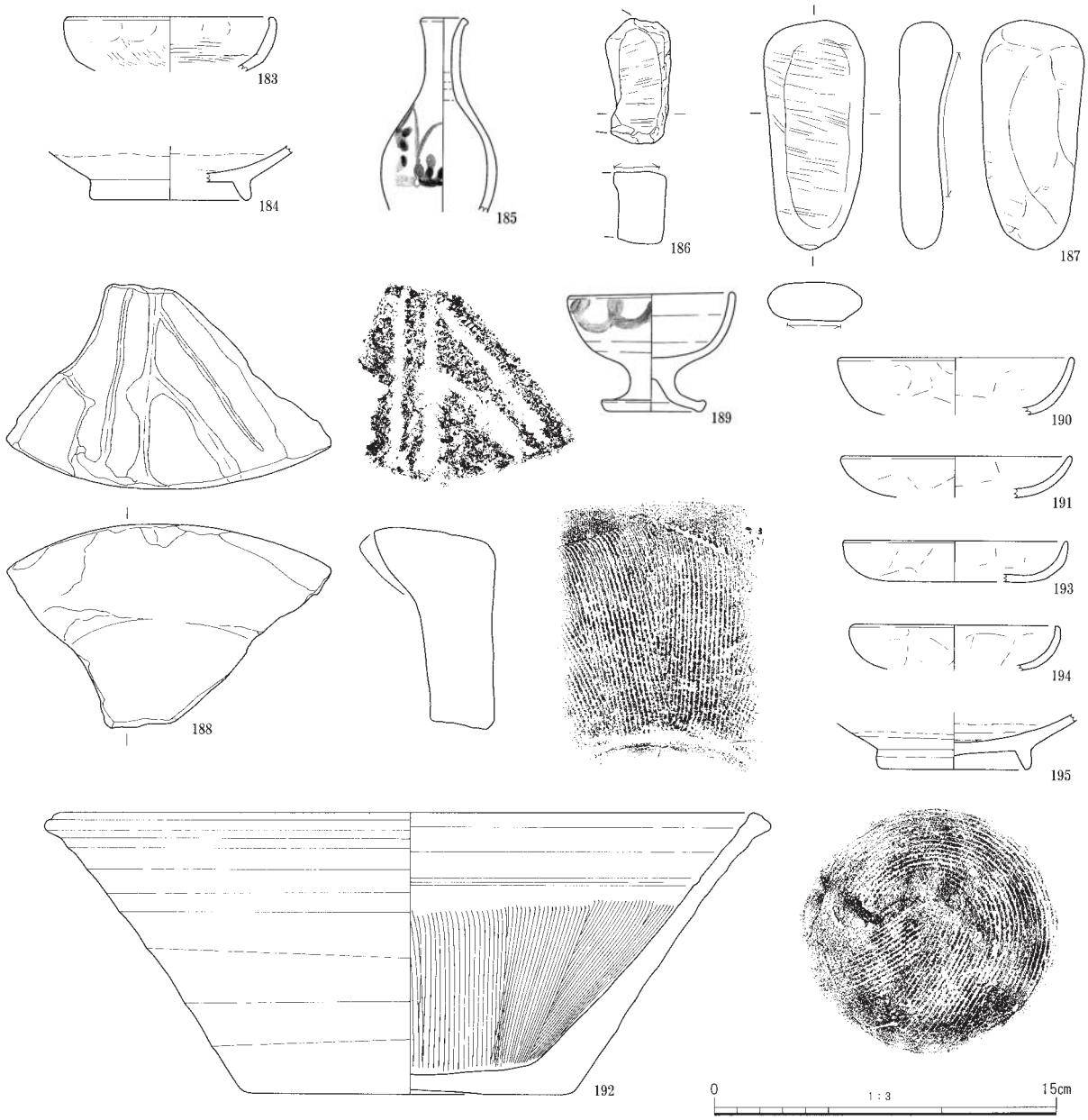
包含層出土土器の時期は、155の山形紋と182の大きく内湾した台部はやや新しい様相を示すが、他は伊場様式新段階期（弥生後期中葉）〜欠山様式期（弥生後期後葉）に納まると考える。



第48図　包含層出土遺物2

（3）江戸時代の遺物

江戸時代後半の遺物がB-2区とB-3区で検出した屋敷地の区画溝を中心に大量に出土した。その一部を第49図に示す。ランプの破片と思われる薄いガラス片も共伴していることから、遺物の一部は明治初年に下る可能性もある。183と184がＡ区、192と195がＣ区、その他はすべてＢ区から出土した。184、185、189、195は陶器で、185と189に染付けが見られる。183、190～194はかわらけで、内外面に指ナデと板ナデの痕跡が残る。186と187は砂岩製の砥石であり、それぞれ一面の使用面が認められる。188は石臼の破片で、192はすり鉢である。



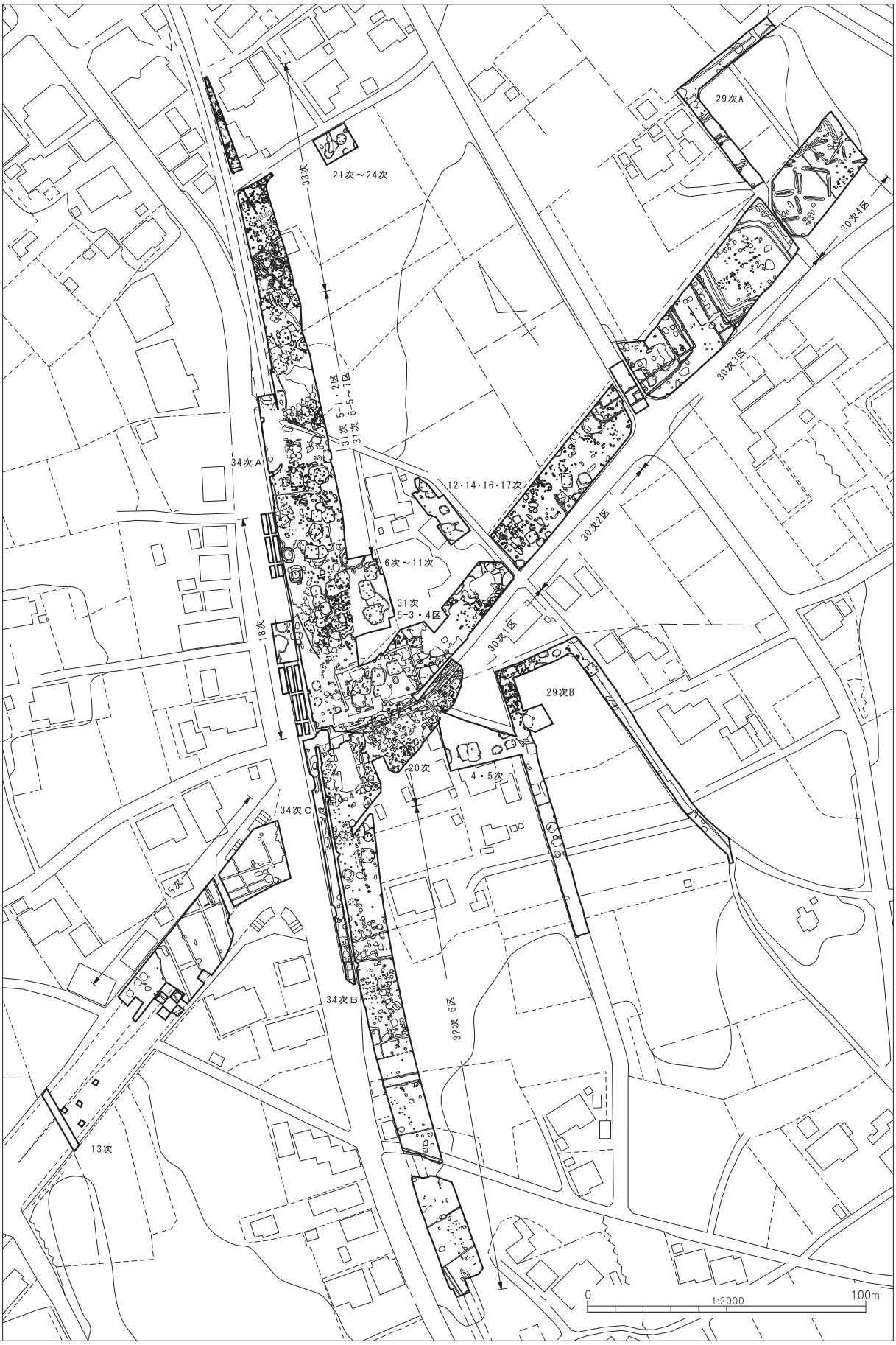
第49図　江戸時代の遺物

表４　出土遺物観察表

遺物	図面	グリッド	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	器径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	色調	備考
1	32	A6	包含層	石器	石核					灰白	39.8g　頁岩　縄文時代
2	32	B1～6	包含層	石器	石核					灰白	63.0g　頁岩　縄文時代
3	32	A1～7	包含層	石器	石核					灰白	47.4g　頁岩　縄文時代
4	32	A6	包含層	石器	石核					灰白	59.0g　頁岩　縄文時代
5	32	A1～7	包含層	石器	石核					灰白	83.0g　頁岩　縄文時代
6	33	A12	SB01	弥生土器	壺	80	10.7	12.0	8.3	黄橙	
7	33	A12	SB01	弥生土器	鉢	90	14.5	13.6	13.0	明赤褐	
8	33	A12	SB01	弥生土器	鉢	80	30.2	27.0	20.4	橙	
9	33	A12	SB01	弥生土器	甕	10			16.2	にぶい黄橙	
10	33	A12	SB01	弥生土器	甕	60	16.0	22.3	15.7	橙	
11	34	A12	SB02	弥生土器	壺	20			16.8	にぶい橙	
12	34	A12	SB02	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
13	34	A12	SB02	弥生土器	壺	10			21.0	橙	
14	34	A12	SB02	弥生土器	壺	10			14.9	黄橙	
15	34	A12	SB02	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
16	34	A12	SB02	弥生土器	壺	30	19.6			浅黄橙	
17	34	A12	SB02	弥生土器	坩	30	6.6			にぶい橙	外面に朱あり
18	34	A12	SB02	弥生土器	高坏	10			15.6	橙	
19	34	A12	SB02	弥生土器	高坏	60			25.6	黄橙	
20	34	A12	SB02	弥生土器	高坏	20			27.0	橙	
21	34	A12	SB02	弥生土器	高坏	70		24.5	25.6	橙	
22	34	A12	SB02	弥生土器	高坏	20				黄橙	
23	35	A12	SB02	弥生土器	甕	5			13.3	黄橙	24と同一個体？
24	35	A12	SB02	弥生土器	甕	40				黄橙	
25	35	A12	SB02	弥生土器	甕	60				黄橙	
26	35	A12	SB02	弥生土器	甕	20				橙	粘土帯
27	35	A12	SB02	弥生土器	甕	10				浅黄橙	粘土帯
28	35	A12	SB02	弥生土器	甕	30	22.8		19.7	黄橙	粘土帯
29	35	A12	SB02	弥生土器	甕	50	27.8		24.4	橙	
30	36	A10・11	SB03	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
31	36	A10・11	SB03	弥生土器	壺	5				にぶい黄橙	
32	36	A10・11	SB03	弥生土器	壺	5			9.0	浅黄橙	
33	36	A10・11	SB03	弥生土器	壺	5				橙	
34	36	A10	SB03	弥生土器	壺	30				浅黄橙	
35	36	A10・11	SB03	弥生土器	鉢	30			13.2	浅黄橙	
36	36	A10・11	SB03	弥生土器	鉢	30			13.3	浅黄橙	
37	36	A10・11	SB03	弥生土器	甕	30	17.0		16.2	にぶい黄橙	
38	36	A9・10	SB04	弥生土器	甕	10				黄橙	
39	37	A10	SB05	弥生土器	壺	5				橙	
40	37	A10	SB05	弥生土器	鉢	90	11.4	8.9	9.8	橙	
41	37	A10	SB05	弥生土器	鉢	50		6.2	9.0	浅黄橙	
42	37	A10	SB05	弥生土器	高坏	10			20.0	黄橙	
43	37	A10	SB05	弥生土器	甕	10			17.4	橙	
44	37	A10	SB05	弥生土器	甕	10			24.0	橙	
45	38	A9	SB07	弥生土器	壺	5			13.2	浅黄橙	
46	38	A9	SB07	弥生土器	壺	10				浅黄橙	
47	38	A9	SB07	弥生土器	壺	10				にぶい黄橙	
48	38	A9	SB07	弥生土器	壺	5				橙	
49	38	A9	SB07	弥生土器	鉢	10			17.0	橙	
50	38	A9	SB07	弥生土器	鉢	5			17.1	にぶい橙	
51	38	A9	SB07	弥生土器	甕	5				橙	
52	38	A9	SB07	弥生土器	甕	5			21.4	にぶい黄橙	
53	38	A7・8	SB10	弥生土器	壺	5			11.4	にぶい黄橙	
54	38	A7・8	SB10	弥生土器	壺	20			16.4	橙	
55	38	A7・8	SB10	弥生土器	壺	5			21.0	にぶい黄橙	高坏の可能性あり
56	38	A7・8	SB10	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
57	38	A7・8	SB10	弥生土器	壺	5				黄橙	
58	38	A7・8	SB10	弥生土器	鉢	10			12.2	にぶい黄橙	
59	38	A7・8	SB10	弥生土器	手づくね	100	5.8	5.6	3.3	にぶい黄橙	
60	38	A7・8	SB10	弥生土器	高坏	5			22.0	橙	
61	38	A7・8	SB10	石器	砥石					灰褐	19.1×14.8×6.8cm　2640.0g　砂岩
62	38	A7・8	SB10	石器	砥石					灰褐	7.4×4.8×3.3cm　139.0g　砂岩
63	38	A7・8	SB10	石器	砥石					灰褐	3.6×3.4×2.3cm　40.5g　砂岩
64	39	A7	SB11	弥生土器	壺	100	12.3	13.2	9.1	にぶい黄橙	
65	39	A7	SB11	弥生土器	壺	30			18.3	浅黄橙	

遺物	図面	グリッド	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	器径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	色調	備考
66	39	A7	SB11	弥生土器	高坏	40			28.6	黄橙	
67	39	A7	SB11	弥生土器	高坏	20			25.0	にぶい橙	
68	39	A7	SB11	弥生土器	甕	30			14.0	橙	
69	39	A7	SB11	弥生土器	甕	5	18.0		15.4	にぶい黄橙	
70	39	A7	SB11	弥生土器	甕	60	19.2		14.3	にぶい橙	
71	40	A7	SB11	弥生土器	壺	5			14.0	浅黄橙	
72	40	A7	SB11	弥生土器	壺	10				浅黄橙	
73	40	A7	SB11	弥生土器	壺	5				にぶい橙	
74	40	A7	SB11	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
75	40	A7	SB11	弥生土器	高坏	30			24.0	浅黄橙	
76	40	A7	SB11	弥生土器	高坏	30				浅黄橙	
77	40	A7	SB11	弥生土器	高坏	30				黄橙	
78	40	A7	SB11	弥生土器	高坏	5				にぶい黄橙	
79	40	A7	SB11	弥生土器	甕	5			17.2	にぶい黄橙	
80	40	A7	SB11	弥生土器	甕	10			19.2	黄橙	
81	40	A7	SB11	弥生土器	甕	20	20.4		18.0	にぶい黄橙	
82	40	A6・7	SB12	弥生土器	甕	5				灰黄褐	
83	40	A5	SB14	弥生土器	壺	10			14.6	黄橙	
84	40	A5	SB14	弥生土器	高坏	5			22.8	にぶい黄橙	
85	40	A5	SB14	弥生土器	高坏	20				橙	
86	40	A5	SB14	弥生土器	高坏	10				浅黄橙	
87	41	A4	SB15	弥生土器	壺	5			9.2	にぶい黄橙	
88	41	A4	SB15	弥生土器	甕	10			15.8	にぶい黄橙	
89	41	A4	SB15	弥生土器	甕	10			19.3	浅黄橙	
90	41	A4	SB15	弥生土器	甕	10			20.2	にぶい黄橙	
91	41	A6	SB17	弥生土器	壺	5				橙	
92	41	A1	SB18	弥生土器	壺	5			20.1	にぶい黄橙	
93	41	A1	SB18	弥生土器	壺	5				浅黄橙	
94	41	A1	SB18	弥生土器	高坏	5			22.2	にぶい黄橙	菊川様式搬入品
95	41	A1	SB18	弥生土器	甕	10			10.4	橙	
96	41	A1	SB18	弥生土器	甕	10	14.5		13.2	にぶい黄橙	
97	41	A1	SB18	弥生土器	甕	5			21.6	にぶい黄橙	
98	41	B4	SB20	弥生土器	壺	5			11.0	橙	
99	42	B5・6	SB22	弥生土器	壺	40	19.2			橙	
100	42	B5・6	SB22	弥生土器	壺	5				黄橙	
101	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	30			11.5	黄橙	
102	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	50	22.4	28.6	18.8	にぶい黄橙	
103	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	30	18.5		17.6	にぶい黄橙	
104	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	10	22.4		21.8	橙	
105	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	20			18.3	淡黄	
106	42	B5・6	SB22	弥生土器	甕	20				橙	
107	42	B5・6	SB22	石器	砥石					浅黄	1.9×1.8×1.2cm　3.6g
108	43	A4	SK06	石器	打製石斧					緑灰	
109	43	A4	SK06	石器	打製石斧					緑灰	
110	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5			16.0	にぶい黄橙	
111	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5			24.4	浅黄橙	
112	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5				橙	
113	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5				にぶい黄橙	
114	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5				橙	
115	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5				橙	
116	44	A4	SK06	弥生土器	壺	20	20.9			浅黄橙	
117	44	A4	SK06	弥生土器	壺	20				橙	
118	44	A4	SK06	弥生土器	壺	5				黄橙	
119	44	A4	SK06	弥生土器	壺	30				橙	
120	44	A4	SK06	弥生土器	壺	10				橙	
121	44	A4	SK06	弥生土器	壺	30				浅黄橙	
122	44	A4・7	SK06・SB11	弥生土器	壺	30	9.0			にぶい黄橙	
123	44	A4	SK06	弥生土器	坩	50	7.4			にぶい橙	
124	44	A4	SK06	弥生土器	高坏	20			19.8	橙	
125	44	A4	SK06	弥生土器	高坏	50			21.8	浅黄橙	126と同一個体？
126	44	A4	SK06	弥生土器	高坏	30				浅黄橙	
127	44	A4	SK06	弥生土器	鉢	30	24.0		13.0	橙	
128	45	A4	SK06	弥生土器	甕	60	21.4		19.0	にぶい黄橙	
129	45	A4	SK06	弥生土器	甕	30	20.2		19.4	明黄褐	
130	45	A4	SK06	弥生土器	甕	40	20.4		19.8	黄橙	

遺物	図面	グリッド	遺構・層位	種別	細別	残存率 (%)	器径 (cm)	器高 (cm)	口径 (cm)	色調	備考
131	45	A4	SK06	弥生土器	甕	5			19.2	にぶい黄橙	
132	45	A4	SK06	弥生土器	甕	5			20.2	橙	
133	45	A4	SK06	弥生土器	甕	5			24.0	黄橙	
134	45	A4	SK06	弥生土器	甕	10			16.8	にぶい褐	
135	45	A4	SK06	弥生土器	甕	5			16.2	にぶい黄橙	
136	45	A4	SK06	弥生土器	甕	5			18.8	にぶい黄橙	
137	45	A4	SK06	弥生土器	甕	10				にぶい橙	
138	46	A4	SD02	弥生土器	高坏	5			22.8	橙	
139	46	B4	SK18	弥生土器	甕	10				橙	
140	46	A9	SP01	弥生土器	壺	100	13.7	15.6	8.8	明黄褐	
141	46	A5	SP06	弥生土器	壺	5				にぶい橙	
142	46	A5	SP08	弥生土器	高坏	10				黄橙	
143	46	A2	SP17	弥生土器	高坏	30				橙	
144	46	A6	SP83	弥生土器	壺	5				にぶい黄橙	
145	47	A11		弥生土器	壺	10			10.8	浅黄橙	
146	47	A5		弥生土器	壺	5			13.5	黄橙	
147	47	A区		弥生土器	壺	5			11.5	にぶい黄橙	
148	47	A9		弥生土器	壺	10			15.4	にぶい黄橙	
149	47	A区		弥生土器	壺	5			19.2	浅黄橙	
150	47	B5・6		弥生土器	壺	10			22.2	橙	
151	47	A区		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
152	47	A2		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
153	47	A区		弥生土器	壺	5				橙	
154	47	A5		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
155	47	A5		弥生土器	壺	5				橙	
156	47	A9		弥生土器	壺	5				にぶい黄橙	
157	47	A9		弥生土器	壺	5				黄橙	
158	47	A6		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
159	47	A3・4		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
160	47	A3・4		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
161	47	A5		弥生土器	壺	5				橙	
162	47	A8		弥生土器	壺	5				橙	
163	47	A区		弥生土器	壺	5				橙	
164	47	A9		弥生土器	壺	5				橙	
165	47	A10		弥生土器	壺	5				黄橙	
166	47	A10		弥生土器	壺	5				浅黄橙	
167	47	A区		弥生土器	壺	20				橙	
168	47	A4		弥生土器	壺	10				にぶい橙	
169	48	A3・4		弥生土器	高坏	5			24.0	明黄褐	在地産？
170	48	A5		弥生土器	高坏	5				浅黄橙	在地産？
171	48	A区		弥生土器	高坏	20				にぶい橙	
172	48	A区		弥生土器	鉢				19.0	浅黄橙	
173	48	A5		弥生土器	鉢	20	19.1		18.3	黄橙	
174	48	A4		弥生土器	鉢	5			18.4	橙	
175	48	A11・12		弥生土器	壺	40	5.8			にぶい黄橙	
176	48	A1		弥生土器	甕	5			13.7	にぶい黄橙	
177	48	A4		弥生土器	甕	10			14.0	にぶい黄橙	
178	48	A区		弥生土器	甕	10			12.8	浅黄橙	
179	48	A4・5		弥生土器	甕	5			19.2	橙	
180	48	A1		弥生土器	甕	5			12.2	にぶい黄橙	
181	48	A3		弥生土器	甕	5			14.8	明黄褐	
182	48	A区		弥生土器	甕	5				にぶい黄橙	
183	49	A区		土師器	かわらけ	20			9.2	にぶい黄橙	
184	49	A区	SD06	陶磁器	碗	10				灰白	
185	49	B8		陶磁器		50	5.1		2.1	灰白	
186	49	B11・12	SD06	石製品	砥石						5.5×2.8×3.2cm　74.1g　砂岩
187	49	B11・12	SD06	石製品	砥石						10.0×4.4×2.4cm　124.7g　砂岩
188	49	B11・12	SD06	石製品	石臼	30					8.9×14.1×5.9cm　519.3g
189	49	B9	SD10	陶磁器		80		5.2	7.3	灰白	
190	49	B9	SK28	土師器	かわらけ	10			10.2	浅黄橙	
191	49	B10	SP119	土師器	かわらけ	20			10.0	灰白	
192	49	C10	SD17	陶磁器	すり鉢	70		12.3	31.6	浅黄橙	
193	49	B11・12	SD06	土師器	かわらけ	20		1.8	9.7	浅黄橙	
194	49	B-3区		土師器	かわらけ	20			9.1	浅黄橙	
195	49	C区		陶磁器	碗	20				灰白	



第50図　東原遺跡遺構合成図（全時代）

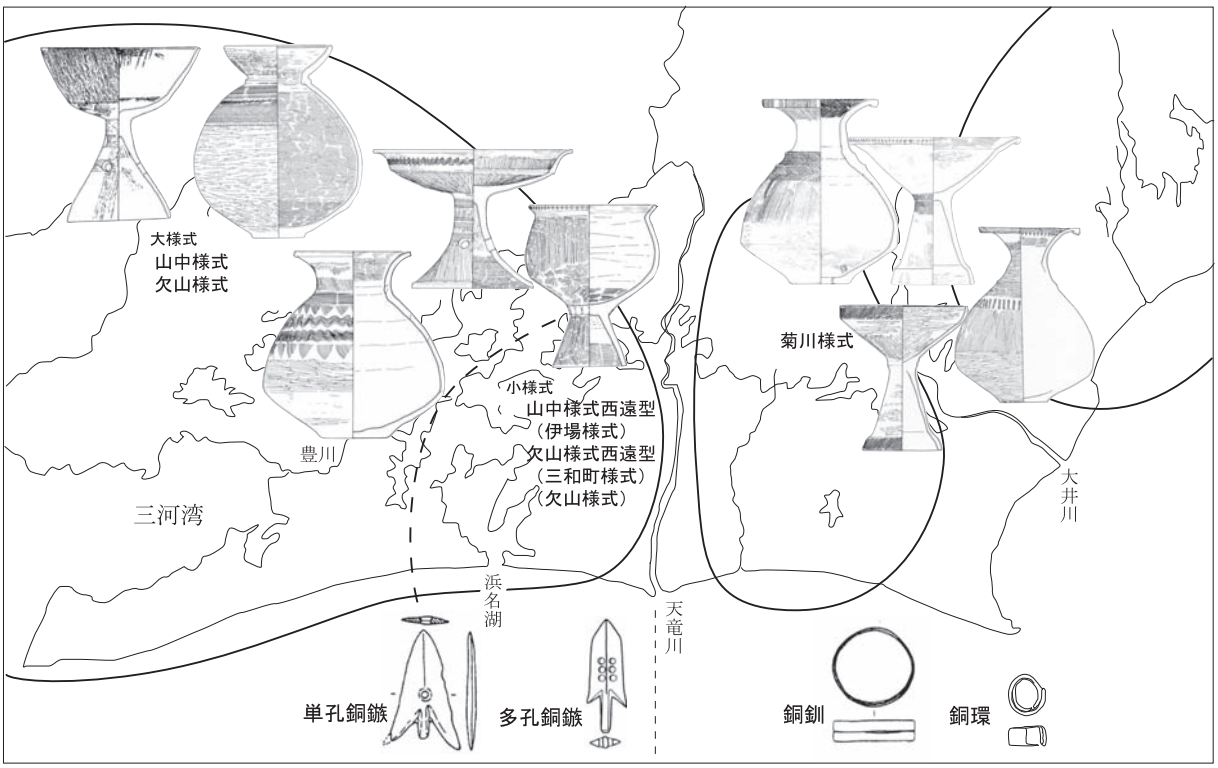
第４章　総括・東原遺跡

国道152号バイパス建設に伴う調査および遠州鉄道鉄道線の高架化工事に伴う調査など、数次にわたって実施されてきた東原遺跡の発掘調査は、今回の第34次調査で一段落することになる。良い機会であるので、ここで浜名高校の第１次調査から今回の第34次調査までの総括を紙面の許す範囲で行おうと思う。第１次から第34次までの約45年の間に、東原遺跡に関係した調査員は数十名を数え、当然に各人の遺構識別能力と判断基準は異なっていたと思われる。また時間的、経済的な制約もあったであろう。その結果として、今回の合成図作成にあたって、いくつかの問題点が浮かびあがってきた。具体的には次のような点である。①報告書が未刊のため調査内容が分からない②隣の調査と遺構が接続しない③遺構なのか撹乱なのか分からない④遺構密度が異なる⑥遺構の時代が分からない等である。そこで合成図面を作成するにあたっては、筆者の基準に基づき独断で図面の多くの箇所を修正・加筆・削除した。また時代別遺構図においても同様の作業を行った。ただし時間が許す限り、残された資料と報告書を読み、正確な図面作りを心掛けたことを記しておきたい。

第１節　弥生時代

（１）立　地

文化圏の東限　弥生時代後期において、天竜川を境にして東の地域と西の地域は文化圏を異にしていた。東原遺跡がある西遠江は西の文化圏に属し、文化圏の東限に位置している。文化圏の違い

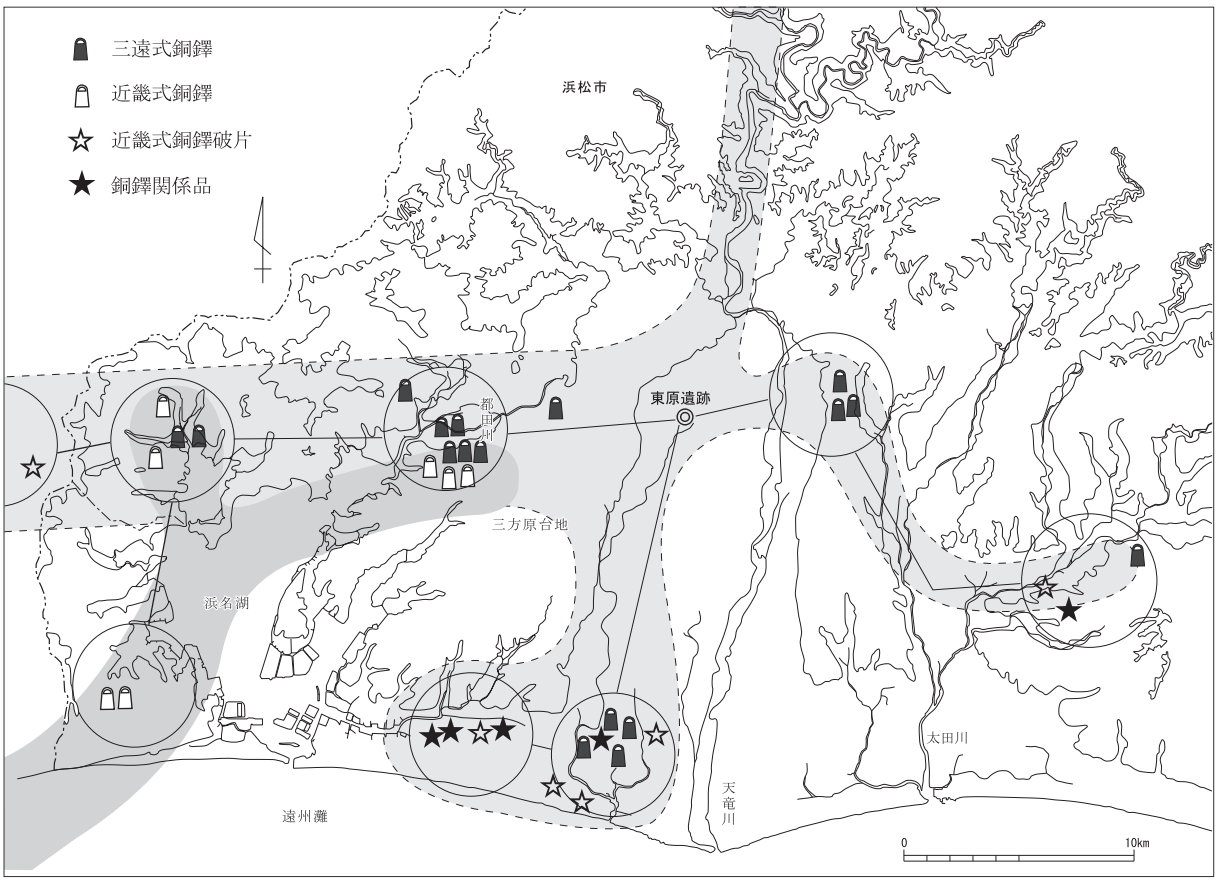


第51図　西遠江と東遠江の違い

を明確に表しているものに、土器様式の違いと青銅器分布の違いがある。土器は、天竜川の西側は近畿地方の影響をうけた櫛状工具で横線紋や波状紋を描く櫛描紋系土器が分布し、それに対し天竜川の東側は縄文土器の伝統を受け継いだ縄紋や擬縄紋を描いた縄文系土器が分布する。青銅器については、天竜川の西側に銅鐸や単孔銅鏃および多孔銅鏃が分布しており、天竜川の東側に帯状銅訓や銅環が分布している。そして両者は原則的に天竜川を越えていない。ただし両文化圏に決定的な対立関係はなく、両者の間に一定の交流があったと推定される。その証拠は、土器および青銅器が数%の割合で天竜川を越えた反対側に搬入された、もしくは影響を与えている事実である。詳細については、後で紹介する。

交流の交差点　西遠江には、古代から現代まで、常に二つの重要な東西交流路が存在している。一つは浜名湖の北岸を通り抜けて天竜川の中流を渡る北ルートであり、二つ目は浜名湖の南岸を通り抜けて天竜川の下流を渡る南ルートである。この二つのルートはいつの時代も補完しあって現代まで続いている。原始・古代には、豊川河口、浜名湖今切口、天竜川河口の難所を避けて、北ルートが大いに利用されたと考えられ、三遠式銅鐸や初期の大型古墳もこのルート沿いに分布している。奈良・平安時代は南ルートが本街道となり、北ルートは南ルートが通行不能になった時のための脇街道の役割を担った。中世から江戸時代も同様で、南ルートが東海道となり、北ルートは姫街道（本坂道）と呼ばれる脇街道の役割を果たした。そして近代に鉄道網が整備されると、南ルートが東海道本線となり、本線の鉄橋が破壊された時の備えとして、北ルートの二俣線が建設された。

この二つの他に、目立たないが、もう一つの重要な交流路があった。それは天竜川の川筋を利用した南北交流路である。それを実証する遺物が三遠式銅鐸である。三遠式銅鐸は西遠江を中心に分



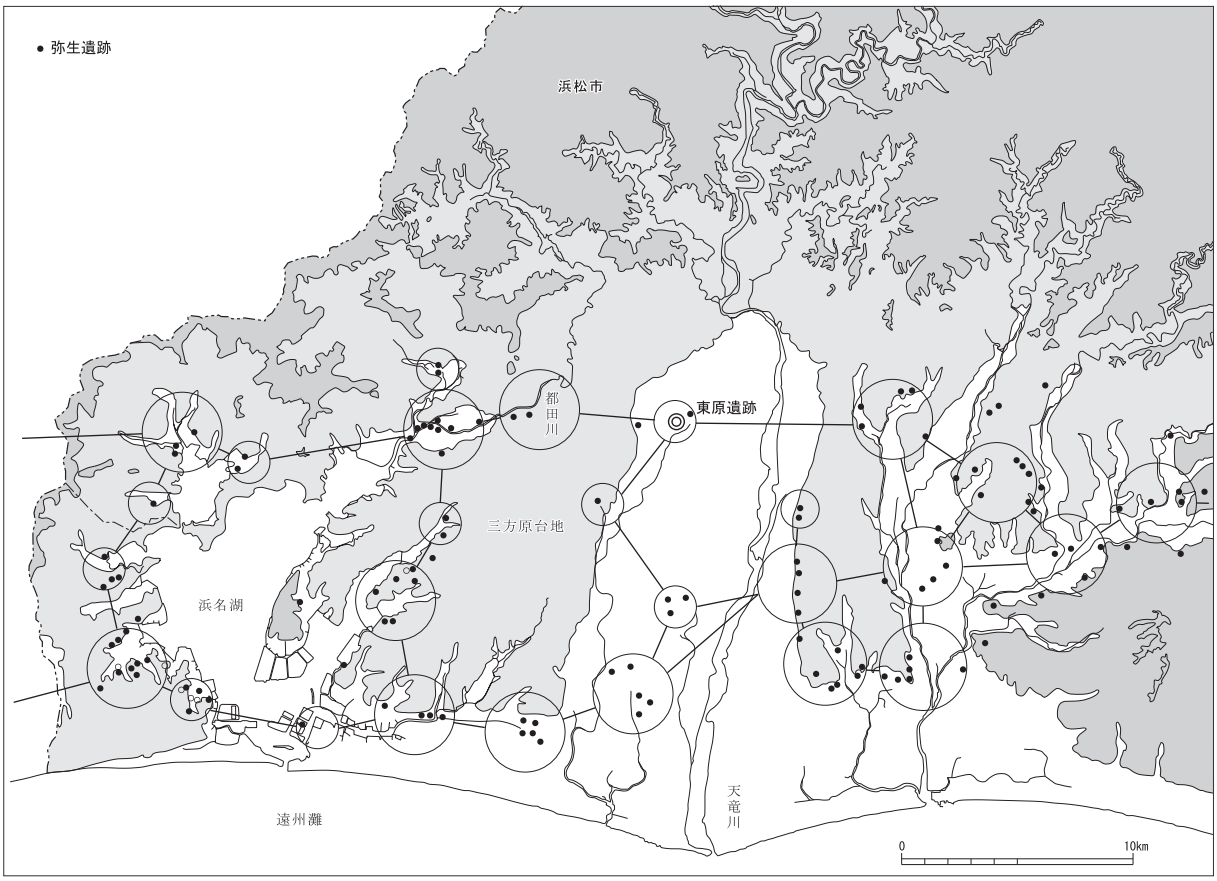
第52図　銅鐸関係品分布図（遠江）

布していることから、西遠江に製作工房があった可能性が非常に高い。その三遠式銅鐸が長野県塩尻市（柴宮銅鐸）と松本市（宮淵銅鐸）から出土している。この三遠式銅鐸を運んだルートは天竜川の川筋を利用した南北交流路以外には考えられない。

東原遺跡は、東西交流路北ルートと南北交流路が交差する地点に位置している。

空白地帯　二つの重要な交流路の交差点に位置しているにも関わらず、東原遺跡がある浜北地区は、一部の重要な遺物と遺跡の空白地帯になっている。代表的な遺物として銅鐸があげられる。西遠江は日本有数の銅鐸出土地の密集地帯となっているが、この浜北地区には一ヶ所の出土地も存在しない。西遠江においては一定以上の広さをもつ平野部があれば必ず銅鐸が出土している。しかし浜北地区は広大な天竜川平野が東側に広がっているにも関わらず、銅鐸が出土していない。また東原遺跡がある浜北地区は三遠式銅鐸伝播の分岐点であった筈である。不思議である。次に、遺構では集落跡があげられる。弥生時代中期～後期は、広い沖積平野が広がっているにも関わらず、発見された集落跡は東原遺跡と芝本遺跡だけである。古墳時代は、三方原台地縁や北部の山麓部に前・中期の首長墳および無数の後期群集墳が分布するにも関わらず、発見された集落跡は東原遺跡D地点だけである。奈良・平安時代は、麁玉郡の中心地でありながら郡衙の位置も分からず、集落跡は東原遺跡の第30次調査１・２区と東原遺跡D地点だけである。無論、これらは発掘調査の件数に左右されるが、余りにも少ないと言わざるを得ない。これは分布上の見かけにすぎないのであろうか。

空白地帯をつくり出した原因は、現状では単なる憶測にすぎないが、原始・古代に東原遺跡のすぐ東側を流れていた旧天竜川にあると考える。旧天竜川の氾濫によって平野部の多くの集落跡が流失した、もしくは地中深くに埋まっているのではなかろうか。



第53図　弥生集落ネットワーク

（2）集　落

範囲と形状（第54図）　第１次～34次発掘調査の成果によって、東原遺跡の弥生集落の範囲と形状がほぼ判明してきた。南側は、第32次調査で判明していたが、今回の調査で再確認することができた。第32次調査でSB603が集落南端の住居とされたが、今回の調査で更に南へ約20m離れたB6グリッドでSB23が検出された。このSB23が東原集落の南端の住居であり、その少し南側のB7グリッドが集落のはずれにあたる。西側は、第15次調査でおおよその位置が確認されている。第15次調査では弥生時代の遺構が全く検出されていないことから、集落が調査区の東端に達していないことが分かった。また調査区東端から小谷が北へ伸びており、この小谷が集落の西端を決めていると推定される。南東側は、第29次調査Ｂ地点で集落のはずれが確認されている。SB01もしくはSB15が南東端の住居となっており、それより先は住居が発見されていない。東側は、第30次調査の２区で集落のはずれが確認されている。一見したところSX202が東端のように見えるが、その東側にも弥生時代の不明土坑SX201とSX203があり、両者が東端の遺構である。

問題は北側である。第33次調査では、調査区全面から住居が検出され、集落のはずれは確認されていない。ただ、後述する集落のはずれに多くみられる土器集積遺構（SX01）が検出されていることから、北方に集落のはずれがある可能性は残されている。

以上のように東原遺跡の弥生集落は、東西約150m、南北約350m以上の楕円形をした集落である。ただし、今回の調査のA2～A4グリッドで見られたように、東西方向に小谷が入りこみ住居のない空白域が数カ所に存在する。

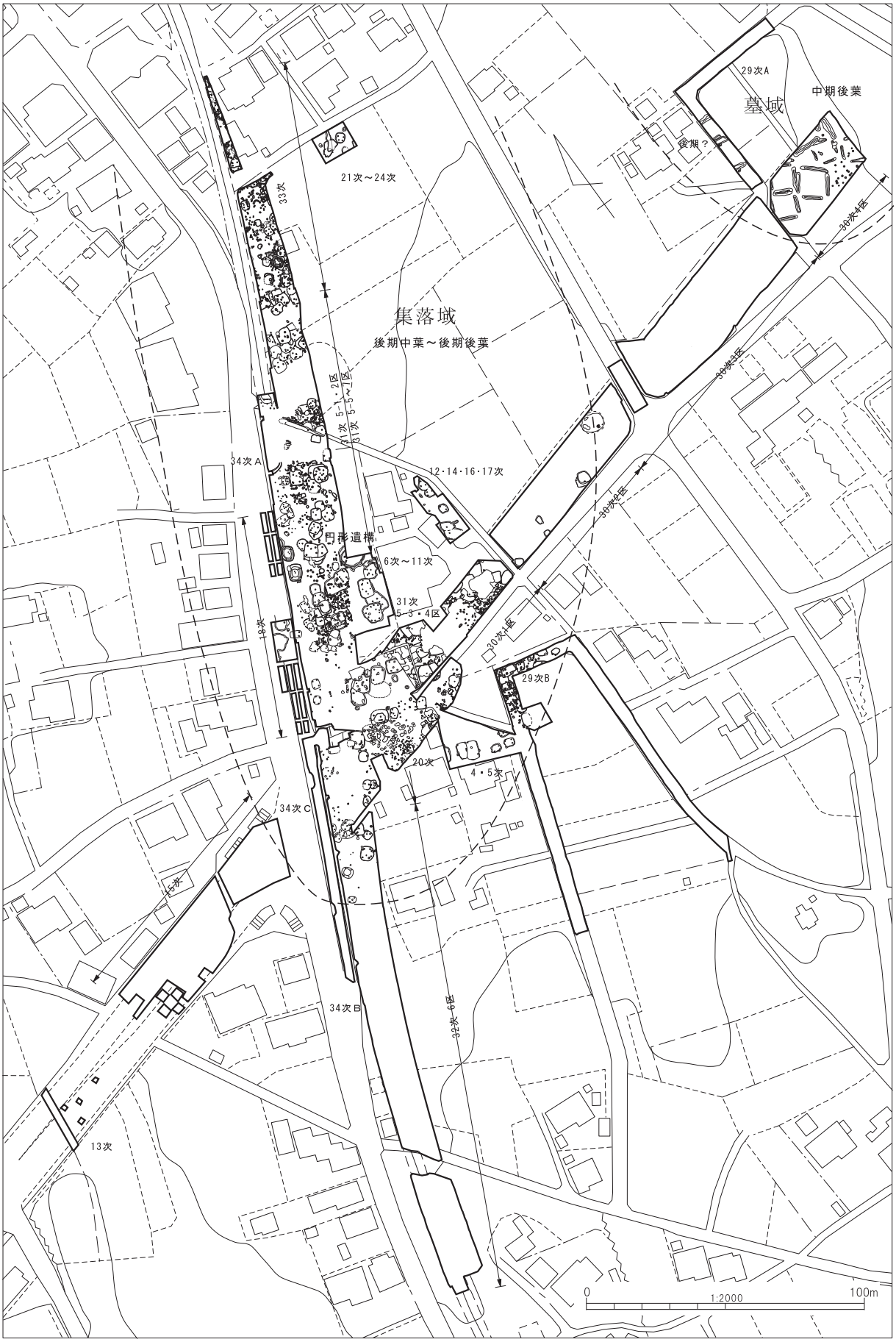
存続期間　東原遺跡の集落形成は、伊場様式新段階期（弥生後期中葉）に始まり、欠山様式期（弥生後期後葉）に終焉を迎える。これら以外の時期の土器は、集落跡から全く出土していないから、上記の期間は確実である。遠江における弥生時代の集落は弥生中期中葉に始まり古墳時代に終わる例が多い中、東原遺跡はやや異なる様相を示している。その原因は、従来から言われているように、集落が河岸段丘の縁辺部を少しずつ南へ移動しているため、一ヶ所での定住期間が短いのであろうか。事実、南側の東原遺跡Ｄ地点に古墳時代～奈良時代の集落跡が広がっている。

環濠の有無　以前から東原集落には、環濠もしくは環濠になる可能性のある区画溝が無いことが指摘されていた。そして今回の第34次調査でも環濠および区画溝が無いことを再確認した。

西遠江においては、伊場遺跡、梶子遺跡、山の神遺跡、鳥居松遺跡に代表されるような平野部の集落跡では環濠が確認されているが、丘陵上や台地上の集落跡では一般的に環濠が確認されていない。その視点から見れば、東原集落は西遠江における一般的な集落のあり方と同じと言える。ただし東原集落のすぐ横にある芝本集落では環濠もしくは区画溝が確認されている。

土器集積遺構（第60図）　ひとつ触れておきたいものに、土器集積遺構がある。大型土坑の中に大量の土器と円礫が廃棄されている遺構である。第29次調査のＢ地点で検出されたSX01、第30次調査の２区で検出されたSX202、第33次調査で検出されたSX01などである。そして今回の第34次調査でも、土器の量がやや少ないが、SB01、SB02、SB22が土器集積遺構と同様な状態で検出された。

土器集積遺構は、次のような共通点をもつ。①大型土坑であるが、平均的な竪穴住居より小さい



第54図　東原遺跡遺構合成図（弥生時代）

②隅丸方形もしくは隅丸長方形をしている③集落のはずれに近い場所にある④礫を多量に含む⑤少し埋没した後で土器・礫を廃棄している、等である。更にもう1点ある。

土器集積遺構のすべてが竪穴住居であった可能性である。第29次調査のSX01はSB17の廃絶後に土器が廃棄されたと報告されており、また第30次調査のSX202は住居廃絶後の窪みに投棄した可能性が高いと報告されている。第33次調査のSX01は住居内で貼床と焼土を確認している。そして第34次調査のSB01、SB02、SB22は、やや迷いながらも、すべて竪穴住居として検出している。このようにすべての土器集積遺構が最初は竪穴住居であった可能性がある。

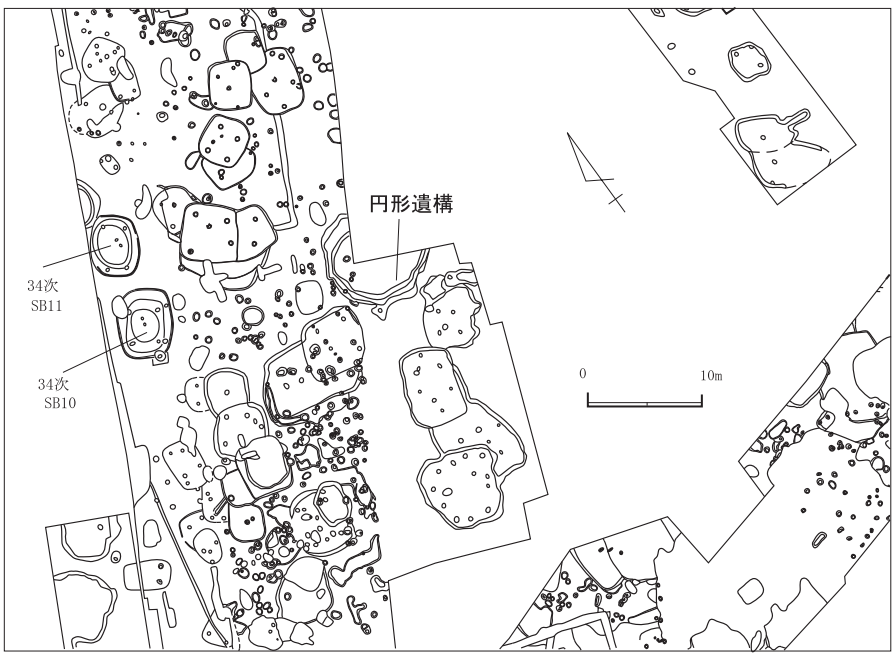
以下の記述は想像にすぎない。集落のはずれにあった小型住居もしくは小型倉庫が早い時期に廃絶し、住居の掘方は埋まり始めていた。その時期に集落の住民が、平野部の住民が環濠へ廃棄したと同じように、埋まり始めていた掘方へ土器や礫を廃棄したのではなかろうか。

円形遺構（第55図） 非常に不思議な遺構がある。それは、第6～11次調査および第31次調査で検出された円形遺構であり、今回の調査で最も大きな竪穴住居（SB10）の東側約20mに位置する。幅2m～0.8mの箱掘り溝が円形に廻り、全体の約4分の3が検出されている。溝は東側が徐々に浅くなっていることから、東側に開口部がありそうである。この遺構を検出した第31次発掘調査の報告書では、円形周溝墓の可能性を指摘している（静文研2007）。しかし西遠江において弥生時代後期の円形周溝墓は非常に少なく、また周溝墓が集落の中心部に存在する例は皆無に等しい。その点を考慮すると、円形周溝墓の可能性は少ないと考える。

第55図を見ていると、次の3点に気づく。①円形遺構の周辺には比較的大型の竪穴住居が集中している。②周辺の竪穴住居は切り合い関係が多い。③円形遺構と重なりあう遺構はない。特に③は重要である。北東側の4分の1は未発掘で不明であるが、他の4分の3はまったく切り合い関係が見られない。大型竪穴住居が密集する集落の中心部と想定される場所にあって、まったく切り合い関係がないことは、その遺構が意識された空間であることを暗示する。それは何であろうか。

これは仮説の段階であるが、首長の住む周溝をもつ竪穴住居または周溝をもつ平地式住居を考えてみたい。円形遺構を住居の外に廻る幅の広い周溝とみるのである。

直接的な関係はないが、上ノ平遺跡の幅広周溝をもつ竪穴住居群が興味深いので、簡単に紹介しておこう。上ノ平遺跡は天竜川東岸の菊川様式圏に位置する弥生時代後期初頭～古墳時代前期の集落遺跡で、後期後葉に竪穴住居構造に画期が認めら

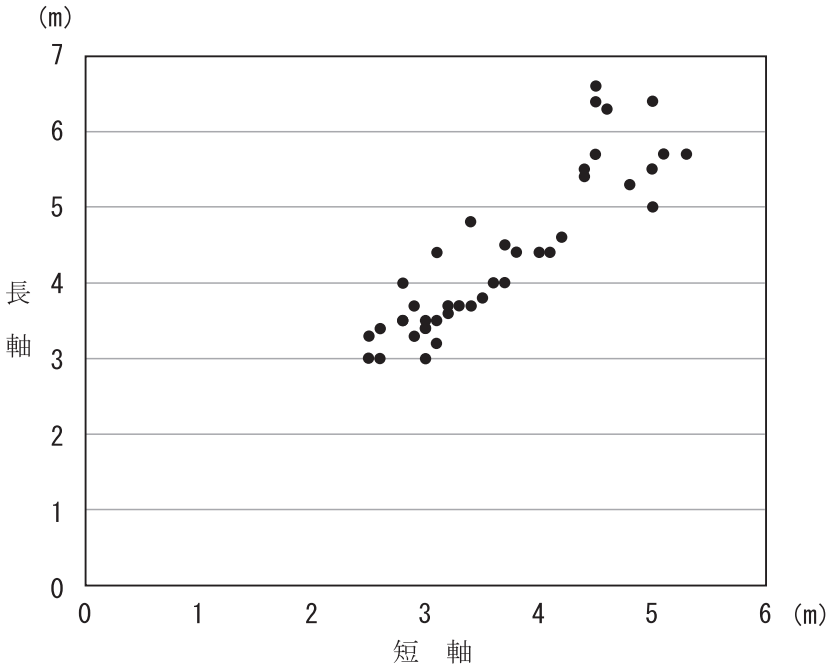


第55図　円形遺構周辺図

れる。後期後葉に従来の竪穴住居から突然に幅広周溝をもつ大型の竪穴住居へ変わったという。そして注目すべきは、台付甕の有粘率（粘土帯をもつ比率：後述）が他の住居群では０％であるが、幅広周溝をもつ竪穴住居群では12％の高率を示す点である（静文研2008）。移住とは言わないが、明らかに西遠江からの影響が見られる。また幅広周溝をもつ竪穴住居と台付甕の粘土帯がセットになっている点が興味深い。

（3）住　居

規模と形態　東原遺跡で検出された竪穴住居は、第32次調査終了段階で約150軒とされているので、第33次の34軒と第34次の23軒を加算すると、総計約210軒になる。その約210軒の規模と形態を調べ始めたが、①重複がはなはだしい②記録が公表されていない③撹乱か住居か分からない④不整形の住居が多い⑤隣の調査区とつながらない⑥一部が検出されただけである等の原因で、甚だ困難を伴うことが判明した。そこで全体形状がほぼ判明しているもの、もしくは筆者



第56図　竪穴住居の規模

名称	調査次数	形態	短軸	長軸	名称	調査次数	形態	短軸	長軸
１号住居	４・５	隅丸長方形	2.8	3.5	ＳＢ５６２	31	隅丸長方形？	2.9	3.7
３号住居	〃	隅丸長方形？	2.5	3.3	ＳＢ５６３	〃	隅丸長方形？	2.5	3
４号住居	〃	隅丸長方形	4.5	6.4	ＳＢ６０２	32	隅丸方形？	3.1	3.2
５号住居	６・７・８	隅丸長方形？	4.5	6.6	ＳＢ６０３	〃	隅丸方形？	4.8	5.3
24号住居	12・14・16・17	隅丸方形？	3.4	3.7	ＳＢ０６	33	隅丸長方形	3	3.5
ＹＤ０１	20	隅丸長方形	4.4	5.4	ＳＢ０９	〃	隅丸方形	3	3.4
３号住居	21～24	隅丸方形	3.5	3.8	ＳＢ１０	〃	隅丸方形？	3	3
ＳＢ０８	29	隅丸方形？	3.1	3.5	ＳＢ１１	〃	隅丸長方形？	2.9	3.3
ＳＢ５０２	31	隅丸方形？	5.1	5.7	ＳＢ１４	〃	隅丸方形	4.2	4.6
ＳＢ５１６	〃	隅丸長方形	4.5	5.7	ＳＢ１８	〃	隅丸長方形？	3.7	4.5
ＳＢ５１７	〃	隅丸方形？	5.3	5.7	ＳＢ１９	〃	隅丸長方形	3.4	4.8
ＳＢ５１８	〃	隅丸長方形？	5	5.5	ＳＢ０１	34	隅丸長方形	3.2	3.6
ＳＢ５２０	〃	隅丸長方形	4.6	5.8	ＳＢ０２	〃	隅丸長方形	3.2	3.7
ＳＢ５２１	〃	隅丸方形	4	4.4	ＳＢ０７	〃	隅丸長方形	3.1	4.4
ＳＢ５２３	〃	隅丸長方形	3.8	4.4	ＳＢ１０	〃	隅丸長方形	5	6.4
ＳＢ５２４	〃	隅丸長方形	3.3	3.7	ＳＢ１１	〃	隅丸長方形	4.4	5.5
ＳＢ５２７	〃	隅丸方形？	5	5	ＳＢ１４	〃	隅丸方形？	3.7	4
ＳＢ５３３	〃	隅丸長方形？	3	3.4	ＳＢ１５	〃	隅丸長方形？	2.8	3.5
ＳＢ５５３	〃	隅丸長方形？	2.6	3	ＳＢ２２	〃	隅丸方形	4.1	4.4
ＳＢ５５８	〃	隅丸長方形？	2.8	4	ＳＢ２３	〃	隅丸長方形	2.6	3.4
ＳＢ５６１	〃	隅丸方形？	3.6	4					

（単位：m）

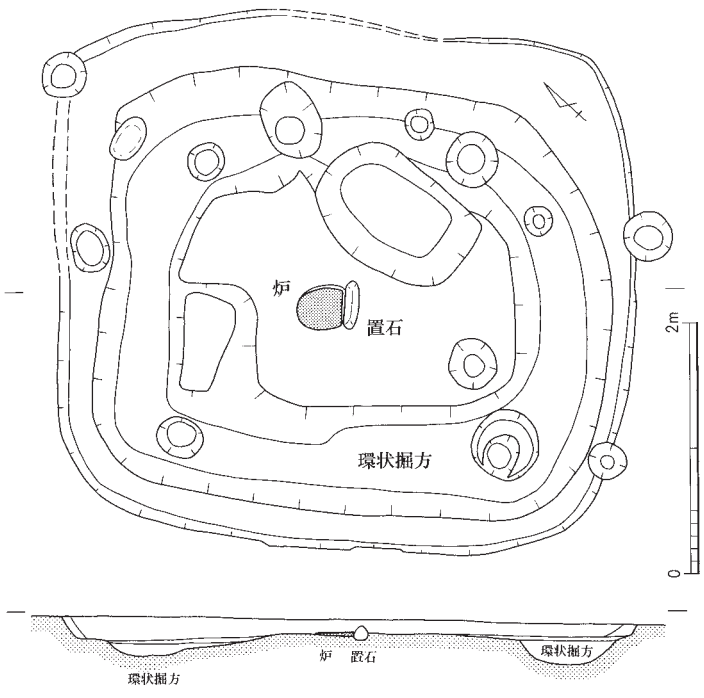
表５　竪穴住居の規模（東原遺跡）

の判断で全体形状が復元できるものを抽出し、その抽出した41軒（表５）で規模と形態を調べてみた。竪穴住居の平面形は主に隅丸長方形で、少数ではあるが隅丸方形もみられる。柱穴は４基もつものが大多数で、長軸が４ｍ以下の住居では柱穴がない例や柱穴が不明瞭な例が多い。炉跡は、住居中心部から少し離れた位置にあり、小型の竪穴住居では炉跡が無い例が多い。住居の規模は、第56図に示した通り、長軸が３ｍ～７ｍの中に納まる。ただしこの数値は実際よりやや小さい方に振れている可能性がある。その原因は、大きな住居は一部が調査区外に出る場合や他の住居や撹乱坑と重なる場合が多く、抽出の段階でそれらが除外されているからである。

周壁溝の有無　従来から東原遺跡の竪穴住居には周壁溝が伴わないことが指摘されていた。事実、第30次調査のSB104とSB109および第31次調査のSB549で周壁溝の一部らしき溝が検出されただけであり、他の約180軒の住居では全く検出されていない。しかし今回の第34次では、SB10とSB11で全周する周壁溝を検出し、SB09とSB16で周壁溝の一部らしき溝を検出した。少なくとも大型住居のSB10とSB11で確実に周壁溝が伴うことを確認した。このように今回の調査において高率に周壁溝を検出できた要因は長年にわたって鉄道線路下という好条件に恵まれたためと推定する。周壁溝が伴わないのではなく、地山が汚れていて検出が難しかった可能性がある。

置石炉をもつ住居　第34次調査のSB10は置石炉をもつ住居であった可能性がある。そして東原遺跡の過去の調査でも、置石炉をもつ住居が第５次調査の４号住居や第６次調査の１号住居など10軒検出され、置石炉をもっていた可能性のある住居が第５次調査の５Ｂ号住居や第10次調査の８号住居など７軒検出されている（表６参照）。一ヶ所の遺跡で18軒とは、非常に高率である。

西遠江では、他に井通遺跡、北神宮寺遺跡、大平遺跡で検出されている。井通遺跡では、長床様式期（弥生中期後葉）の竪穴住居SH4005（２）、SH4009、SH4013、SH4018、SH4019の５軒が確認された。北神宮寺遺跡では、第１次調査で弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居SB20、SB22、SB30、SB38、SB51の５軒、第２次調査で古墳時代前期の竪穴住居SB01が確認された。大平遺跡では、古墳時代前期の竪穴住居SB14が確認された。それ以外に静岡県内では、駿河山遺跡、掛之上遺跡、片瀬遺跡、居村遺跡、愛野向山遺跡、団子塚遺跡、川田・東原田遺跡、雌鹿塚遺跡、北神馬土手遺跡で置石炉をもつ住居が確認されている。ここで簡単に置石炉の構造に触れておこう。置石炉とは、炉の片隅に石が置かれている構造のものを指し、細長い石がひとつ、炉の住居長軸側に、長軸と直行する方向にむけて置かれている場合が多い（第57図参照）。

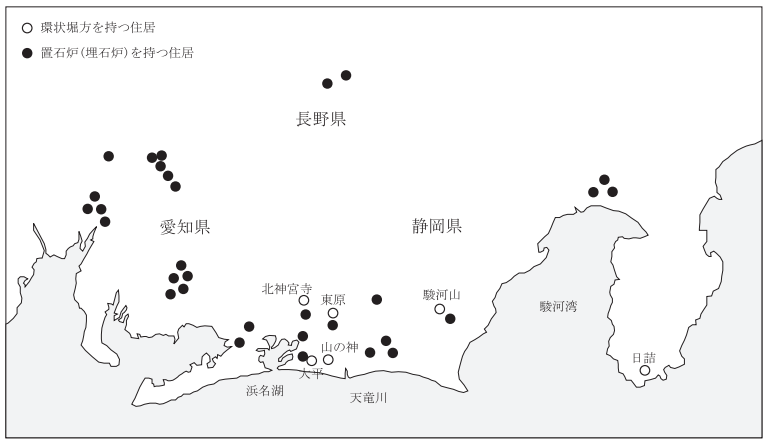


第57図　第33次調査SB14

これまで静岡県では、石の置かれている深さについては特に注意を払わなかったが、ここにきて集成上の小さな問題点が生じた。実は、置石炉の分布は静岡県だけではなく、隣の愛知県でも鹿乗川流域を中心に広く分布しており、愛知県では石の置かれている深さによって置石炉と埋石炉に分けて集成している（石黒2009）。しかし両者をどの程度の深さで分類するのか微妙であること、また正確な床面の高さが検出されていない場合は判断が難しいことなどから、本書では埋石炉を含めて集成し、それら全体を置石炉と呼ぶことにする。

炉に石が確実に伴うもの		石が伴う可能性があるもの	
遺構名	調査次数	遺構名	調査次数
4号住居	5次	5 B号住居	5次
1号住居	6次	8号住居	10次
6号住居	7次	14号住居	10次
SB101	30次	SB554	31次
SB111	30次	SB556	31次
SB504	31次	SB562	31次
SB516	31次	SB563	31次
SB519	31次	SB10	34次
SB533	31次		
SB14	33次		

表6　炉に石が伴う住居（東原遺跡）



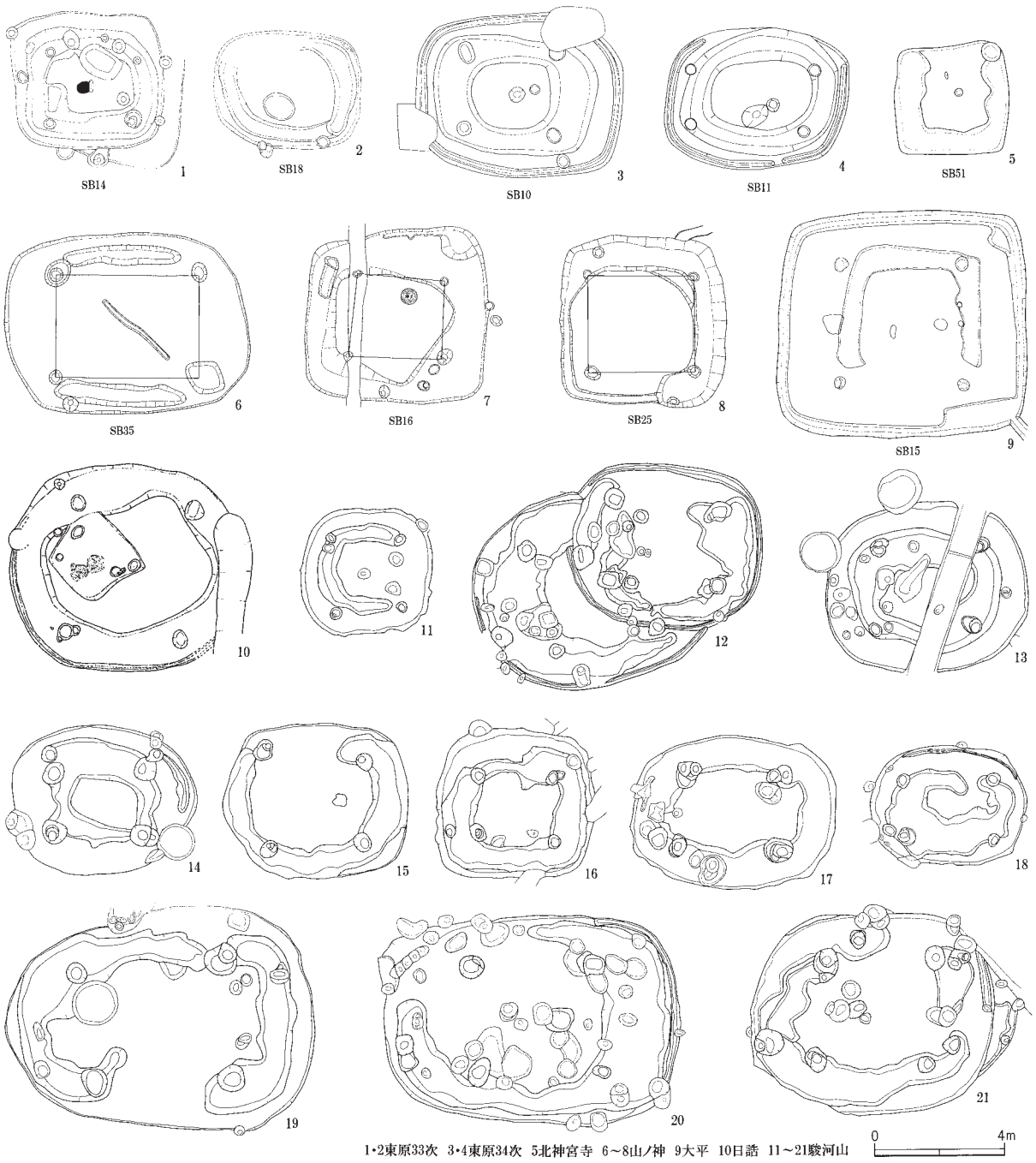
第58図　置石炉と環状掘方の分布図

置石炉は、静岡県特有の炉形態ではなく、東海地方全域にみられる弥生時代中期～古墳時代前期の炉形態であり、弥生時代中期に伊勢湾岸地域から始まり、東へと伝わったものと思われる。静岡県内への伝播は、豊橋市橋良遺跡および浜松市井通遺跡の置石炉が長床様式期であることからみて、長床様式期（弥生中期後葉）に県境を越え、伊場・欠山様式期（弥生後期）に東原遺跡や駿河山遺跡などを経て県内に広く分布し、北神宮寺遺跡や大平遺跡にみられるように古墳時代前期まで存続したと推定される。

炉に石を置く理由としては、薪を地面から浮かせて酸素供給を促したとの推定（岩瀬1996・2001）と、炉の縁辺を区画して炎の拡散を防ぐと共に甕の安定性を高めたとの推定（浜文振2009）がある。

環状掘方をもつ住居　環状掘方をもつ住居とは、床面をドーナツ状もしくはコの字状に掘り込んだ下部構造をもつ竪穴住居であり、第33次調査において初めてその存在が注目された。その第33次調査では、SB14、SB18、SB19の3軒が確認されている。そして今回の第34次調査では、SB10、SB11、SB18の3軒を確認し、SB12とSB22は環状掘方の一形態である可能性が残されている。更にそれ以前の第31次調査の中にも疑わしい住居がある。第31次調査のSB545とSB546は重なり合う竪穴住居であるが、図面上だけでみると、環状掘方であった可能性がある。いずれにしても環状掘方は東原遺跡の竪穴住居において一定の割合でみられる床の下部構造であることに間違いはない。

環状掘方が発見された当初は東原弥生集落における特質であると考えられていたが、北神宮寺遺跡で検出され、また他の遺跡での検出例が知られ、静岡県内に広く分布していることが分かってきた。西遠江では、北神宮寺遺跡で弥生時代終末期～古墳時代前期の竪穴住居SB51、山ノ神遺跡で弥生時代後期のSB14、SB16、SB25、SB35の4軒、大平遺跡で古墳時代前期のSB15が検出された。他に静岡県内では、駿河山遺跡、日詰遺跡がある。環状掘方の目的は、除湿ないし排水機能の付加（浜



1・2東原33次　3・4東原34次　5北神宮寺　6～8山ノ神　9大平　10日詰　11～21駿河山

第59図　環状堀方をもつ住居の集成

文振2008）や湿気対策（浜文振2009）があげられている。

掘立柱建物　東原弥生集落は、竪穴住居を主体に構成されており、掘立柱建物が非常に少ないという特徴がある。唯一、第31次調査の掘立柱建物SH501（１間×３間）と第20次調査南調査区の掘立柱建物と推定される小穴群だけが検出されている。同様に、集落を広範囲に発掘調査したにも関わらず掘立柱建物が検出されない遺跡として都田川流域の北神宮寺遺跡がある。やや時期が異なるが、北神宮寺遺跡とは、置石炉の様相、床面の環状掘方、柱穴を伴わない小型竪穴住居などに共通点がみられる。前記したように都田川流域と天竜川平野北部は東西交流路北ルートによって繋がっており、両者に密接な交流があったことが推定される。

掘立柱建物が非常に少ない原因を考える上で、注目されるのは炉と柱穴の伴わない小型竪穴住居

の存在である。掘立柱建物は一般的に穀物を貯蔵する倉庫であったと考えられているが、その役割を柱穴を伴わない小型竪穴住居が担っていた可能性がある（浜文振2009）。もしそうであるならば、集落周辺部にある小型竪穴住居が早い段階で解体されてゴミ捨て場となったことも少し頷ける。いずれにしても掘立柱建物の有無と小型竪穴住居の関係は今後とも注目すべき課題である。

（4）墓　域

方形周溝墓　東原遺跡周辺には、大きく分けて２ヶ所の墓域が形成されている。ひとつは東原遺跡第29次調査Ａ地点および同第30次調査４区であり、東原弥生集落から東側へ約100m離れた位置にある。第60図の右上に記載されているのがこの墓域にあたる。東原集落に非常に近接しているが、東原集落の墓域ではない。この墓域では、第30次調査４区で中期後葉の方形周溝墓８基が検出され、第29次調査Ａ地点で時期不明の方形周溝墓２基が検出されている。時期不明の２基は位置関係からみて、中期後葉の方形周溝墓である可能性が高い。

もうひとつの墓域は芝本遺跡Ｈ地点にある。東原弥生集落から北東方向へ約200m離れ、芝本弥生集落の北側にあたる。この墓域では、伊場様式新段階期（後期中葉）の方形周溝墓１基と欠山様式期（後期後葉）の方形周溝墓１基が検出されている。

土器棺墓　それぞれの墓域で土器棺墓も発見されている。第30次調査４区では、周溝墓の溝の中で１基、周辺部で２基、合計３基の土器棺墓が検出されている。芝本遺跡Ｈ地点では、方形周溝墓からやや離れた地点で３基の土器棺墓が検出されている。この芝本遺跡Ｈ地点は土器棺墓だけの墓域であった可能性がある。

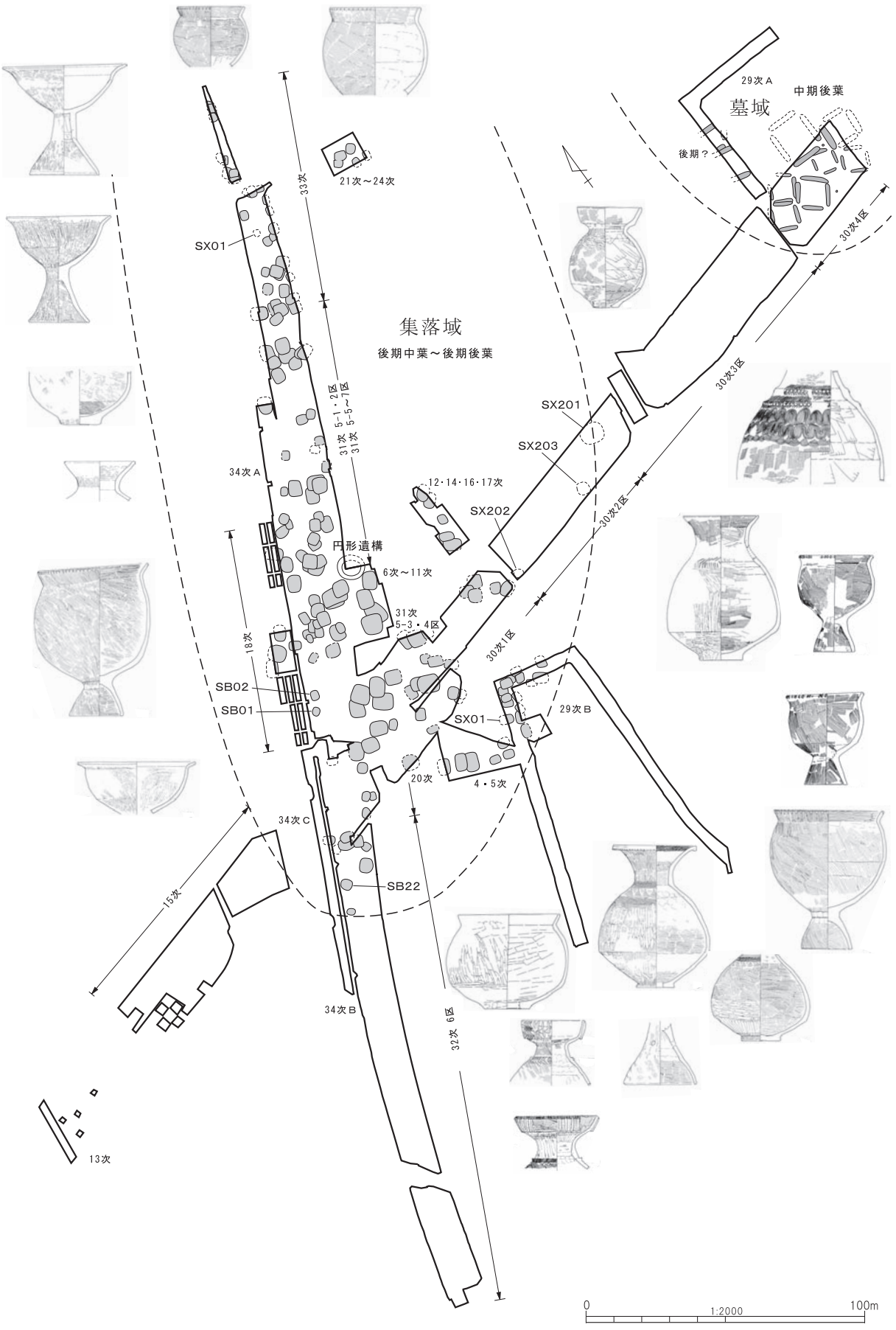
墓域はどこに　東原集落の東側約100mの位置にある墓域の時期は弥生中期後葉であり、後期中葉～後葉の東原集落の墓域とはなりえない。また芝本遺跡Ｈ地点の墓域は、位置関係からみて、芝本集落の墓域と考えられる。ということは東原集落の墓域は未発見で、今も地中に埋まっていることになる。

（5）水　田

平野への進出　西遠江における一般的な集落の沖積平野への進出過程は、弥生時代前期に沖積平野に接する微高地上に集落ができ、中期前葉になると本格的に沖積平野に進出し、中期中葉～後葉にかけて平野部に大規模な集落が形成される。そして後期に入ると、中期から続く集落を核として爆発的に集落が増えて周辺部へ広がる。近年の発掘調査の成果により、この進出過程が実証されつつある。特に中期中葉～後葉の核となる大規模集落が次々に発見されている。浜松南部海岸平野の中村遺跡、都田川平野の井通遺跡、天竜川南部平野の将監名遺跡などである。

集落が平野へ進出する理由は、効率的な水田経営をするためには、水田に近接した場所の方が有利であったためであろう。

水田の位置　東原遺跡がある天竜川北部平野でも、当然のこととして、集落の平野への進出行動



第60図　竪穴住居群と方形周溝墓群

があったことと思われる。実際に痕跡が残っている。縄文晩期から集落が次第に南下して平野部に近づき、河岸段丘端の芝本遺跡Ｂ地点に弥生時代前期の土器と中期中葉の竪穴住居が残されている。しかしその後が不明である。天竜川北部平野に、核となる集落どころか、弥生集落がまったく見あたらない。平野部に水田が造れなかったためであろうか。また東原集落の住民が自然堤防上の畑作だけに頼っていたとも考えられない。最も納得できる答えは、旧天竜川の氾濫によって水田が流失したか、もしくは今も地中深くに埋まっているという仮説である。

（6）土　器

・遠江の土器様式

遠江の中期後半～後期の土器様式は天竜川を境にして、西に位置する西遠江と東に位置する東遠江では大きく異なっている。中期後葉においては、近畿地方の凹線紋系土器の影響を受けて成立した東三河の長床様式の分布圏に入っており、それに対して東遠江は縄文土器の影響を受けた白岩様式が分布している。西遠江では、後期に入っても伊勢湾岸地域の影響を受け続け、前葉～中葉に伊場様式（山中様式西遠型）が、後葉に欠山様式（三和町、欠山様式西遠型）が、大様式の中の小様式として成立する。前者は更に古段階と新段階に区分されている。一方、天竜川を東へ越えた東遠江では、後期に菊川様式が分布し、それは古段階、中段階、新段階の時期に区分されている。

時期		東三河	西遠江		東遠江
中期	中葉	瓜郷	瓜郷	天竜川	嶺田
	後葉	長床	長床		白岩
後期	前葉	寄道 (山中三河型)	伊場(古) (山中西遠型)		菊川（古）
	中葉		伊場(新) (山中西遠型)		菊川(中)
	後葉	欠山 (欠山三河型)	欠山 三和町 (欠山西遠型)		菊川(新)

表７　西遠江周辺の土器様式

土器様式の名称および時期区分は確定したものではなく、研究者によって異なっている。したがって幾つか問題点もあるが、本稿では上記の名称および時期区分を基にして記述する。

・中期後葉の土器

中期後葉の土器は第30次調査で検出された墓域から出土している。方形周溝墓の周溝中や土器棺墓として発見された。これらの土器の時期を第30次の発掘調査報告書（静文研2007）では中期末～後期前半と捉えている。しかし後期的な要素は少なく、大多数の要素は中期の中に収まると考える。後期初頭の不確定様式（浜文協1991）の可能性もあるが、当地域における後期初頭の土器構成が確立していない現状では、後期初頭まで下げる根拠は少ないと考える。

具体的に見ていこう。１は、ソロバン玉状の体部と単純に開く口縁部をもち、頸部から胴部にかけて斜格子紋を施している。この斜格子紋は西遠江の長床様式で使われている紋様である。２は、ソロバン玉状の体部をもつ壺で、斜格子紋風に交互に方向を変えるハケ目を施している。３は、壺の体部で、ややソロバン玉状であろうか。４は、ソロバン玉状の体部と受口状の口縁部をもち、胴部に斜格子紋を施している。５は、洋梨形の体部と受口状の口縁部をもち、上胴部に斜格子紋を施

第61図　東原遺跡の墓域出土土器

している。6は、細頸壺の頸部である。7は、細頸壺の体部である。8は、頸部が長い細頸壺である。9は、頸部に刺突横線紋を廻した細頸壺である。8と9の細頸壺は白岩様式の範疇に入ると思う。10は台付甕で、直立する体部と高い台部をもつ。11も台付甕で、直立する体部と高い台部をもつ。白岩様式の中に同じ形状の台付甕が見られる。12は、斜格子紋を充填した2条の帯を体部に施している。13は、壺の底部で、底面が小さい。14は、台付甕の上胴部である。以上を一見して最初に気づく点は、凹線紋土器が含まれていないことである。凹線紋土器を含むことが要件ならば、長床様式ではないかもしれない。しかし白岩様式によって大きく変容している可能性もある。

・後期の土器

芝本遺跡は東原遺跡の北側に位置する弥生時代の遺跡であるが、両者は近接しており、将来同一集落遺跡であることが判明する可能性もある。そこで、ここでは芝本遺跡から出土した後期弥生土器も含めて検討することにする。

東原・芝本の土器　東原・芝本遺跡出土土器を、主観的に見れば、伊場・欠山様式圏の中に入り、30%前後の割合で菊川様式の影響を受けているだろうことは簡単に予測がつく。しかしこれを客観的に証明するには、器種比率の比較、形態分類、型式の認定などの複雑な様式認定の手続きを経る必要がある。そして最終的には弥生時代後期における東原・芝本遺跡の所在する天竜川平野北部の土器編年表を作成すべきである。しかしこれらの作業を困難にする要因がある。それは、①菊川様式の影響を強く受けている②東原・芝本遺跡固有の特質をもつ③周辺部に同時期の遺跡がない、等である。そこで今回は詳細な検討を断念して、過去に調査された器種比率の比較と西遠江の土器様式圏に入るのか否かの簡単な指標である粘土帯と装飾高坏と菊川様式の影響を具体的に紹介する。

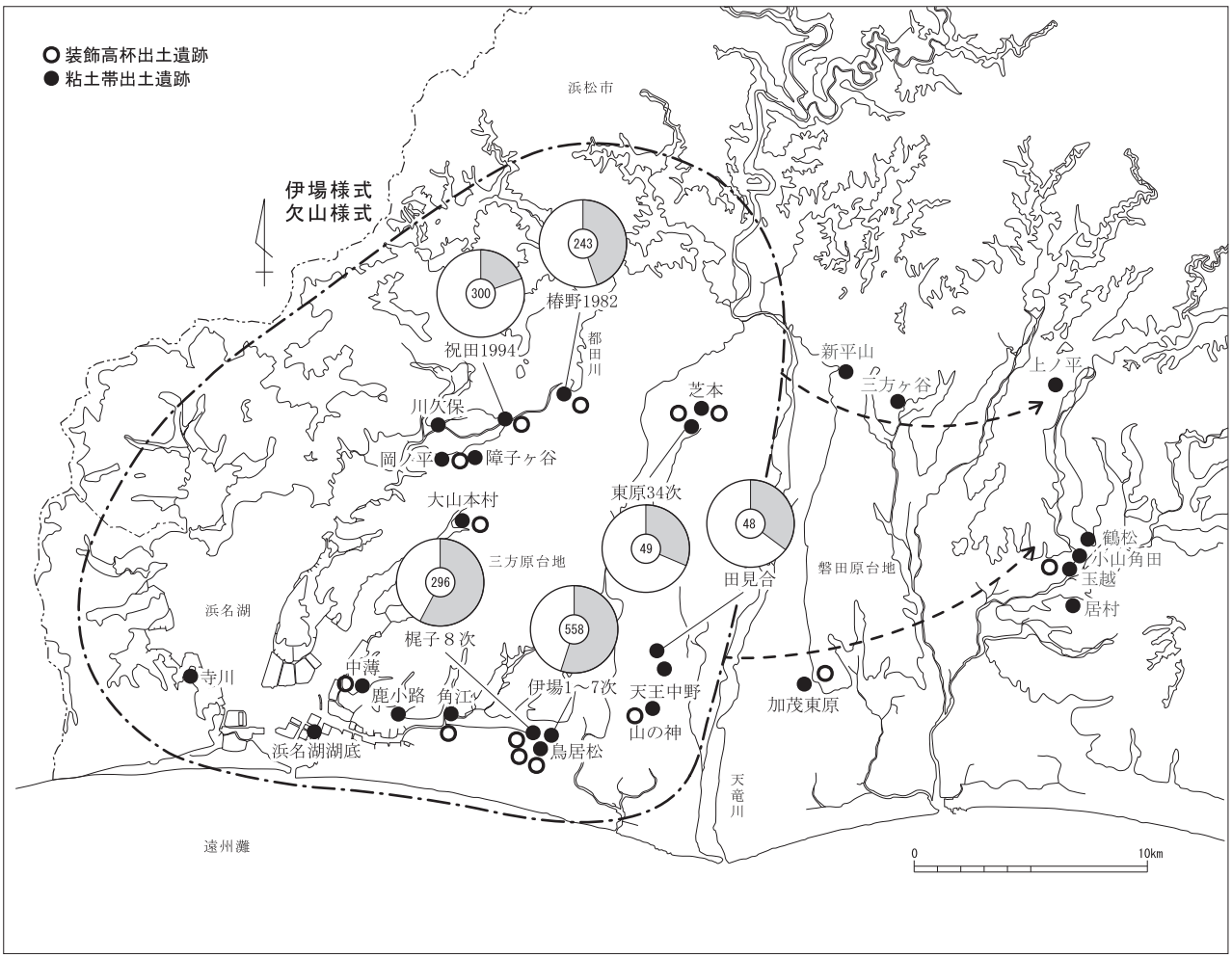
遺跡名	地区・遺構	時期	調査個数	有粘率	引用・参考資料
東原29次	SX01	弥生後期中～後葉	19	47%	『東原遺跡2002』
東原30次	全体（図上）	弥生後期中～後葉	30	20%	『東原遺跡2007』
東原33次	全体	弥生後期中～後葉	53	13%	『東原遺跡33次』
東原34次	全体	弥生後期中～後葉	49	29%	
〃	北半	〃	36	23%	
〃	南半	〃	13	42%	
伊場1~7次	全体	弥生後期前葉	558	54%	『伊場遺跡遺物編３』
〃	YT1	〃	48	50%	〃
〃	YT2	〃	112	54%	〃
〃	YT6	〃	35	57%	〃
〃	YT7	〃	203	49%	〃
〃	YT9	〃	88	65%	〃
〃	環濠外	〃	72	53%	〃
梶子８次	全体	弥生後期前葉	296	58%	『梶子遺跡Ⅷ』
〃	A地区	〃	86	58%	〃
〃	B地区	〃	146	57%	〃
〃	SD01・他	〃	67	58%	〃
祝田1994	SD54全体	弥生後期後葉	300	18%	『祝田遺跡1994』
〃	SD54上層	〃	261	18%	〃
〃	SD54中層	〃	39	23%	〃
田見合	全体	弥生後期中葉	48	33%	『転機』創刊号
椿野1982	溝（環濠？）	弥生後期後葉	243	44%	『梶子遺跡Ⅷ』
大　平	SB･SK･SD	古墳前期初頭	269	１%	『梶子遺跡Ⅷ』

表８　粘土帯の有無比率

器種比率　土器様式圏の中心部である伊場遺跡群での調査結果は、伊場様式においては、壺が約40％、甕が約25％、高坏が約30％、鉢が約５％の比率を占め、欠山様式においては、壺が約50％、甕が約25％、高坏が約20％、鉢が約５％の比率を占める。東原遺跡では、第29次調査のSX01出土土器で調査が行われており、壺・鉢が43％、甕が35％、高坏が22％という結果が出ている。菊川様式は高坏の比率が約10％と低めであることが判明していることから、高坏の比率を比較してみよう。東原遺跡29次SX01は22％であるから、伊場様式の約30％と欠山様式の約20％の中間の値を示し、菊川様式の約10％とはかけ離れている。このように高坏の比率でみると、西遠江の土器様式圏内であり、伊場様式と欠山様式の中間の位置を占める。壺と甕の比率もこれと矛盾しない。

甕の粘土帯　甕の粘土帯とは、台付甕の体部と台部の接合部に巻かれている粘土の帯であり、一般的に帯の表面に指頭圧痕が認められる。粘土帯を巻く目的は接合部の強化にあると思われる。弥生時代後期の伊場様式～欠山様式に見られる西遠江の特有の土器製作技法で、極少数ではあるが古墳時代前期まで残存する。浜松市南部海岸平野の伊場遺跡群を中心に分布し、そこから離れるにしたがって有粘率（粘土帯が巻かれている比率）が低下する傾向にある。

この粘土帯が注目される理由は、伊場・欠山様式圏に含まれるか否かの簡単な指標になることと、他地域への搬出品および模倣品の判別に有効で、物的・人的交流の証拠になる点である。



第62図　粘土帯と装飾高坏の分布図

では、有粘率の変化を具体的に見ていこう。有粘率の変化には時間的変化と空間的変化があり、時間的変化は時期の違いを土器様式で表し、空間的変化は場所の違いを遺跡名で表す。

有粘率の時間的変化は次の通り。粘土帯は伊場様式初頭に出現し、有粘率は伊場様式の伊場遺跡が54％で、同じく梶子遺跡が58％である。欠山様式の椿野遺跡が44％で、古墳時代前期の大平遺跡が１％である。以上から、空間的要素が少し入って誤差があるが、おおむね有粘率は伊場様式で50％強、欠山様式で40％前後、古墳時代前期で１％とみてよかろう。有粘率の時間経過による減少は、祝田遺跡SD54の有粘率が中層23％から上層18％へ減少していることからも裏付けられる。

次に有粘率の空間的変化である。土器様式圏中央部の伊場遺跡と梶子遺跡が50％強、天竜川南部平野の田見合遺跡が33％、天竜川北部平野の東原遺跡34次が29％、都田川平野の祝田遺跡が18％である。以上から、時間的要素が少し入って誤差があるが、有粘率は様式圏中央部の浜松南部海岸平野から離れるに従って少しずつ減少していると推定される。

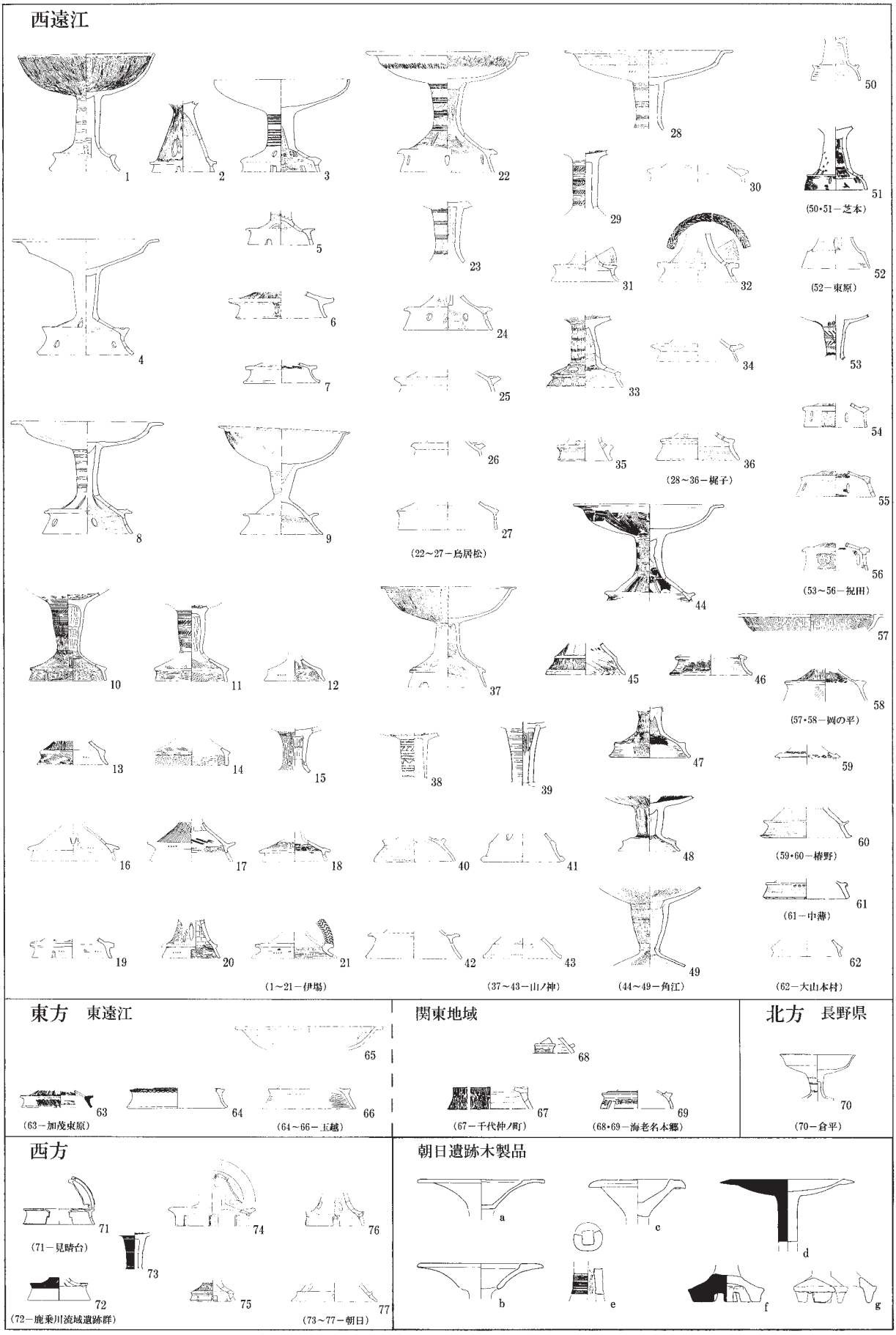
問題は東原遺跡である。調査次数によって有粘率の数値に大きなバラツキが見られる（表８）。しかしこの点については、今回の34次調査によって原因が判明した。34次の調査区は南北方向に非常に長いため、有粘率の調査を北半と南半に二分して実施した。その結果は北半が23％、南半が42％となり、同一集落でありながら大きく異なる数値を示した。

不思議に思って、過去の数値を見直した結果、次のことが判明した。有粘率は、集落の北側に調査区をもつ33次が13％、集落の中央に調査区をもつ30次が20％、同じく34次の北半が23％、集落の南側に調査区をもつ29次SX01が47％、同じく34次の南半が42％であった。すなわち集落の北側で10％台、中央部で20％台、集落の南側で40％台の数値を示している。このことから集落南端の29次調査SX01周辺に粘土帯を巻いた台付甕を愛用する家族が多く居住していたと思われる。

装飾高坏　装飾高坏は弥生時代後期の伊場様式から欠山様式にかけて西遠江に分布する装飾性の高い高坏である。西遠江の伊場様式から欠山様式だけに見られる器形であることから、粘土帯と同様に、伊場・欠山様式の影響をどの程度受けているのかを知る簡単な指標となり、また他の地域への搬出品および模倣品の判別に有効で、人的・物的交流の証拠ともなる。

装飾高坏は浜松市南部海岸平野の伊場遺跡群（伊場、梶子、鳥居松）から集中的に出土し、次に多いのが同じ南部海岸平野の角江遺跡と天竜川南部平野の山ノ神遺跡である。天竜川北部平野の東原遺跡および芝本遺跡や都田川平野の岡の平遺跡および祝田遺跡からは数点ずつ出土している。この分布域は、伊場・欠山様式の分布域とほぼ重なり合っている。ただし浜名湖の西岸と北岸は弥生遺跡の発掘調査例が少なく、まだ発見されていない。

〈東方の装飾高坏〉　西遠江と同じ形状をした装飾高坏が天竜川を越えた東遠江と東へ遠く離れた関東地方の２つの地域から出土している。前者には磐田市加茂東原遺跡の１点と袋井市玉越遺跡の３点があり、後者には神奈川県千代仲ノ町遺跡の１点と同県海老名本郷遺跡の２点がある。東遠江の装飾高坏は人的・物的交流の結果と推測され、他の器種でも数％の割合で伊場・欠山様式の影響がみられる。一方、関東地方の装飾高坏は集団的移住の結果とも考えられており、当地方の土器が高率で共伴している例がある。例えば神奈川県の神崎遺跡では、集落から出土した土器の大多数が当地方の土器様式の影響を受けていた。



第63図　装飾高坏集成図

〈西方の装飾高坏〉 西方では、愛知県見晴台遺跡の１点、同県鹿乗川流域遺跡の１点、同県朝日遺跡の５点がある。これまでは西方の装飾高坏も東方の装飾高坏と同様に人的・物的交流によって運ばれたか、もしくは模倣されたものと考えてきた。しかし朝日遺跡の装飾高坏と木製高坏が報告されて、前記の考えは間違いであることが判明した。朝日遺跡出土の74（第63図）を見ると、脚台部の先端が垂直に立ち、突帯が板状で誇張されていない。これらの特徴からみて、朝日遺跡の装飾高坏は明らかに西遠江の装飾高坏の祖形に位置付けられるものである。

これは仮説の段階であるが、下記のように考える。朝日遺跡もしくは朝日遺跡周辺において、木製高坏（第63図のａ～ｇ）を模倣して装飾高坏がつくられ、伊場様式を含む大様式である山中様式の中に低比率であるが存在し続け、それが東の見晴台遺跡、鹿乗川流域遺跡に伝わり、そして西遠江に至って爆発的な流行になったと推測する。

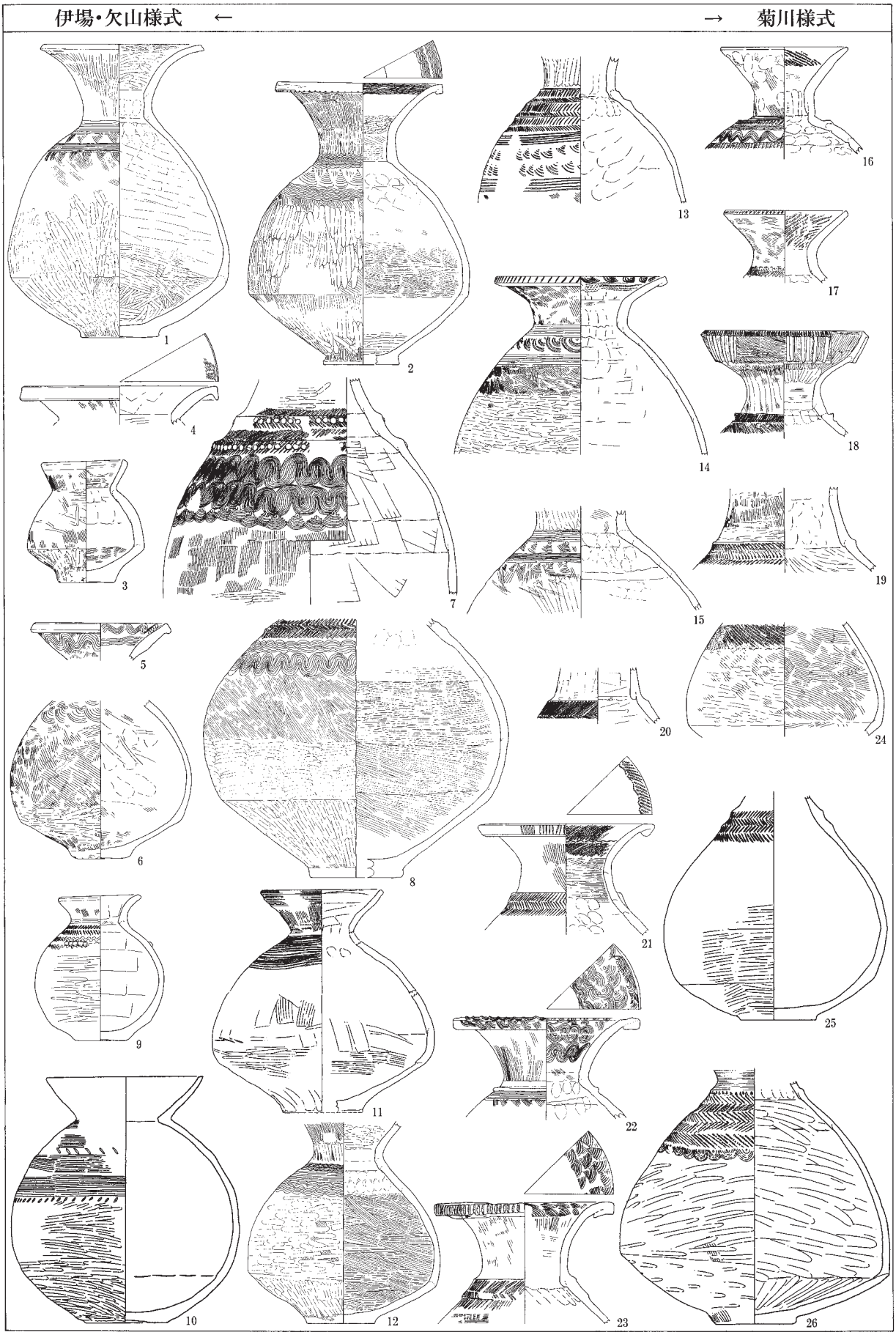
〈東原・芝本遺跡の装飾高坏〉 東原遺跡で１点（第29次）と芝本遺跡で２点が出土している。共伴土器および出土状況からみて、前者は欠山様式期（後期後葉)、後者は伊場様式期（後期前・中葉）とみられる。東原・芝本遺跡の装飾高坏は、菊川様式の高坏の影響を受けて、形状が大きく変化している。変化している部分は、①脚柱部の形状と②脚台部先端の形状である。①伊場遺跡群の装飾高坏は脚柱部の上部と下部が同径もしくは下部が細くなっているが、東原・芝本の装飾高坏はすべて下部が太い円錐形となっている。この円錐形の脚柱部は明らかに菊川様式の高坏脚部の影響を受けている。②伊場遺跡群の装飾高坏は脚台部先端がハの字状に真っ直ぐ開くか又は少し外反して開くが、東原・芝本遺跡の装飾高坏はすべて先端が内湾している。そして42（第65図）の菊川様式の高坏を見てもらえば明らかであるが、菊川様式の高坏も脚台部先端がやや内湾している。このことからみて、内湾する脚台部先端は菊川様式の影響とみられる。

興味深い点が１つある。神奈川県海老名本郷遺跡出土の69であるが、脚台部先端が内湾している。東原・芝本遺跡もしくは周辺地域で菊川様式の影響を受けた装飾高坏が遠方の海老名本郷遺跡へ伝わった可能性がある。

菊川様式の影響（第64図・第65図）東原・芝本遺跡から出土した土器が東遠江の菊川様式の影響を受けてどのように変形しているのか、おもに紋様と器形に的を絞って見ていこう。

〈壺〉 １は、直立したやや長い頸部、洋梨形の体部が菊川様式の影響を受けている。２は、縦方向のヘラミガキ痕がある、長く直立した頸部が菊川様式の影響であり、折り返し口縁も影響であろう。３は、洋梨形の体部が菊川様式の影響であろうか。４は、下方に引き伸ばした口唇部が東三河の伊場・欠山様式の影響である。５も、少し下方に引き伸ばした口唇部が東三河の伊場・欠山様式の影響である。６は、やや紋様の雰囲気が異なるが、伊場・欠山様式であろう。７は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、波状紋は伊場・欠山様式の影響である。８は、三角突帯上の羽状紋が菊川様式の影響である。９は、三角突帯上の羽状紋が菊川様式の影響であり、また円形浮文も菊川様式の影響であろう。

10は、全ての要素が欠山様式である。11は、洋梨形の体部が菊川様式の影響であろう。12は、縦方向のヘラミガキ痕がある頸部と洋梨形の体部が菊川様式の影響である。13は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、横線紋と扇状紋は伊場・欠山様式の影響である。14は、なで肩の肩部が菊川様



第64図　東原・芝本遺跡出土土器 1

式の影響で、また折り返し口縁も菊川様式の影響であろう。15は、縦方向のヘラミガキ痕がある頸部となで肩の肩部が菊川様式の影響で、横線紋と扇状紋が伊場・欠山様式の影響である。16は、肩部の波状紋を除けば、すべて菊川様式である。17は、全ての要素が菊川様式である。18は、全ての要素が菊川様式である。19も、全ての要素が菊川様式である。

20も、全ての要素が菊川様式である。21は、三角突帯上の羽状紋、折り返し口縁、口縁内側の縄紋など全ての要素が菊川様式である。22は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、扇状紋、横線紋、波状紋が伊場・欠山様式の影響である。23は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、口縁内側の扇状紋は伊場・欠山様式の影響である。24は、全ての要素が菊川様式である。25は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、丸みを帯びた体部は欠山様式の影響であろうか。26は、ほとんどの要素が菊川様式であるが、扇状紋は伊場・欠山様式の影響である。また上胴部まで横方向のヘラミガキが施されている点は伊場・欠山様式の影響であろうか。

以上のように、弥生土器３形態の中で壺が菊川様式の影響を最も強く受けている。

〈高坏〉27は、口縁部先端の形状がやや異なるが、全ての要素が伊場様式である。28は、全ての要素が伊場様式新段階と思うが、口縁部先端の形状は菊川様式の影響を受けているのであろうか。29は、ほとんどの要素が伊場様式新段階と思うが、深い坏部と口縁部先端の形状が菊川様式の影響を受けていると考える。

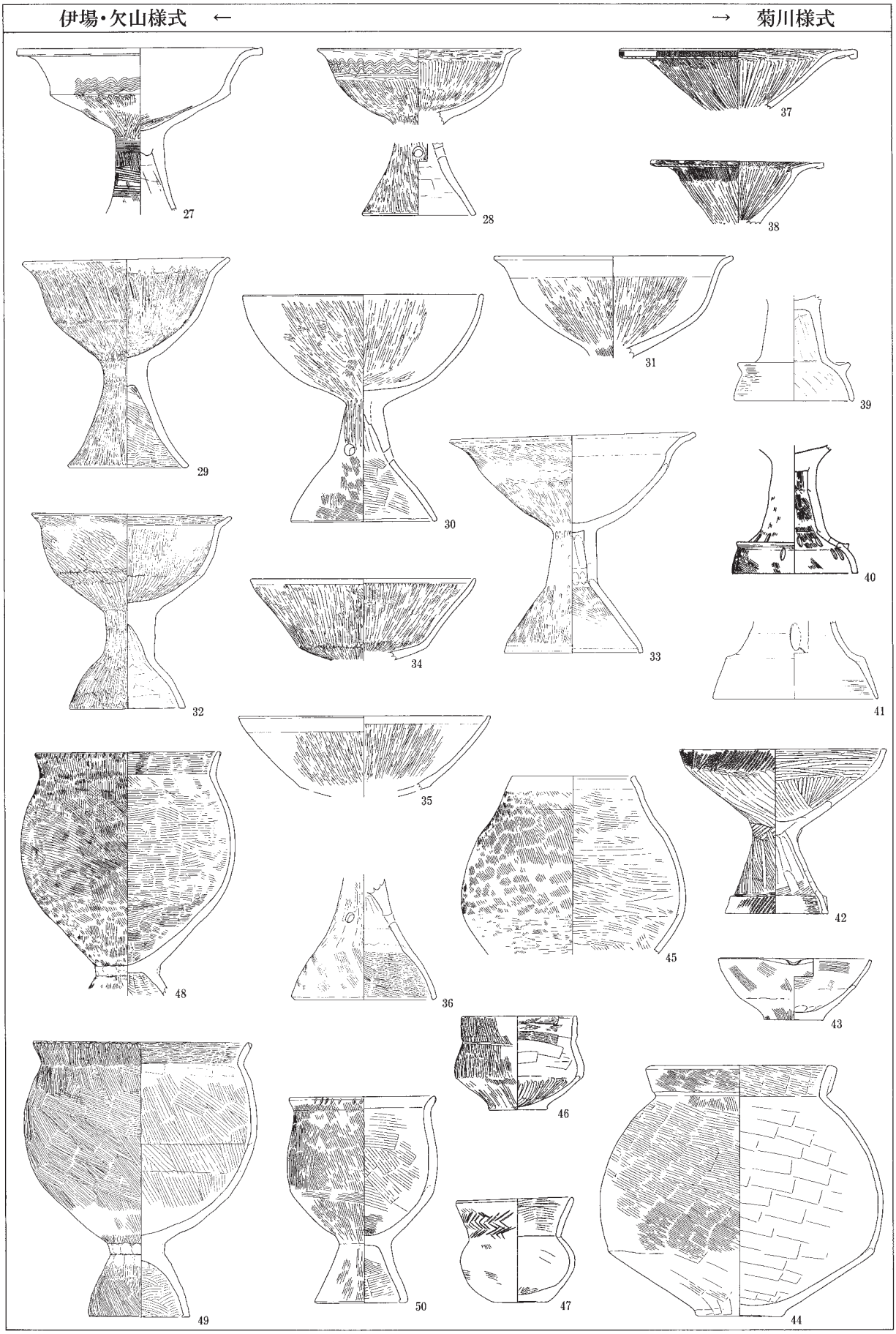
30は、全ての要素が伊場・欠山様式である。31は、全ての要素が伊場・欠山様式であると思うが、口縁部先端の形状が微妙である。32は、全ての要素が欠山様式である。33と34は、全ての要素が欠山様式である。35は、全ての要素が欠山様式である。36は、全ての要素が欠山様式である。37は、全ての要素が菊川様式である。38は、全ての要素が菊川様式である。39～41が装飾高坏の脚台部である。39は、高い突帯が伊場・欠山様式の装飾高坏の影響であり、内湾した脚端部と円錐形の脚柱部が菊川様式の影響である。40は、突帯とスカシ孔が伊場・欠山様式の装飾高坏の影響であり、内湾した脚端部と円錐形の脚柱部が菊川様式の影響を受けている。41は、突帯が低いことから欠山様式の装飾高坏と推定するが、やや内湾した脚端部は菊川様式の影響を受けている。42は、全ての要素が菊川様式である。

〈鉢〉43は、片口鉢であり、全ての要素が菊川様式である。44は、大型鉢であり、折り返し口縁は菊川様式の影響であり、体部の下方に稜をもつのも菊川様式の影響であろうか。45は、鉢と思われるが、非常に珍しい形状をしている。伊場・欠山様式と菊川様式がお互いに影響しあい、生まれた形状であろうか。46と47は、小型鉢であり、全ての要素が伊場・欠山様式である。

〈甕〉48は、伊場様式新段階の台付甕である。その根拠は、丸味を帯びた口唇部と接合部に巻かれた粘土帯である。49は、欠山様式の台付甕である。その根拠は、台と体部の接合部に巻かれた粘土帯である。50は、小型の台付甕で、時期は伊場様式新段階であろう。

台付甕については、菊川様式と伊場・欠山様式の間に違いはほとんど無く、お互いの影響を調べることは非常に難しい。

東原・芝本の特質（第64図・第65図）東原・芝本遺跡から出土した土器は、次のような特質をもつと考える。①波状紋や扇状紋が比較的遅い時期まで残る、②体部下方の稜が遅い時期まで残る、



第65図　東原・芝本遺跡出土土器 2

③波長または振幅の大きな波状紋を多用する、④碗型の高坏坏部の比率が高い等である。

①伊場遺跡群では伊場様式新段階～欠山様式になると波状紋や扇状紋を施紋する比率が低くなる。特に欠山様式では扇状紋は非常に少ない。しかし東原・芝本遺跡では欠山様式になっても波状紋や扇状紋を多用しているとみられる。例えば第64図の６と９は球胴形の体部からみて欠山様式と考えるが、そこにはまだ波状紋や扇状紋が描かれている。

②菊川様式の影響と推測するが、ナデ肩と体部下方の稜が遅い時期まで残っている。例えば第64図の11は紋様と内湾する口縁部からみて明らかに欠山様式であるが、体部の下方に明確な稜をもっている。

③波長および振幅の大きな波状紋が壺の肩部や口縁部に描かれている。他の遺跡ではほとんど見られない紋様であるが、東原・芝本遺跡の土器では多用されている。第64図の５の口縁部内面と外面、７の壺の肩部、８の壺の肩部、22の壺の口縁部内面などに見られる。

④典型的な山中様式や欠山様式の坏部は少なく、碗型もしくは碗型で先端を少し外へ曲げた坏部が多くみられる。第65図の29～33のような坏部であるが、これらの比率が非常に高い。28もその影響を受けている可能性がある。

（7）石　器

石器・石製品　東原・芝本遺跡から出土した弥生時代の石器および石製品は、打製石斧９点、局部磨製石斧１点、凹石１点、敲石１点、石錐１点、砥石10点、石製紡錘車１点、不明円形石器１点、

		個数	遺跡名	調査次数	調査区	出土遺構	参考文献	備　考
1	打製石斧	1	東原	30次	1区	SB118	『東原遺跡2007』	
2	〃	1	東原	30次	2区	SX202	『東原遺跡2007』	打製石包丁か？
3	〃	1	東原	30次	4区	SD417	『東原遺跡2007』	長床様式期か？
4	〃	1	東原	30次	5-1区	SB520	『東原遺跡2007』	
5	〃	1	東原	30次	5-1区	SB523	『東原遺跡2007』	
6	〃	1	東原	30次	3区	SX301	『東原遺跡2007』	打製石斧か疑問？
7	〃	2	東原	34次	A区	SK06	本報告書	
8	〃	1	東原		B地点		『浜北市史』資料編	
9	局部磨製石斧	1	東原		B地点		『浜北市史』資料編	
10	凹石	1	東原	33次	5－8・9区	SX01	『東原遺跡33次』	
11	敲　石	1	芝本		H地点		『浜北市史』通史・上巻	
12	石　錐	1	東原	30次	5-1区	SB520	『東原遺跡2007』	
13	砥　石	1	東原	29次	B地点	SX01	『東原遺跡2002』	
14	〃	2	東原	30次	5-1区	SB517	『東原遺跡2007』	
15	〃	1	東原	31次	5-2区	SF503	『東原遺跡2007』	
16	〃	1	東原	31次	5-5区	SF5523	『東原遺跡2007』	
17	〃	3	東原	34次	A区	SB10	本報告書	
18	〃	1	東原	34次	B区	SB22	本報告書	
19	〃	1	芝本		H地点		『浜北市史』通史・上巻	
20	石製紡錘車	1	芝本		H地点		『浜北市史』通史・上巻	
21	不明円形石器	1	東原	31次	5区	表土	『東原遺跡2007』	環状石斧未成品か？
22	管　玉	3	芝本			1号周溝墓	『浜北市史』資料編	

表９　東原・芝本遺跡出土石器・石製品一覧表

管玉３点であり、これがすべてである。広い面積を発掘調査したにも関わらず、石器・石製品の出土が少ないことと、石器類が弥生時代後期中葉～後葉の集落遺跡とは思えない組合せであることに気づく。具体的には、大陸系磨製石器（蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧）が出土していない、打製および磨製石鏃が全く発見されていない、打製石斧が多い、砥石が多い等である。

なぜこのように奇妙な組合せが生じたのか、その原因として下記のような可能性が考えられ、今後の検討課題である。

①縄文時代の遺構がある可能性。実は、第33次調査で縄文時代晩期の馬見塚式土器（深鉢の上体部）が出土している。そして今回の第34次調査でも縄文時代の石材５点と剥片７点が出土した。東原遺跡に縄文時代の遺構がある可能性が高い。

②鉄器に替わっていた可能性。東原遺跡は東西交流路の要所に位置することから、鉄器の伝播時期が早かったと思われる。多くの道具が鉄器に替わっていたのなら、石器が少ないことも納得できる。しかし現在までに東原遺跡の弥生集落から出土した鉄器は竪穴住居から発見された不明鉄器１点のみである。

第２節　その他の時代

（１）縄文時代

縄文時代の遺物　これまでは東原遺跡に縄文時代の遺構と遺物は存在しないとされてきたが、再検討すべき時期にきている。第33次調査で検出された竪穴住居（SB11）から縄文時代晩期の馬見塚式の深鉢型土器が出土しており、また同調査で凹石が発見されている。そして今回の第34次調査でも縄文時代の石核５点と剥片７点が広い範囲から出土している。これらの遺物から言えることは、一定の期間にわたって縄文人が東原遺跡に居住していたという事実である。また北へ約1.5㎞離れた芝本遺跡Ｂ地点では条痕紋土器が出土しており、ここまで縄文集落が南下していたことが確認されている。したがって僅かに離れているだけの東原遺跡に縄文集落が存在しても不思議ではない。

周辺の縄文遺跡　草創期の遺跡と遺物は発見されていない。早期の遺跡は大屋敷Ⅰ遺跡と茶ノ木田遺跡がある。大屋敷Ⅰ遺跡で粗縄文土器２片が表面採集されており、また第２東名高速道路工事に伴う発掘調査において確認された茶ノ木田遺跡で粗縄文土器が出土している。前期の遺跡と遺物は発見されていない。中期になると遺跡数が急激に増加し、２つのグループに分かれる。ひとつは宮口とその南の河岸段丘上に分布する大屋敷Ⅰ遺跡や栂池遺跡等のグループであり、もうひとつは根堅に広がる丘陵端に分布する北谷遺跡、勝栗山Ⅰ遺跡、向山Ⅱ遺跡等のグループである。

遺跡の南下　後者のグループを見ると、勝栗山Ⅰ遺跡→北谷遺跡→芝本遺跡Ｂ地点というように、中期～晩期にかけて丘陵端から河岸段丘に下り、さらに段丘上を平野に沿って南下する傾向が認められる。その最南端である芝本遺跡Ｂ地点の先に東原遺跡が位置している。この南下傾向は弥生時代から古墳時代まで続いていたとみられる。

打製石斧　９表に示したように、東原・芝本遺跡から打製石斧が非常に高率で出土している。こ

こで問題となる点は、打製石斧は一般的には縄文時代の遺物であり、弥生時代中期末頃まで残る例はあるが、東原・芝本遺跡のように弥生時代後期中葉～後葉まで残っている例は非常に珍しい。そこで東原・芝本遺跡の打製石斧は縄文時代の遺物が、弥生時代の遺構に混入したのではないかという疑問が湧く。事実、打製石斧が出土した34次のSX06や30次のSX202は土器集積遺構であり、土器と共に大量の礫が伴っていた。その礫の中に打製石斧が紛れ込んでいた可能性がある。また東原遺跡では廃絶後の竪穴住居の掘方に多量の土器と多量の礫が捨てられている例が多くみられる。その礫の中に打製石斧が入っていたのではなかろうか。いずれにしても、竪穴住居から出土したとされる打製石斧が確実に竪穴住居の床面に伴うものなのか、それとも廃絶後に竪穴住居に捨てられた礫の中にあったものなのかを再検討する必要があろう。

（2）古墳～奈良時代

古墳～奈良時代の遺構は、30次調査の１区および２区から第29次調査のＢ区を通り、さらに南東の東原遺跡Ｄ地点までの、南北約500m、東西約200mの長楕円形の範囲に分布している。ただし南半部分は古墳時代前期の遺物と遺構が主体を占め、北半部分は奈良時代の遺物と遺構が主体を占めていることから、集落が時期により場所を少し移動した可能性がある。遺構と遺物は、東原遺跡第２次、第３次、第25次、第27次～第30次発掘調査で発見されている。

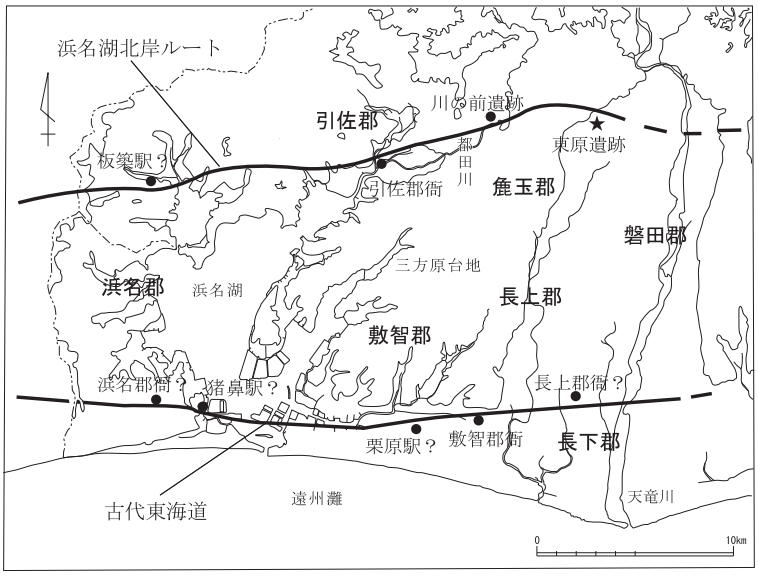
最初の発掘調査（1954）は、Ｄ地点の南端を東西に流れる用水路工事の際に多量の土器が転がり出たことから、故松村陸平氏を中心とする麁玉村郷土研究会が行った。公式な記録がなく、調査場所および遺構等に不明な点が多い。土師器の甕などが発見されている。

第２・３次調査（1965･1968）は、東原遺跡Ｄ地点の中央部を中心にしてトレンチによる発掘調査が浜名高校史学クラブによって行われた。その結果、竪穴住居が３軒（１～３号住居址）と土坑２基が検出され、古墳時代後期の土師器等が出土した。

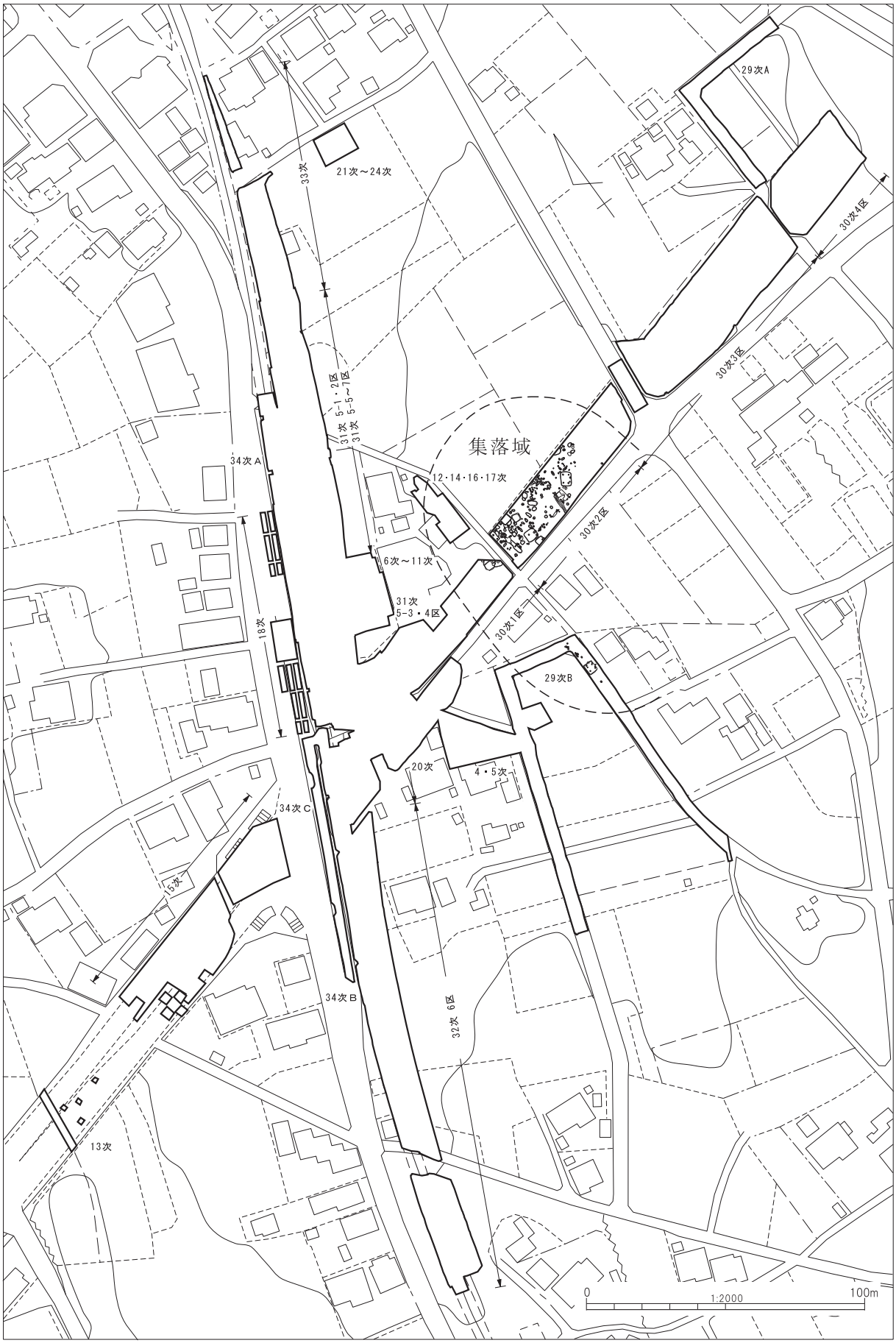
第25次調査（1987）は、東原遺跡Ｄ地点の西端で浜名高校史学部によって行われた。地表面と包含層に古墳時代後期の土師器片が散在していたが、遺構は検出されなかった。

第27次調査（1990）は、東原遺跡Ｄ地点の南端の発掘調査が浜北市によって行われた。幅3.1m～4.6m、深さ20㎝の溝状遺構が検出され、古墳時代後期の土師器等が出土した。

第28次調査（1994）は、東原



第66図　律令期の西遠江



第67図　東原遺跡遺構合成図（奈良時代）

遺跡Ｄ地点の北東端の発掘調査が浜北市によって行われた。竪穴住居１軒、掘立柱建物２軒、土坑、小穴が検出され、奈良時代前半の土器が出土した。

第29次調査Ｂ地点（2000）は、東原遺跡Ｄ地点の北側の発掘調査が浜北市によって行われた。第29次調査Ｂ地点の北東端で奈良時代の竪穴住居１軒（SB16）および土師器と管状土錘が多数出土した。

第30次調査１区では、東端で奈良時代前半の焼失した竪穴住居（SB120）が検出され、多量の土器と炭化材・焼土が出土した。出土した土器の７割が土師器であった。

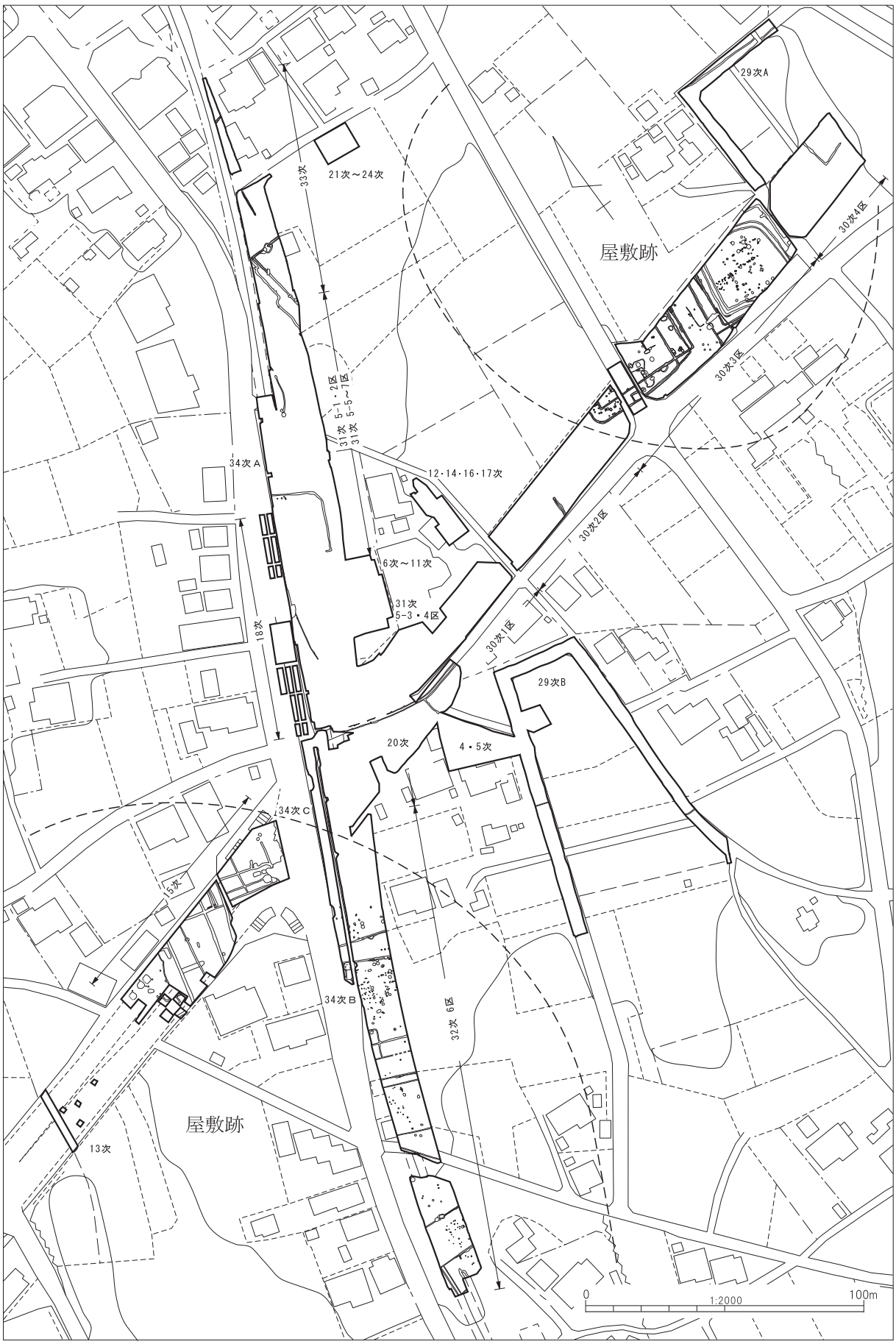
第30次調査の２区では、奈良時代前半の竪穴住居が９軒（SB201～SB209）の他に土坑や小穴が多数検出されている。

（3）江戸時代

江戸時代の遺構と遺物は、東原遺跡の全域に分布しているが、特に第30次調査の２区東端および３区を中心とする北地区と、第15次調査区から南東方向の第34次Ｂ・Ｃ区と第32次調査区にかけての南地区に集中している。

北地区では、第30次調査２区と３区で江戸時代後期の屋敷地が２区画が発見され、東側の屋敷地で母屋および納屋と推定する建物跡が２棟検出された。また西側の屋敷地では、建物跡は発見されなかったが、厠と井戸が検出された。

南地区では、東西および南北に伸びる江戸時代後期から明治初頭の屋敷地に伴う区画溝が多数検出された。区画溝は深く、大量の土器と礫が廃棄されていた。区画内には土坑および小穴群が広がり、建物が想定されている。



第68図　東原遺跡遺構合成図（江戸時代）

参考文献

石黒立人　2009「凹線紋系土器期前後の伊勢湾岸域」『中部の弥生時代研究』中部の弥生時代研究刊行委員会

岩瀬彰利　1996「縄文・弥生時代の煮炊き方法」『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

2001「東海地方中部における条痕文期住居の様相」『三河考古』第14号

大野勝美　1996「いわゆる伊場様式の装飾高坏」『湖北考古（1）』湖北考古同好会

2004「銅鐸形土製品考―銅鐸祭祀の東限を考える―」『(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

2010「敷地銅鐸に関わる諸問題について」『西の谷遺跡』(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木敏則　2001「三河・遠江系土器の移動とその背景」『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』西相模考古学研究会・小田原シンポ準備会

浜名高等学校史学クラブ　1963『伎部』1

1968『伎部』2

1970『伎部』3

1974『伎部』5

1979『伎部』6

浜名高等学校史学部　1983『伎部』11

静岡県西部農林事務所・浜北市教育委員会　1994『東原遺跡Ｄ地点』

2002『東原遺跡Ａ地点・Ｂ地点』

浜北市教育委員会　1978『東原遺跡（Ⅰ）』

1980『浜北市東原遺跡（Ⅱ）』

1981『浜北市東原遺跡Ｄ地点』浜北市史資料３

1982『浜北市東原遺跡（３）』

1983a『浜北市東原遺跡（４）』

1983b『浜北市東原遺跡Ｂ地点（１）』浜北市史資料４

1991『東原遺跡Ｄ地点』

2002『東原遺跡』

浜北市　2004『浜北市史』資料編　原始・古代・中世

浜松市教育委員会　1982『伊場遺跡遺物編３』

1997『伊場遺跡遺物編７』

(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所　2006『森町円田丘陵の遺跡』

2007『東原遺跡』

2008『井通遺跡Ⅱ』

2008『上ノ平遺跡』

2008『矢畑遺跡』

2009『網掛山古墳群・片瀬遺跡』

2010『駿河山遺跡Ⅲ』弥生・古墳・歴史時代編１

2010『西の谷遺跡』

(財)浜松市文化協会　1989『山の神遺跡』

1991『梶子遺跡Ⅷ』

1997『鳥居松遺跡』

2004『梶子遺跡Ｘ』

(財)浜松市文化振興財団　2008『東原遺跡33次』

2009『北神宮寺遺跡』

西相模考古学研究会・小田原シンポ準備会　2001『弥生後期のヒトの移動～相模湾から広がる世界～』シンポジウム資料集

静岡県考古学会　2002『静岡県における弥生時代集落の変遷』

第11回東海考古学フォーラム　2004『伊勢湾岸における弥生時代後期を巡る諸問題　山中式の成立と解体』

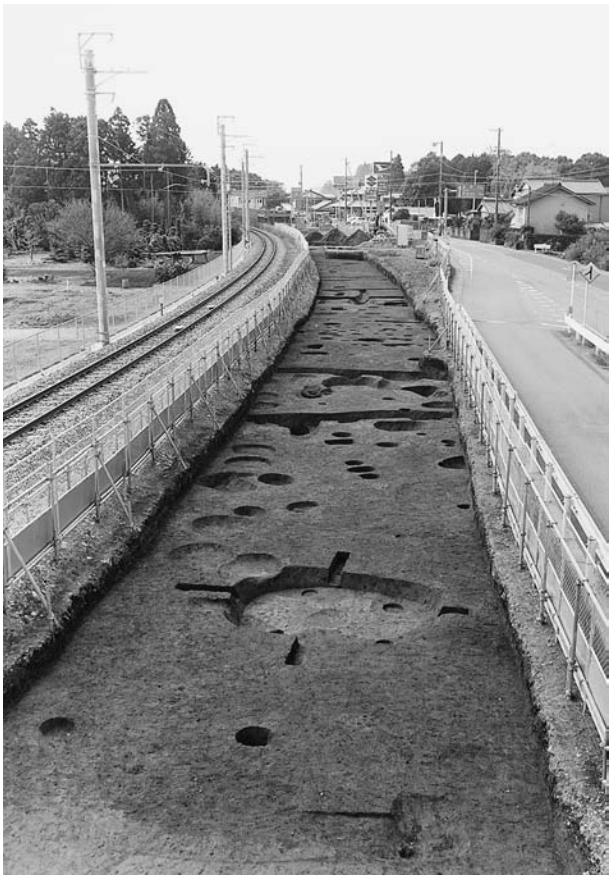
中部の弥生時代研究刊行委員会　2009『中部の弥生時代研究』

写　真　図　版

図版 1

A　A区全景（南から）

B　A区中央部（北から）



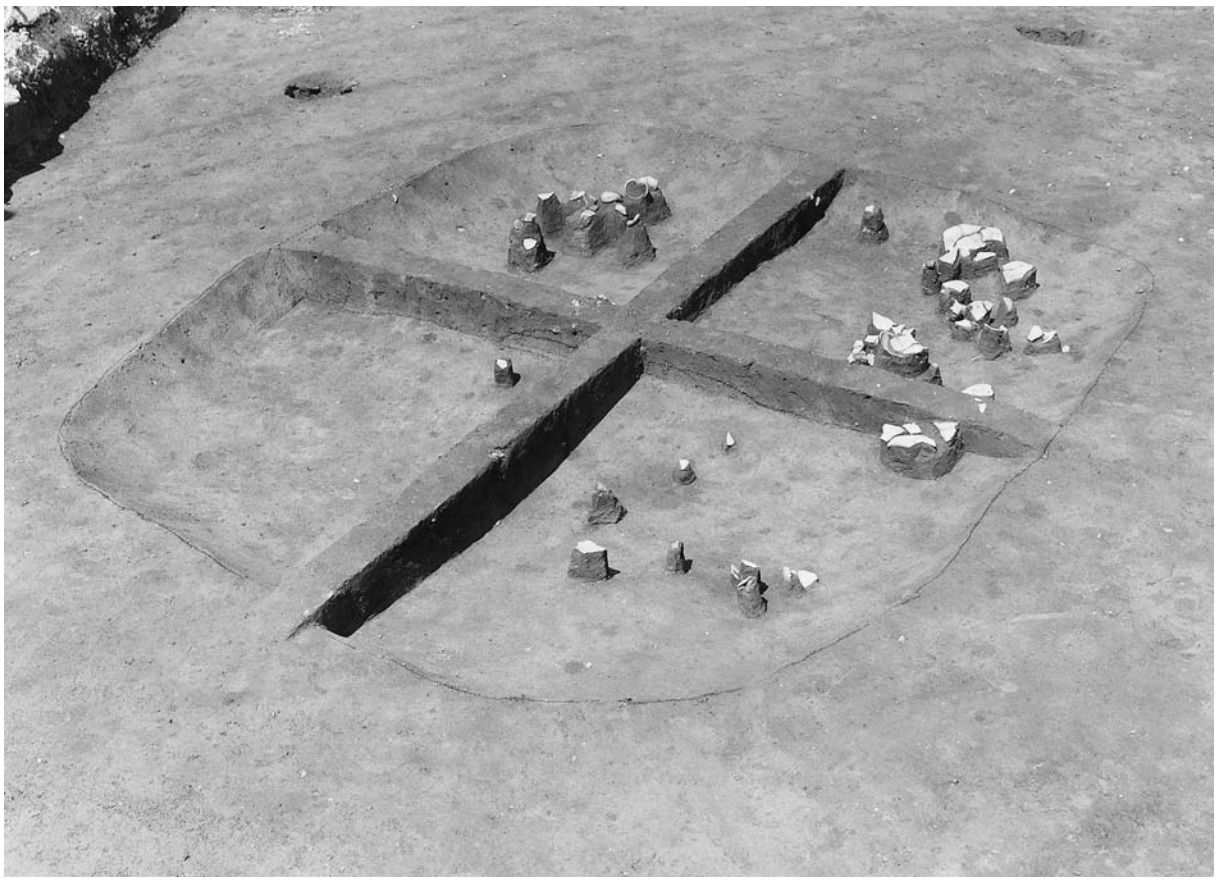
A　B－1・2区全景（北から）

B　B－1・2区全景（南から）

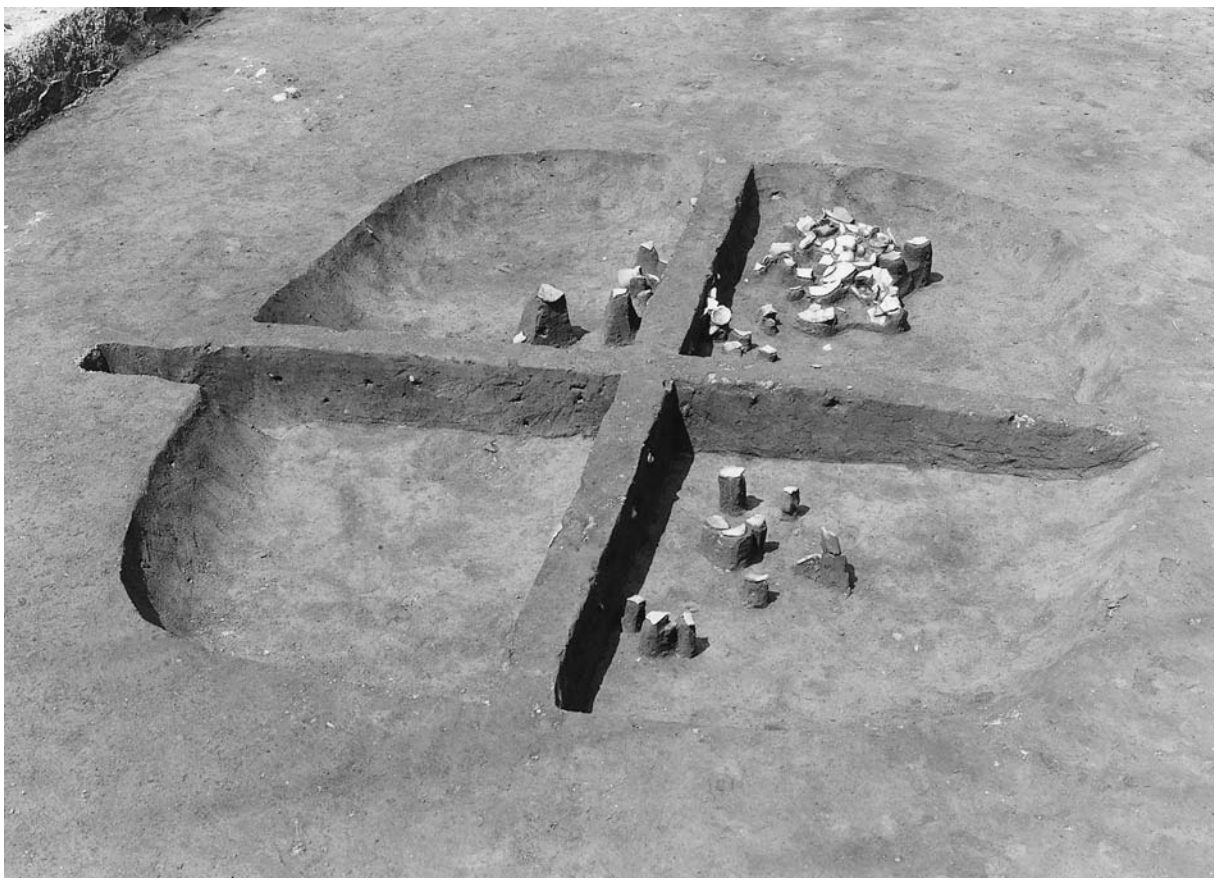
C　B－3区全景（南から）

D　C区全景（北から）

図版 3



A　SB01（南から）



B　SB02（南から）

A　SB04･05･08･09（東から）

B　SB03（西から）

C　SB05（南から）

D　SB06（西から）

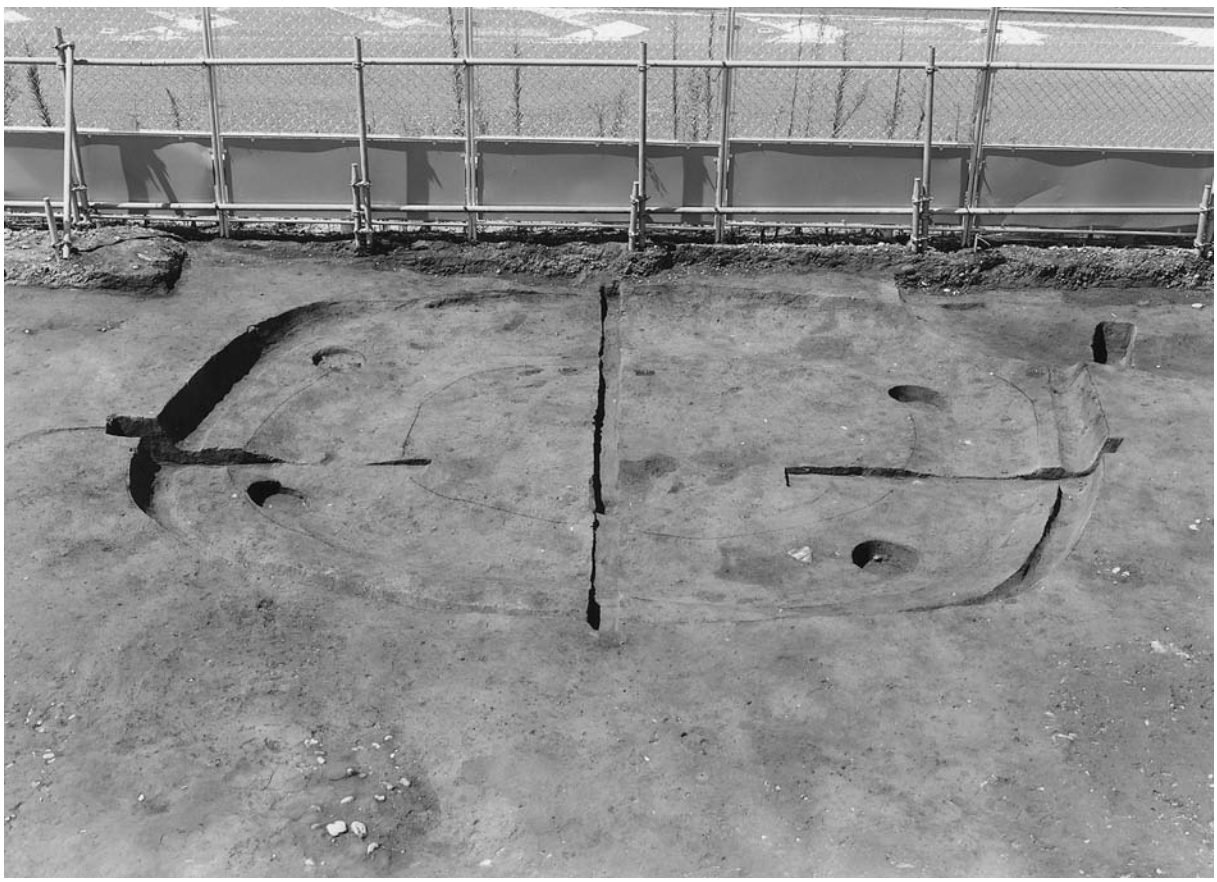
E　SB07（東から）

図版 5

A　SB10床面（東から）

B　SB10完掘（東から）

A　SB11検出時（東から）



B　SB11完掘（東から）

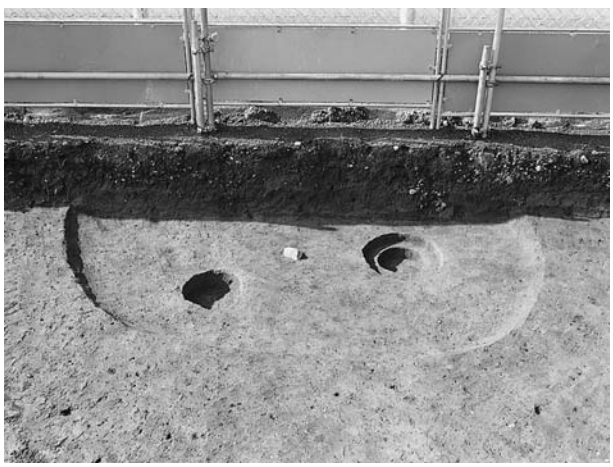
図版 7

A　SB14･16･17（南から）

B　SB14（南から）

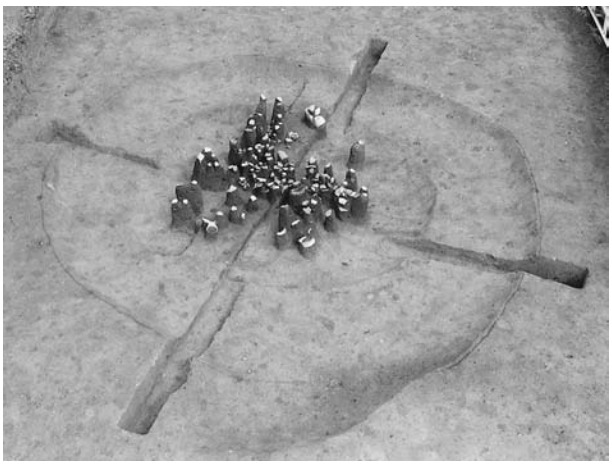
C　SB15（東から）

D　SB18（南から）



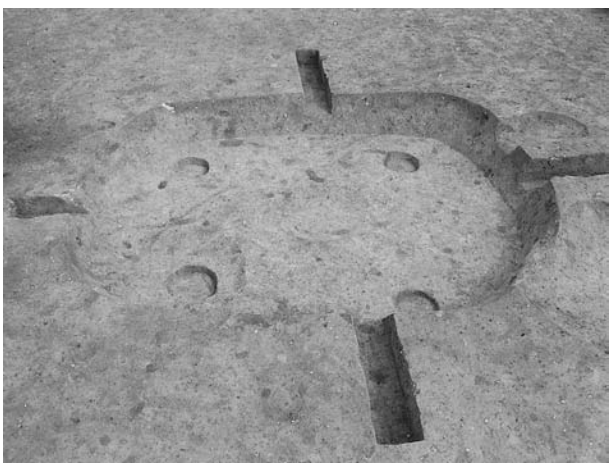
E　SB19（東から）

A　SB20･21（北から）



B　SB22検出時（南から）

C　SB22完掘（北から）



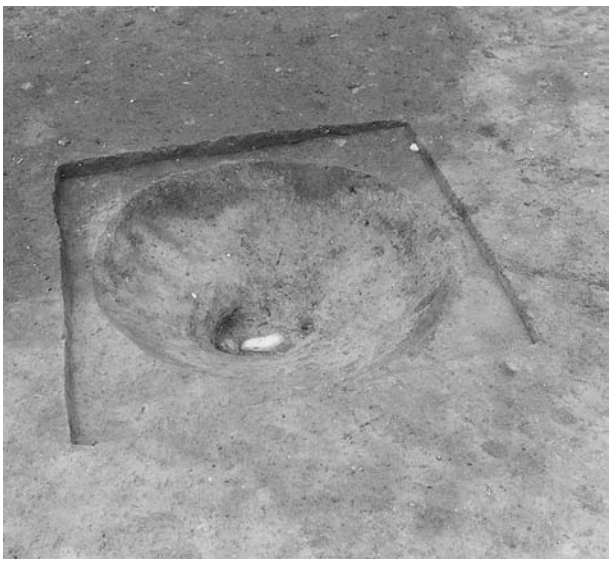
D　SB23完掘（南から）

E　SK06（東から）

図版 9

A　SB11一括土器（東から）

B　SP01壺出土状況（南から）

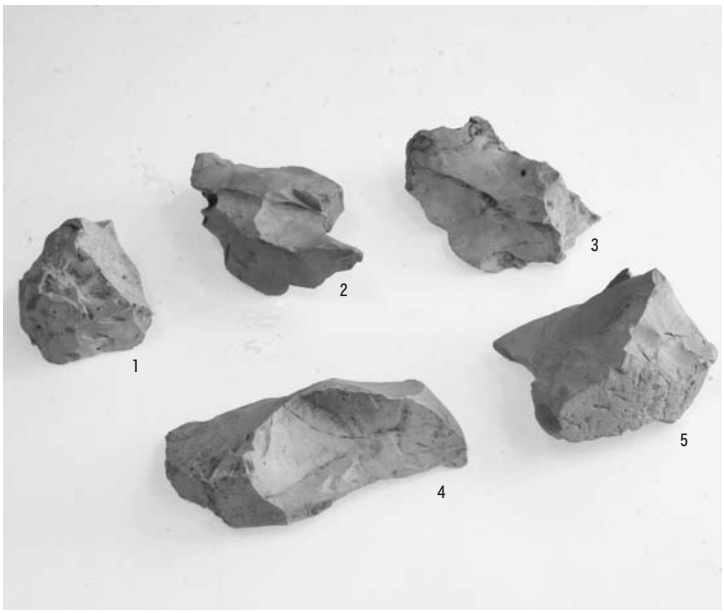


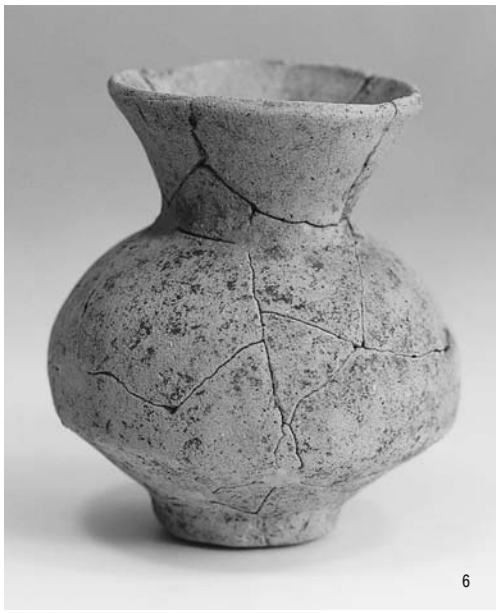
C　SK05（南から）

D　SD17・18（南から）

E　SD06（北から）

F　SD11（東から）





出土遺物

図版11

7

21

8

40

19

54

出土遺物

59

65

61

66

64

68

図版13

70

125

126

102

140

108

109

143

出土遺物

報告書抄録

書名		東原遺跡（ひがしばらいせき）　３４次				
副書名						
巻次						
シリーズ名・番号						
編著者名		大野勝美				
編集機関		浜松市教育委員会 〒430-0929　浜松市中区中央1-2-1　イーステージ浜松オフィス棟 浜松市生活文化部文化財課 （浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-0946　浜松市中区元城町103-2　　053(457)2466				
発行機関		財団法人　浜松市文化振興財団 〒430-7790　浜松市中区板屋町111-1				
発行年月日		2011年３月10日		発掘面積		2,420㎡
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	発掘期間
ひがしばらいせき 東原遺跡	しずおかけんはままつし 静岡県浜松市 はまきたくしんばら 浜北区新原	22202	6-01-33	34° 49′ 11″	137° 47′ 49″	2009年 ７月30日～ 12月９日
発掘原因	記録保存調査					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		
東原遺跡		縄文時代		石核、剥片		
	集落	弥生時代	竪穴住居跡、 土坑、小穴、溝	弥生土器、打製石斧、砥石		
	集落	江戸時代	土坑、小穴、溝	陶磁器、すり鉢、石臼		

東 原 遺 跡 34 次

2011年 3 月10日発行

編集機関　浜松市教育委員会
発行機関　財団法人　浜松市文化振興財団
印　　刷　松本印刷株式会社